風さそふ花よりもなほ我はまた春のなごりをいかにとかせん

大石良雄

武者小路實篤 著

大日本雄辯會講談社 版

自序

復讐そのことを僕は是認してゐない。しかし男子として腹が立つことがあることは自分も認める。それは正義觀の一種のあらはれだ。不正にたいする怒り、正義を求める心が、當時の風習や、武士道と結びついて大石等の復讐になつた。そして四十六人の人が同時に切腹した。このことが當時の人の心を動かしたことは、當然すぎることで、三勇士や、空閑少佐にもおとらず、當時の人心をゆすぶつたにちがひない。

しかし自分が大石を愛するのは、彼が復讐した、復讐しかたの内にあらはれた人間性にたいしてだ。彼はあんな出來事に逢はないでも優れた人物にはちがひなかつたが、しかし異常時にその人の實力はあらはれるもので、自分の特に感心し、興味を持つのは大石その人の實力である。大石でなくとも復讐は出來たであらう。だが大石でなければあゝ云ふおちついた、拔け目のない、奥床しい、注意のゆきとゞいた、復讐は出來なかつたであらう。復讐そのことよりも、寧ろ死を前に見た男の一年有半の生活、心づかひが面白いと云へる。

城をあけわたす迄の心づかひ、城を受けとりに來たものにたいする態度、復讐を誓ふ迄の心づかひ、商人や人民になるべく損をさゝない心づかひ、之等に大石らしい處があらはれてゐる。それは大石一人の力ではないかも知れないが、大石一人がゐなかつたら、すつかりかはつたものになつたらうと云ふ想像はつく、大石の手紙はそれを示してゐる。

彼はいつも事の起る前に手紙をかいてゐる。その手紙も名文である。(本文の内には少し今風に讀みやすくなほした處があるが、大體原文通りにしておいた)。殊にその後の事件の發展が未然に書かれてゐて、事件がまちがひなくその通り發展してゐる處を見ても、大石はたゞの人間ではなかつたことがわかる。たしかに頭のよく動く、敵と味方の心理を知つてゐる男であつた。しかも小さい策士ではなかつた。

彼は道樂者ではあつた。だが名を惜しむ、潔癖な、そして思ひやりのある男だつた。山科を去る時、牡丹を送る話でも、いよ〳〵復讐する一兩日前に使つてゐる者に手紙をことづけた時、その人々の運命を氣にする處なぞも、大石らしく美しい話である。

彼は奥ゆかしい男で、それ等の點で國民の寵兒になる素質を持つてゐる。

人間は誰でも死なければならないものだが、死を恐れる、それだけ死を恐れない者に感心する。少くも死ぬことを知つて、それを恐れずになすべきことをするものを尊敬する。復讐は最上の美徳ではないが、しかし當時にあつては主君のための復讐は最上の美徳でもあつたにちがひない。今でも大石等が、死を恐れずに復讐しなければならなかつた氣持はわかる。

死を恐れて變節したものが多ければ多いだけ、最後まで變節しなかつた死を恐れるよりも、武士道に反くことを恐れたものは、尊敬していゝ。なすべきことをなすために死を恐れないことはたしかに美しい。

大石達は切腹したので、今日まで生きられたと云へる。

自分はある事情で大石良雄をかくことになつたが、大石を通してでなければかけないものが、何かあつたと思つて、之をかけた事を喜んでゐる。

武士として死を恐れない意氣、一旦きめたことをやりとげる意志、それは男らしいものだ。復讐と云ふものを當時の風習に從つて美徳とすれば、彼は智もあり、仁もあり、勇もあつた代表的な男である。彼も時代の子ではあるが、しかし其處で彼は實に彼らしく生きぬいた。

其處が面白い所である。

いろ〳〵の變化があり、事件があり、人情がある。忠臣藏の事實談は、事件の調べもくはしく、當時大問題になり、大人氣があつただけ材料も比較的よくのこつてゐる。

僕は之をかくのには事實談は、殆ど全部、福本日南の元祿快擧錄によつた。事實を知りたい人は同書についてもらふ方がいゝと思ふ。僕は事實をなるべく尊重して、事實を變化させなかつた。たゞ大石良雄を通して自分のかきたいことをかいたから、小說として見てもらふ方がより本當と思ふが、しかし大石良雄がどんな人か、赤穗の人々がなぜ復讐したか、どう云ふ復讐しかたをしたかは、之を見てもらへばはつきり感じてもらへると思ふ。

小說的統一をとり、全部を貫く大事なものを掘りあてゝ、それをうまく讀者に見せるためには、この本は書かれていゝ本だと思つてゐる。人々は存外赤穗の義士達の事件の眞相を知らない。そして知る機會に接しても、何か知識的にはわかつても情的にはわかりにくい、殊に具體的にはわかりにくいやうに思ふ。僕も之を書くので四五種類よんで見たが、どうも大事な處がぴつたりしない。武士道的の感想が多すぎたり、型で見たり、淺く見たりしてゐるものが多かつた。

自分のものについては他の人にゆづるが、僕はありすぎる大石内藏助をあつかつた本の内にこの本を一冊加へることを無意味とは思つてゐないのだ。

僕は大石の心情の全部とは云はないが、深い處、全面的な處にわりにふれることが出來たと思つてゐるが、どんなものか。

ともかくあの時分大石良雄のやうな境遇にゐたら、大石良雄のやうな態度をとるのが、結局一番美しいことなのだと思ふ。僕はその人間大石の美しさ、及び大石を通して人間それ自身にふれることを主にして、之をかいたのである。之をよんで人生の姿を瞥見してくれる者があれば幸である。

昭和七年六月

武者小路實篤

目次

大石良雄

武者小路實篤

一　吉良淺野を憎惡した

吉良上野介は淺野内匠頭を憎惡した。

なぜ憎惡したかと云ふと淺野内匠頭がけちだからだ。

吉良と淺野とどつちがけちか。かう聞かれゝば誰もが吉良の方をけちだと思ふであらう。だが一人例外があつた。それは吉良自身である。吉良にとつては淺野内匠頭くらゐけちな奴はないと思つた。それにどうも救はれない馬鹿に思へた。自分があんなにあてつけを云つて進物をよこせと云つたのに、今だに何にも持つて來ない。持つて來ないことを正義のやうな面をしてゐる、けちな奴に限つて正義面する。吉良はさう思ふと、ます／＼腹が立つのだつた。

實際吉良は他のことにはけちだつたが、賄賂にかけてはけちではなかつた。彼は利害打算にはくはしい男だつた。

だからきゝめがあると思ふと賄賂を思ひ切つてつかつた。太平な御世に出世をしようと思ふと、賄賂が一番短道であり、一番有效であることを彼は知つてゐた。そして思ひ切つて賄賂をつ

かふことを、勇氣があり、氣まへのいゝことのやうに思つてゐた吉良にとつては、淺野內匠頭がけちに見えるのは當然なことだつた。

淺野內匠頭はそのことに氣がついてはゐたが、彼は又、賄賂をつかふといふことが嫌ひな質であつた。彼は太平の世の中に、賄賂をつかつて、上に媚びへつらつて出世をする人々が、好きになれない質だつた。

だが今度だけは、家來が彼に相談せずに、賄賂を持つていつてくれるなら、見のがしてもいゝくらゐには思つてゐたのだが、家來から相談されて見ると、自分の口からは、賄賂を持つてゆけとは云へなかつた。たゞ何となく腹が立つてくるのだつた。

そして家來から、彼の相役の伊達家では上野介に莫大な賄賂を贈つたらしいといふことを聞いた時、彼はなほ反感を感じないわけにはゆかなかつた。

『伊達家はどうあらうと、俺は賄賂をつかふことは大嫌ひだ。俺にはそんな恥知らずのことは出來ない。』

かう主人に云はれると家來も、どうしやうもなかつたのだ。心配してゐる中に日はたつてゆく。

淺野家の江戸詰の家來に、氣がきいた人間がゐたら、主人の氣質と、上野介の氣質を見て、どんなことが起るか、大がい察しがつき、その恐ろしい結果に對して、どう處置をとればいゝか知つたかも知れない。しかし淺野家の江戸詰の家來は、いゝ人はゐたが、つぶしのきく人はゐなかつた。主人の命令を絶對のものとして、たゞ不安を感じてゐるだけだつた。

二　珍らしい男

淺野内匠頭長矩は、初め勅使の御饗應掛を命ぜられた時、名譽には思つたが、氣がすゝまなかつた。それで初め辭退したのだが、老中から、『萬事吉良が知つてゐるから、それに聽いてやればまちがひがない。』と云はれて、辭退することも出來ず、承諾したのだつた。

處がその唯一のたよりに思ふ吉良は、彼には何にも教へてくれないのだ。さすがにやきもきしないわけにはゆかない。

『賄賂を持つて來たら教へてやる。』と云ふ態度を吉良は露骨に示してゐる。しかし淺野は、さうとるのは惡いやうに、一方思ひもしたのだ。

淺野自身、賄賂をもらつたら怒る人間だから、他人も怒りさうな氣がする。吉良はそんな人間でないことは知つてゐてもいゝはずだが、それは知つてはゐるが、本當には知ることは出來なかつたのだ。

そして吉良に『勅使に對してどうしたらいゝか。』をたづねた時、吉良から『進物が第一でござる。毎日進物を贈りなさい。』と云はれた時、自分の耳を疑ひ、そして、どうも腑におちないので、土屋相模守に相談に出かけた。

相談された土屋は驚いて、そんなことはないと云つた。

あとで土屋は柳澤吉保に笑つて云つた。

『淺野には驚いた。吉良も吉良だが、淺野も淺野だ。いゝ取組だ。俺の處へすました顏して、勅使に毎日賄賂を贈つてもいゝのでせうかときかれたのには驚いたよ。』

柳澤も、それをきくと愉快さうに笑つた。

『珍らしい男だね。』

三　思ひ知らせてやる

吉良は柳澤からその話をきかされた時、ます〳〵あきれざるを得なかつた。

同時に、がつかりした。これでは淺野は、俺の處へ何にも持つて來ないつもりだな。三萬石の伊達家でさへ、加賀絹澤山と、黄金百枚、それに探幽筆龍虎の畫をくれたのだから、五萬石の淺野家からは、もう少し多くの品を持つて來てもいゝはずだと思つてゐた。處がよこしたのは鰹節だけだ。

『人を乞食とでも思つてゐるのだらう。』

彼はどう考へても不愉快であつた。

吉良は金は澤山持つてゐたが、金は持てば持つ程、ほしくなるものだ。それに吉良は、もう少しで大名になれさうに思つてゐた。又それ以上齡とるに從つて、慾と云ふものは增すものらしい。

吉良はあてにしてゐた金が入らないことは、實に不愉快であつた。理窟も何もないのだ。

『淺野のやうなけちな男にあつたことはない、俺を何と思つてゐるのだ。』

彼は侮辱されたやうに思ふのだつた。

『思ひ知らせてやる。』

上野介の腹の蟲はさう決心した。

自分に大きな損失を與へてくれた淺野を、憎惡しないわけにはゆかなかつた。元來上野介は意地惡の處もあつた。人をいぢめるのは嫌ひではなかつた。その上野介が惡意を持つたのだから、淺野にとつてはこのくらゐ迷惑なことはない。

四　源五右衛門

『どうだつた、疊はかへろと云つたか。』

『そんなむだなことに金をつかふ必要はないとの御返事でした。』

『さうか。』

淺野内匠頭は二百餘疊の疊をかへる必要がないことは不愉快ではなかつた。彼は吉良上野介の言葉の裏を見るには若かつたのだ。

まさか見えすいた嘘は云ふまいとも思つたのだ。勅使の休憩されるお宿の疊をかへないのも惡いやうに思つたが、上野介にさう云はれると、それで安心した。いくら勅使でも、一寸の間の御休息に、一々疊をかへるのは大變だ、そんな必要はなかつたのかと思つた。

處が前日になつて、伊達家では勅使の御休息所の疊を、全部とりかへてゐる知らせがあつた。

淺野はそれを知ると、烈火のやうに怒つた。

『人に恥をかゝせるつもりだな。』

彼はすぐ、

『源五右衛門をよべ。』

と云つた。そして、

片岡源五右衛門が見えると、勅使の休息所の疊を今晩中に表替するやうに命じた。

源五右衛門はすぐ承知した。

翌朝、内匠頭は起きると、源五右衛門をすぐよんだ。

『どうだ。』

『やつとまにあひました。全部表替をいたさせました。』

『さうか、御苦勞であつた。お前ならきつとやると思つて、安心してゐたが、よくやつた。』

と云つた。

源五右衛門の目には涙がうかんだ。

『お殿樣。』

『なんだ。』

『御用心なさりませ。』

『吉良のことか、心配しないでいゝぞ。』

『はつ。』

五　堪忍

浅野は吉良の顔を見るのがいやであつた。浅野はなるべく吉良のことは無視しようと思つてゐた。あんな奴を人間だと思ふと腹が立つ、狐か狸だと思つてゐればいゝ。

さう自分に云つてきかせはしたが、しかし彼は儀式のことについては、一々吉良にきかなければならなかつた。

十二日は勅使、院使が登城され、十三日にも御能の 催 があり、御饗應があつたが、それはどうにかすぎた。

勿論、その間にも、淺野は隨分恥辱を忍ばねばならなかつた。吉良は伊達右京亮に對する態度と、淺野に對する態度とは、よくもかう、露骨にちがへられると思ふ程だつた。

伊達には實に丁寧に敎へたが、淺野が何か云つても耳が聽えないふりをして、知らん顏をしてゐた。そして何かとつらくあたつた。

しかし殿中だと思ふのと、御役目が御役目なので、彼は辛抱するだけ辛抱した。そして伊達のするのを横目で見て眞似をする自分の姿が、いぢらしくも、滑稽にも見え、この上なく恥かしいことに思へた。

そして、あともう一日か二日の辛抱だと思ふと、ほつとしたやうな氣になつた。この二三日程、彼は自分が賤しく思へたことはなかつた。

『ならぬ堪忍、するが堪忍。』
そんな言葉を彼は心にくり返した。
彼は何度も泣きたいやうな氣がした。そして皆が鷹揚で明い顔して振舞つてゐるのを見ると、自分の姿が賤しく見えた。
吉良は又、何もかも知つて、實に樂々と、自覺をもつて振舞つてゐる。そして淺野が困るのを、横目で見ては嬉しがつてゐる。
『けちん坊め、思ひ知つたか。』

六　殿中刃傷

かくて三月十四日が來た。
この日將軍綱吉公が自分で勅答をする日で、大小名が巳の上刻（午前十時）に登城することになつてゐた。
御接伴掛の淺野内匠頭は少し早めに登城した。つゞいて伊達右京亮も見え、高家の人々も見え

た。吉良上野介は殊に上機嫌に見えた。他の人も續々と見えた。

淺野内匠頭は一種の强迫觀念で、吉良に話しかけないではゐられなくなつた。それで吉良のそばにゆき、丁寧に、

『御傳奏の方々ももうお見えになる時分ですが、御着の時、御玄關の御式臺で御迎へするのですか、御式臺の下へおりて御迎へするのですか。』ときいた。

きくと同時に、まづいことをきいたと思つたが、それと同時に、吉良は露骨に輕蔑を示して、皆に聞えるやうに、意地惡く云つた。

『そんなことを御存知ないのですか、これは驚きましたね。そんなこと御存知なくつて、よく御役目がつとまりますね。御聰明なあなたにも似合はない。あはゝゝゝ。』

淺野は衆人の前で侮辱されたと思つた。そしてかつとなつたが、しかし彼はまだ常識は失はなかつた。場所がらを知つてゐた。

其處へ、將軍家の御生母桂昌院殿からの御内使、梶川與三兵衛が來た。そして淺野を見るとすぐ、淺野の處へ來て、丁寧にお辭儀をして云つた。

『上樣の御勅答の御挨拶がすみましたら、私にまでお知らせください。』
『承知しました。』
淺野は侮辱されたあとだつたので、梶川が自分を重んじて自分に話しかけてくれた事が、涙が出る程へんに嬉しかつたのだつた。
所が吉良上野介は機會をのがさずに云つた。
『何のお打合せか知りませんが、御用はこの吉良がきゝませう。内匠頭は何一つ御作法のことは御存知ないのですから。えゝ何一つ。』
吉良は人いちめの快感を感じ出して來た。
だがそれを聞くと同時に、お大名育ちの淺野は、かつとしてしまつた。前後も忘れてしまつた。怒りの絶頂に達してしまつた。時間も所も忘れた。彼が正氣づいた時は、もう吉良を切りつけて、切りそこなつて、誰かに抱きとめられてゐた。彼を抱きとめたのは梶川だつた。彼は荒れ狂つたが、梶川は大力者でどうにもならなかつた。
吉良もたしかに驚いた。彼も時も所も忘れた。彼は逃げようにも逃げられなかつた。腰がいふ

ことをきかなくなつた。彼はやられたと思つた。彼は品川豐後守に助けられて、やつと高家衆の詰所へつれて來られた。

吉良は腰をぬかしたので、刀をぬかないですんだのは運のいゝ男ではあつた。切り合つたら、彼はほめられずにすんだらう。腰をぬかして、逃げる一方だつたので、所をわきまへ手向はなくつて、平和主義に出たと云はれて、彼はあとでほめられた。

しかし淺野の方はもうどうにもしやうがなかつた。彼は吉良をやつつけられないことを知ると同時に刀を御坊主の關久和に渡した。

『殘念、無念。』

彼はたゞさう思つただけで、その他のことは考へる餘裕がなかつた。

だが彼は、心にいくらか餘裕が出來ると同時に、萬事を了解した。

彼は二度吉良に切りつけた。初めの一太刀は頭上を目がけてであつたが、これは烏帽子の鐵の輪にぶつかつて、大した傷を與へなかつた。二度目はもう吉良が倒れてゐたので、肩から背中にかけて切りおろしたが、間が少し離れてゐて、太刀は吉良の肩と背中をかすつて疊でとまつたが、

傷は大したことはなかつた。切る方も切られる方も夢中だつたのだ。

七　一番怒つた男

淺野は萬事を了解したが、しかし後悔はしなかつた。彼はまだ怒りに燃えてゐた。彼の頭は充血して、他のことを考へる餘裕がなかつた。彼は吉良を殺してしまつたら、或は胸がすいて、同時に、いくらか後悔したかも知れない。しかし今はまだ後悔はしなかつた。いや後悔しかける前に、彼は自分のしたことは正當であると思つた。誰でも男なら、あんなに侮辱されゝば怒るのがあたりまへだ。怒らないものは腰ぬけだ。俺のしたことは正しい。家が斷絶しようが、自分が切腹しようが、そんなことはどうでもいゝ。俺のしたことは正しい。誰だつてあの場合、怒る。

又實際、多くの人も吉良が切られたことに同情するよりは、切りつけた淺野に同情した。梶川がとめなければいゝのにと思つたものは存外多かつたのだ。

とめた梶川だつてつい夢中でとめたものの、とめなかつた方が、いゝやうな氣もしたが、しかしとめた方がよかつたと思はうとしてゐた。

しかし、こゝに一人、夢中に怒つた男がゐる。吉良に怒つたのではなく、淺野に夢中で腹を立てた男がゐる。それは誰だ。

將軍綱吉公その人である。

これは又淺野よりは百倍も我儘なお坊ちやんである。淺野侯なぞは彼の目から見ると蚤に等しい。

彼はその時風呂に入つていゝ氣持でゐたのである。今日の儀式に、彼は立派に芝居を演じて見せるつもりで、快感に醉つてゐたのだ。そして風呂から出て、髪をあげ、裝束を着けてゐる所へ、柳澤出羽守が出て來て、

『大へんなことがおこりました。』

と云つた。

『なんだ。』

『これ〳〵で、淺野内匠頭が場所もわきまへず、御役目もわすれて、吉良上野介に切りつけたのでございます。切りつけられました吉良上野介は、場所がらをわきまへ、刀に手をかけずに身を

しりぞいたさうでございますが、なほ追ひかけて、一太刀あびせたさうでございます。』

『馬鹿な奴ぢや。そしてどうした。』

『すぐわきにゐたものが淺野内匠頭をとり押へました。御廣間が血でけがされましたが、いかゞとりはからひませう。』

『馬鹿な奴ぢや、許せぬ奴ぢや、いゝやうにとりはからへ。』

將軍はその時、淺野内匠頭をひねりつぶさないではおかない決心をした。

八　吉良ほめらる

儀式は無事にすんだ。

淺野の役は戸田能登守忠眞に代へられ、廣間は白木書院から黒木書院にうつされた。人々は淺野の切りつけた話で興奮してゐた。

しかし將軍綱吉は、考へれば考へる程、淺野に腹が立つた。

淺野は御目附多門傳八郎の取調べを受けたが、彼はもう度胸をすゑてゐた。

『上野介より何度となく耐へがたい恥辱をうけたので、つい刃傷に及びました。御役目も場所がらもわきまへませんでしたのは、誠に恐れ入りますが、私には他にどうしやうもございませんでした。今となつては、いかなる御仕置も覺悟をしてをります。』

その態度には多門は感心した。

多門は腹の底で、『御尤もです』と云つたが、口には出せなかつた。

淺野は反つて、今自分の男らしさを奪ひ返したやうな快感さへ感じるのだつた。吉良に賄賂を持つて行かうかどうしようかと考へるよりは、切腹する方が樂だとさへ思つた。

同じ人間だが、吉良は賄賂をとることには大膽であつたが、切腹することにかけては、淺野の方が遙かに大膽であつた。

吉良にも大目附の仙石伯耆守が調べに出かけたが、この方は調べにではなく、

『上野介儀公儀を重じ、急難に臨みながら、(よく腰をぬかし、とは云はなかつた)時節を辨へ場所を愼みたる段神妙に思召さる。是によつて何の御かまひもこれなき間、手傷療養致すべきの上意なり。』

とほめる爲であつた。
恥しい面目をほどこして、生命びろひをした吉良は、吳服橋の家に歸つた。

九　淺野内匠頭に切腹の命令下る

淺野内匠頭は、まもなく將軍の命令で奧州一ノ關の城主田村右京大夫建顯の處へ御預けになつた。
所がすぐ又將軍は老中連を集めて、かう云つた。
『今日の内匠頭の仕方は云ひやうのないふらちなことだ。勅使の饗應役でありながら、私の遺恨で、殿中をさわがせ、その上儀式の席を汚したやり方は、公儀を憚らないやり方だ。だから早速切腹を申しつけろ。』
老中連中もこれには驚いた。柳澤はたゞ、又始まつたと微笑をうかべてゐたが、他の連中は、どうも少し淺野が氣の毒だと思はないわけにはゆかなかつた。だが將軍に憎まれては困るから、皆、默つて樣子を見てゐた。

誰も默つてゐるのを見て、默つてゐられなくなつたのは、末席の方にゐた、稻葉丹後守正通だつた。

『恐れながら申します。おほせの如く内匠頭の今日の所爲は申しやうのない不都合ではございますが、何しろ亂心してやりましたことですから、御仕置のことは暫く御猶豫あそばされては如何かと存じ奉ります。』

發狂とすれば家は斷絕しないですむことになるので、稻葉は淺野家だけでも助けてやらうと思つたのだ。

それには秋元但馬守喬朝も、土屋相模守政直も贊成した。

將軍は自分の意志が通らないことは不愉快であつた。つと立つて奧へ入らうとして、丹後の方を見て云つた。

『丹後遠慮には及ばぬぞ。』

そして奧へ入つた。

しかしすぐ土屋相模守は召された。そして、

『すぐ内匠頭を切腹させろ。』
内匠頭を切腹させないと俺が切腹するぞといふやうな勢ひなので、土屋も仕方がなかつた。
そこで御目附がよび集められた。
そこでも、多門傳八郎は抗議を申し込んで見たが、どうにもならなかつた。

十　源五右衞門主君に逢ふ

田村右京大夫の處で謹愼してゐた淺野内匠頭に、切腹の命令がまもなく傳へられた。
しかし覺悟をしてゐた淺野は別にその命令が不當なものだとは思はなかつた。
彼はたゞ立派に死にたかつた。だが彼は死を目の前に見て平氣ではゐられなかつた。
彼の顏色は靑ざめた。油汗が額ににじんで來た。彼は微笑をもつて愼んでその命令をお受けしたが、その微笑は不自然なものであつた。だが彼は見つともない眞似はしたくないと思つた。彼は今でも自分のしたことを後悔しようとは思はなかつた。
彼は三十五歳で死んでゆかなければならなかつた。だが時世は彼に立派に切腹することを要求

した。

彼はやゝともすると死の恐怖に壓倒されようとしたが、彼はそれを耐へて、平氣な顔をするやう努力した。

人間は死ぬ時、死後のことを考へるやうに出來てゐる。死後の不名譽は堪へられない。淺野も自分の死んだあと、自分のしたことが正しいことを誰かに傳へたかつた。

それで彼は、側についてゐた人に云つた。

『赤穂の人々に手紙を書きたいと思ひますが、かまはないでせうか。』

側にゐた人は後難を恐れた。そして『何かお傳へすることがありましたら、私が書きとめてお傳へいたしませう。』

淺野は、そこで、かう云つた。

『それではどうか私の云ふことを、私の家來の片岡源五右衛門か磯貝十郎左衛門にお傳へください。』

『畏まりました。』

側にゐた右京大夫の家來は書きとる用意をした。
淺野は靜かに云つた。
『今度のことはさぞかし皆不本意に思ふかと思ふが、自分としては、已むを得ないことだつた。皆は定めて不審に思ふだらうが、武士として耐へ難い、侮辱を受けたのだ。本當のことを知つたら、皆も私のしたことが正しかつたと思つてくれるだらう。皆に難儀をかけることになつたのは、すまぬと思ふが、これも今となつては已むを得ないことだ。許してもらひたく思つてゐる。私の心を察してもらひたい。』
淺野はさう云つて口をつぐんだ。
彼はそれ以上は他藩の人の前では云ひたくなかつた。この淺野が書きとらした文句が、心配してかけつけてゐた源五右衛門の手にわたつた時は、
次のやうに短く尻切れになつてゐた。
『兼て知らせ置く可く存じしも、其の遑なく今日の事は、已むを得ざるに出でたる儀に候、定めて不審に存ず可き乎……』

あとは、ぬかされてゐた。あとは検使達が、相談で消してしまつたのだ。

だが、それを受けとつた片岡源五右衛門は、その御主人のことづてを、百倍にも強く感じた。源五右衛門は、主人に一目でも逢ひたいと思つた。

彼は主人に一目でもお逢ひ出來るためには一命でも喜んでなげ出したい氣になつてゐた。そして思ひ切つて、そのことを願ひ出た。

そしてそれは検使の人達の相談で許された。源五右衛門は案內されて庭へ廻つた。

庭には櫻が最盛りで、雨もやうの風に、櫻の花は散つてゐた。源五右衛門は胸をとゞろかせながら、歩いてゐる。ある緣先に源五右衛門は案內されて其處に控へるやうに命じられた。

まもなく障子があいて、緣側に出て來た人を見れば、まちがひなく主人の內匠頭であつた。

源五右衛門は思はず、其處に平伏してしまつた。何も云ふことは出來ない。

內匠頭には、その源五右衛門の眞心が傳はつた。彼は思はず、

『よくたづねてくれた。』

と云つたが、涙が出て來た。今朝から味つたことのない涙が彼の目をうるほした。

二人は顏を見合した。源五右衞門は何か云はうとして、ます／＼平伏する許りであつた。
『何もかもわかつてゐてくれる。』
内匠頭はさう思ふと、限りなく源五右衞門を可愛く思つた。
源五右衞門は自分が身がはりになれたらなりたい、この君のためなら生命は惜しくないと思つた。それと同時に、心の内で決心した。その決心はこんないゝ御主人を切腹させるやうな目にあはした、吉良を必ず殺すと云ふ決心だ。
『無念だ。』
内匠頭のその心が、ひし／＼と源五右衞門には傳はつてくる。そこで彼は、又、勇氣を出して顏をあげて、御主人の顏を見る。兩方今度は、怒つたやうな表情をして睨み合ひ、そして同時に、兩方がにこツとした。
内匠頭はその瞬間、死の恐怖から完全に解放された。
源五右衞門は、この時初めて口がきけた。
『御心靜かに。』

『萬事あとをたのんだぞ、俺のことは心配しないでいゝ。』

『はつ。』

内匠頭は室へ歸つた。障子は掛りの人によつてしめられた。

源五右衛門は平伏した。そして泣けるだけ男泣きに泣いた。

…………

時は刻々とせまつてくる。

十一　淺野内匠頭切腹の命を受けとる

日が暮れるに從つて淺野内匠頭は何とも云へず心細くなつて來た。やゝもするとはりつめた氣持がくづれさうになつた。しかし彼はわきにゐる人々の手前、弱い所を見せたくはなかつた。

だが死にたくないといふ氣が、やゝもすると頭をもたげた。それと同時に、どうしても死ななければならないのかと思つた。彼は生きる道はないかと考へて見たが、それはどうしても見つからなかつた。

死の恐怖は彼を十重二十重にかこんで來た。しかし彼は死を恐れることを恥ぢた。彼は落ちついてゐるふりをしてゐた。誰が見ても彼は死を恐れるものとは見えないやうに振舞ひたかつた。彼は武士道にはづれたくなかつた。そして『死は歸するが如し』を理想にしてゐた。だが彼は落ちつとしてゐるのが苦しくなつた。

しかし彼は自分の行動を後悔はしてゐなかつた。だが彼の吉良に對する怒は、だん〳〵靜まつてゆくのをどうすることも出來なかつた。それより、迫つてくる死が耐へられなかつた。今日死ななければならないとは彼は夢にも知らないことであつた。

日は平氣で暮れてくる。暮六つの鐘がひゞいて來た。殆ど同時に、彼は、よび出された。とう〳〵時が來たのだ。彼は靜かに立ち上つた。目まひがしさうになつたが、彼はやつとそれを耐へた。そして靜かに歩いてゆく。足が彼の意志に反して、やゝもするとふるへさうになつた。だが死を覺悟した男のやうに彼は靜かに歩いていつた。

彼は用意された廣間に來た。其處は田村家の大書院で、蠟燭が他の室とは比較にならない程、あかるく照らしてゐた。そして儀式ばつて人々がならんでゐた。淺野は落ちついてゐるつもりだ

が、其處に誰がゐるかわからなかつた。それは自分と同じ人間とは思へない、何か人間以上のものでもゐる所に見えた。彼は末座に坐つて平伏した。

大檢使の壯田下總守は嚴かに云つた。

『淺野内匠頭！　その方儀、今日殿中において御場所柄も辨へず、自分の宿意で吉良上野介へ刃傷に及び候段、不屆きに思召候。これにより切腹仰せつけられるものなり。』

昔の人間だつた淺野は、かう云はれても腹は立てなかつた。しかしいゝ氣はしなかつた。だが彼は禮儀を守ることは知つてゐた。

『馬鹿にするない。』なぞとは云はなかつた。

彼は謹んで云つた。

『上意畏り奉る。今日の不調法いかなる罰を仰せつけられても仕方がないと思つてをりました處、御慈悲をもつて切腹仰せつけられ、ありがたく存じ奉ります。各ゝ樣、御役目とは申しながら御大儀にござりまする。』

これは皮肉ではないのだ。切腹を御慈悲だと云はねばならないのは當時の習慣であつた。彼は

靜かにその習慣に從つた。
　しかし彼はその時、ふと吉良がどうなつたか知りたくなつた。
　それで彼はつゞけて云つた。
『御目附衆に伺ひますが、上野介の傷のその後の經過はいかゞでございますか。』
　すると、兩檢使は死んでゆくものへの氣安めとして、
『傷はさうひどくはなかつたが、何しろ老體なので生命は助かりさうもない。』と云つた。
　それを聞いても彼は氣安めに嘘を云はれてゐるやうな氣がした。彼は今となつては兩檢使が思ふ程、吉良を憎んではゐなかつた。たゞ事實が知りたかつたのだ。しかし彼は聞きかへすことも出來ないので、默つて平伏した。
　檢使の方は慈善でもしたやうな氣持になり、淺野は喜んだにちがひないと思つた。

十二　切腹

　彼はいよ／＼切腹の座に案內されなければならなかつた。だが嚴かに皆がひかへて居るので、

反つて彼は見ともない眞似をせずにすんだ。彼は立派に死んで見せようと決心した。

だが案内されて、庭へおろされた時、彼は一種の怒りを感じた。彼は自分は何と云つても大名だ、自分が切腹するのに庭でさせなくともよかりさうなものだと思つた。

侮辱は彼には一番耐へられないものだ。だが彼は默つてゐた。そして用意された切腹する場所を見た。

白洲に筵が敷かれ、その上に疊がおかれ、その上にまた毛氈が敷かれてゐた。

さすがに彼の足は出しぶつた。だが最後の勇氣を起して、彼は設けの座に、悠然と坐つた。いかなる名優も、この時の淺野のやうに凄い感じを出すことは出來ないであらう。本當に死たなければならないものが、落ちついてゐるのは凄いものにちがひない。

中小姓が三方の上に小刀を載せてあらはれて來た。そして靜かに謹んでそれを内匠頭の前においた。

その時内匠頭は云つた。

『一つお願ひがございます。私の差料の刀で御介錯の儀をお許し願ひます。そしてその差料を、一

およろしかつたら、介錯をしてくださる方にさし上げたく思ひます。』
静かにさう云つた。檢使の內で一番內匠頭に同情してゐた多門傳八郎はすぐ承知した。
『御尤もです。早々刀をとりよせられい。』
死んでゆくものに對しては、殊に靜かに死んでゆくものには、誰でも尊敬の念を持たないわけにはゆかない。
刀はとりにやられた。その時、櫻の花が散つてくるのにふと氣がついた內匠頭は、
『誠に申し兼ねますが、辭世を一首したゝめたく思ひますが、いかゞでございますか。』
それもきゝとゞけられた。
彼は、持つて來られた筆と紙をとると、すら〳〵と一首の和歌を書いた。

『風さそふ花よりもなほ我はまた
　　春の名ごりをいかにとかせん』

彼は死にたくはなかつたのだ。
彼は本當に死にたくなかつたのだ。

『花も春を惜しんでゐる。だが私はもつともつと春を惜しむ、生きてゐたくつてたまらないのだ。』
だが彼は死ななければならない。妻にも逢へず、大石良雄にも逢へず、また多くのよき家來や、腰元にも逢へず、他人許りのなかで、彼は死ななければならぬ。
だが他人許りだから彼は泣かずに死ねるのではある。太刀は持つてこられ、介錯の人に渡される。介錯人は磯田武太夫といふ人だつた。
もう内匠頭はのがれられない。彼は檢使の人々に目禮した。靜かに肩衣の前をはづした。彼はこの瞬間、自分の態度の落ちついてゐられるのに一種の快感さへ感じた。彼は靜かに短刀をとり、腹を切らうとした時、
武太夫は刀を拔いて内匠頭の首をはねた。
沈默はあたりを領した。花は散ることをやめない。武太夫は自分の腕の冴えと、やがて自分のものになる刀の切れ味のいゝのに快感を感じて、内心私かに微笑した。
内匠頭はかくて三十五でこの世を去つていつた。
すべては過ぎたやうに見えた。だが、すべては過ぎたのではなかつた。これから、すべてが始

まるのであつた。

十三　内匠頭は死んでしまつた

内匠頭は死んでしまつた。

だがその妻、その家來は生きてゐる。自分の一番大事な人が無念を殘して不自然に死んでいつた。しかも内匠頭をこれ程までに怒らした吉良は何の制裁も受けず、その上にほめられた。そして淺野家に對してだけは、實に嚴しい上にも嚴しい、容赦のない罰が、つぎ〳〵と下されたのだ。内匠頭の家來達にとつては腹が立たないわけにはゆかない。

幕府の方でもそれを知つてゐたが、なほ強く出た。その日に切腹、その日に鐵砲洲の上邸と赤坂の下邸が同時に召上げられる。

ぢつとしてゐる暇もない。

内匠頭の妻は、矢張り武士の妻である。夫が刃傷に及んだことを聞くと共に、決心が強まつた。たしかに一度は氣を失ふ程おどろいたが、すぐ心の用意は出來た。彼女は夫が、吉良の爲に、い

かに辱しめられたかを知つてゐた。今朝夫が出かける時も、彼女は何となく氣になつてゐた。蟲の知らせだつたのかとあとで思ひ合せた。しかし、ゆつくり悲しんでゐる暇もない。彼女は吉良が生命びろひしたことに耐へられないはがゆさを感じた。さぞ御無念に思はれたらう。私が男だつたら。

この時、内匠頭の弟の大學樣がお見えになつたといふ知らせがあつた。

正直な所、内匠頭の夫人は大學を好きではなかつた。だから見えたと聞いても、この際とびたつ思ひで逢はうとは思へず、反つて逢ひたくないやうにさへ思つた。しかし、逢はないわけにもゆかないので、涙のあとを隱して靜かに廣間に出かけた。

大學は、夫人を見るなり云つた。

『大へんなことが出來ましたね。』

『はい。』

『それで、今御老中から御沙汰がありましてね、邸一統のものが心得ちがひをしないやうにと云ふ御言葉でした。それで御姉さまから皆のものがさわがないやうに注意して戴きたく思ひます。』

夫人はその言葉を聽くなり、かつとした。
『なぜ夫と一緒に怒つてくれないのか』とさう思つた。自分の身の上の安全許りを、この際に考へてゐると思つた。それで夫人は暫く大學の顏を眺めてゐた。そして云つた。
『大學樣は内匠頭殿の本當の弟さんではいらつしやいませんか。それなのにお兄さんのお氣持を察してはくださらないのですか、相手に對してお怒りにはならないのですか。あなたのお口から、たゞ靜かにしてゐるやうにといふお言葉切り伺ふことが出來ないのは、この際殘念に思ひます。』
夫人は、さう云つてわつと泣き出した。
大學は、どうにも手がつけられないと思つたのか、そのまゝ夫人の處を去つて、家來の人に注意を與へて歸つていつた。
堀部安兵衞はこの話を聞いた時、齒がみをして腹を立てた。
今に見ろ、俺達は吉良の首をとつて見せる。
暗默の間に内匠頭の家來達は復讐を心に誓つてゐた。それで賄賂を出すことには氣のきかなか

つた家來達も、內匠頭の刃傷があつた後は立派に振舞つた。
片岡源五右衛門は勿論、原惣右衛門も中々働きのある男として頭角を顯して來た。その他、堀部彌兵衛、同安兵衛、赤埴源藏なぞ、心で悲憤の涙をしぼりながら上部だけは落ちついて、立派に働いてゐた。
彼等はうろたへなかつた。なすべきことをちやん／＼とした。
彼等は殿樣の心を察した。そして立派に切腹されたことを知つた。彼等は『君辱めらるれば臣死す』と云ふ敎をうけてゐる人々だつた。ましてその君が死んだのだ。自分達は死以上に苦しまねば、すまぬやうな氣になつてゐた。
彼等はなすべきことが多かつた。第一に家をかたづけなければならなかつた。
彼等はよく働いた。あつちこつちですゝり泣きの聲が聞かれた。しかし彼等は泣きくづれてはゐられなかつた。
腰元なぞは、手を休めるとはわあ／＼泣き出してはゐたが、泣きながらも働いてゐた。家のなかはどん／＼かたづけられて來る。不用なものを庭で燒くかゝりもあれば、貴重な品を一まとめ

にして見はりするものもある。かたづいた室から掃除するものもある。
だが笑ひ聲は廣い座敷の何處からもひゞいては來ない。
かたづいてゆくに從つて、何となく屋敷はものすごくなる。燈火や燭臺の光りはものすごく明滅し、人々は今にも内匠頭のお聲が聞えさうに思ふ。さう思ふと、今更に人々はまた、殿樣が切腹されたことを思ひ、吉良のことを思ひ、幕府のなされやうが、片手おちすぎることが頭に浮んでくる。
その時誰云ふとなく、『奥方樣が髮をお切りになつた』と云ふ知らせが、家中にひろがつた。二十八の若さで髮を切られた夫人の姿が方々の室にあらはれて、腰元にいろ〳〵指圖される。
人々はその姿を見て、なほ泣きたくなる。
その時、松平安藝守の家老豐島安右衛門といふ人が見えて、立退實行の命をうけましたので參りましたと云つた。見ると二百人許りの士卒をつれて來た。
外には戸田采女正の家來が百五十人の士卒をつれて見守つてゐることが知らされる。
人々はそれを聞くと、一層緊張した氣持にならないわけにはゆかなかつた。

受けとりに來たものにも同情はあつた。だがそれだけ逐ひ出される身になるとつらかつた。赤穗の人々は段々興奮にもつかれ、働くことにもつかれて來た。だが一層病的に神經がたかぶつても來た。勝手にしろといふやうな氣で默々と働いてゐる。

怒つてゐるやうな顏してゐるもの、泣きたさうな顏してゐるもの、わりに平氣な顏してゐるもの、いろ〳〵の人がゐるが、どれも一種の緊張はしてゐた。そしてどうにもならない勢ひにぶつかつて、勝手にしろといふ氣になつてゐた。たゞ心の底から怒りが燃えてゐるものと、悲しみにやつつけられてゐるものと、今後の事が不安なものとあつた。

老女が、つと夫人のそばによつて手をついて云つた。

『お轎の御用意が出來ましてございます。』

『さうか。』

夫人はまたわつと泣き出した。

彼女は、實家の三次侯の青山の家に一先づ落ちつくことにきめられてゐた。

彼女は何にも云へなかつた。

皆のものに送られて、泣きながら靜かに玄關の方へ歩いていつた。住みなれた家に、こんな氣持で去つてゆかなければならないとは、誰も知ることが出來ないことだつた。
夫人は思ひ出すことがすべて涙のたねだつた。
家來や腰元は、送りながら同じくすゝり泣きしてゐた。男は、さすがに聲を出しては泣かなかつたが、女は耐へられずに、つい聲をもらした。
『いろ〳〵皆にお世話になりました。云ひたいことが澤山ありますが今は何にも云へないから、察してもらひたい。私が男だつたらと思ふ。皆これから隨分苦勞をしなければならないだらうが、殿樣のお氣持を察して辛抱しておくれ。』
『はい。』一同は平伏した。
夫人は靜かに、だがしのび泣きしつゝ、轎に乘つた。彼女の轎からは、青山の家につくまで、しのび泣きが絶えなかつた。
その後まもなく屋敷は無事に引渡され、皆、たよるべき所に歸つていつた。
皆、自分を哀れだとは思へなかつた。御主人が切腹なさつてゐるのだから、それ以上哀れな身

にはなれないことを知つてゐたから。

だから家來の人々は、殿様がお氣の毒で、お氣の毒で、仕方がなかつた。自分のことを考へるひまがなかつた。

尤も不忠な男女が一人もゐないとは思はれない。殿様の性急の性質を心の中で恨んでゐたものも二三人はゐたらしい。

…………………

將軍は柳澤から内匠頭の切腹したこと、赤穂侯の江戸の屋敷の引きわたしが、無事にすんだことを聞かれて、

『さうか、大儀だつた。』

と云つた。そして蚤をつぶしたやうな快感を感じた。

この將軍は、人並ではなかつた。特別に自分の威光の邪魔になるものが嫌ひな質を持つてゐた。人間が増長したらどうなるかと云ふ標本の材料として珍らしい材料である。馬鹿ではなかつた。いゝ處もあつたのだが、それ以上増長してゐた。増長させられてゐた。

吉良はその後柳澤に逢つた時深く感謝した。そしてそれと同時にかう云つた。
『あの氣ちがひにはおどろきましたよ。』
『君の臆病なのにも、おどろいたよ。』
『誰だつておどろきますよ。』
『腰がぬけたさうぢやないか。』
『そんなことはありません。』
『だが、こはかつたらう。』
『おどろきましたね。』
『もう一度あんな目にあつたらどうだ。』
『もう澤山です。』
『だが用心しろ。氣ちがひの下には氣ちがひがゐるからね。』
『おどかしになつてはいけません。』
『君を助けるには、骨が折れたよ。』

『本當にありがたうございました。あなたがいらつしやらなければ、私も今時分浪人してゐなければならなかつたでせう。』

『あんまり君は口がわるすぎるからよくないのだ。』

『これから氣をつけます。』

『將軍は大へん、君が刀を拔かなかつたのに感心してゐられたよ。あはゝゝゝ。』

『内匠頭には隨分お怒りになつてゐられたさうですね。』

『それは、さうなられるやう細工がしてあるからだよ。』

『ありがたうございました。』

十四　大石良雄

いくら忠義な家來でも、江戸から百五十何里へだたつてゐる當時の赤穗では、殿樣が切腹されたことを知るわけにはゆかない。

大石良雄は千里眼ではなかつた。彼は彼の大事な殿樣が、切腹されて四日間といふものは何に

も知らずに平常通りの生活をしてゐた。
三月十八日の夕方、彼は氣持がいゝので、子供達をつれて散歩に出かけた。
一體に良雄は、武士としてはさばけた男だつた。彼は窮屈なことを嫌つた。そして子供達と遊ぶのがすきだつた。
彼には二人の男の子と、一人の女の子があつた。三番目の男の子はその時はまだ生れてゐなかつた。
彼は上機嫌で家に歸つて來て、長男の今年十四になる主税に論語の講義をしてゐた。
『陳にいまして、糧を絶つ。從者病みて能くたつなし。子路うらみ、見えて曰く。君子も亦窮することあるか。子曰く。君子固より窮す。小人窮すれば斯に濫す。』
から良雄は先づ讀んで、ついで主税に讀ました。そして、更に說明した。
『孔子樣が陳と云ふ處にいらつして、食物がなくなられ、從つてゐるものが病氣してたてなかつたのだ。それでさすがの子路までよろこばなかつた。そして孔子樣の處へ出かけてから聞いた。君子も困ることがありますか。これからが大事なのだ。君子は固より困る、窮する。君子だつて

人間だから、どうにもならない目にあふことがある。だが孔子様はなほつけ加へておつしやつた。小人は窮するとどんなことでもする。惡いことでも、見ともないことでもする。しかし君子は困るが、そんな見ともないことは出來ない。いくら困つても自分の値打を落さない。立派に振舞ふとさうおつしやつたのだ。お前もその心がけでゐないといけない。』

『はい』主税はそれを聽いて、感奮して云つた。

いつのまにか子供達を寐かした夫人は、夫の講義を感心して聽いてゐたが、云つた。

『本當にさうでございますね。』

『君子は濫れない。いゝことをおつしやつたものだ。人間にはこの覺悟が大事だ。』と良雄は云つた。

『いゝお話を伺ひました。』

夫人は喜んでさう云つて、今更に自分の夫に感心した。

『それなら主税、お前も寐るといゝ。』

『はい。』

主税は兩親に丁寧にお辭儀して自分の寐間に入つた。

良雄はまだねむる氣になれず、論語をつゞけて讀んで、彼は感心しながらいろ〳〵考へてゐた。

『一もつてつらぬく。』

本當にさうだなぞと考へてゐた。その時　彼は靜かな夜を通して早駕のやうなかけ聲を聞いた。耳のせゐかと思つたが、たしかに早駕らしい。彼はその咄嗟に、何事か起つたのではないかと思つた。すると門を力づよくたゝく音がした。『何事だ』彼はさう思つた。

すると間もなく家來の瀬尾孫左衛門があわてゝやつて來た。

『殿樣、大へんでございます。江戸からの早駕で、早水樣、萱野樣がお見えになりました。』

『さうか、早く身體の手あてをして、お通しするやうに。』

『はい。』

大石良雄はあわてはしなかつたが、大事件が起つたことを知つた。

内々恐れてゐたことが起つたのではないかと思つた。彼は殿樣が、勅使の饗應役をお引き受けになつたことは知つてゐたから、そしてその御役目を御無事に果されるやう、心で祈つてゐたか

ら、そしてそれも無事にすんだ時分だと思つてゐたのだが。

十五　大石主君の切腹を知る

早水藤左衞門と萱野三平とは、殿様の刃傷のことがわかると共にすぐ、片岡源五右衞門の手紙をもつて、大石良雄にそのことを知らせるために早駕に乘せられ、江戸から赤穗まで、四日半で使命を果したわけだ。

四日半の間、夜晝となく駕に乘せられ、ゆられにゆられてやつて來たのだから、大概の場合、半死半生の狀態になるわけだが、しかし緊張してゐた二人は弱つてはゐたが、氣はしつかりしてゐた。そして客間で、大石良雄の姿を見ると、平伏して、云つた。

『御家老樣、一大事が出來ましてございます。先づこの手紙を御らん願ひます。』

そして大石良雄に手紙をわたした。

大石良雄は落ちついてその手紙をうけとり、讀んでいつたが、さすがに段々顏色がかはつて來た。そして手がふるへて來た。だが讀みをはる頃、また元の大石に還つてゐた。しかしあきらか

に彼は興奮してゐた。手紙にはかう書いてあつた。

『口上書を以て申上候。

御勅使柳原大納言樣、高野中納言樣、御道中御機嫌よく、當月十一日御到着、十二日御登城遊ばされ、十三日御饗應、御能相すみ、翌十四日御白書院に於て御勅答の式之あり候。御執事役人諸侯殘らず御登城相なり候處、松の御廊下に於て上野介殿理不盡の過言を以て恥辱を與へられ、之によつて君刃傷に及ばれ候。然る處同席梶川殿抑へすませられ、多勢を以て白刃を奪取り吉良殿を打留不申、雙方共御存命にて上野介殿は大友近江守殿へ御預に成り、傳奏饗應司は戶田能登守殿へ仰せつけられ候。あらまし右の通りに候條、何れにも御家門大切の時節に候故、御注進として早水藤左衞門、萱野三平、右兩人馳せ登らせ申候。此日取急ぎ書中一々する能はず、兩人委曲言上仕るべく候。尚、追々、御注進仕るべく候。恐惶謹言。三月十四日巳之下刻、片岡源五右衞門』

さすがの大石もこの手紙にはおどろいた。自分が私かに恐れてゐたことより、もつと恐ろしいことが、起つてゐたことを、いきなり知らされたのだ。

だが彼はうろたへはしなかつた。

大事にのぞんで、その人の價値は出るものだ。大石はおどろいて許りはゐられなかつた。すぐいかにしなければならないかを考へた。彼はまづ、すべての人にこの一大事を知らせなければならないことを知つた。

彼はまづ、早水と萱野に休息させ、よく手あてさせることにして、そして使ひを方々に出して、急に城にあつまるやうにと云ふ達を出した。

そして自分もすぐ登城の用意をした。

良雄の妻や、主税はおどろいた。そしてどうなるでせうと云つた。

『こゝであわてゝも仕方がない。最善の道をとるより仕方がない。しかしそれにしても御殿樣はどうしてゐられるだらう。』

彼は今、殿樣のお身の上だけが心配になつた。彼は出來るだけ落ちつくつもりだつたが、しかし彼は落ちつくのに骨が折れた。

城下には提灯が右往左往した。

人々は何事か起つたことを知つた！

十六　赤穗の武士達の相談

大石から達をうけた人々は夜中に何事かと城中に集つて來た。

誰云ふとなく皆、殿様が殿中で刃傷されたことを知つた。

すべての人はこの出來事の結果がどうなるか大概見當がついてゐる。しかしそれはあまりに恐ろしいことなので、皆、そんな結果にはならずにすみさうにも思つた。

殿様の切腹、家の斷絕。

それはあまりに恐ろしいことである。

皆、大石からあらたまつて事實の報告をうけたが、さて何をしていゝかわからない。

次の報告がくるのをまつより仕方なかつた。そして皆が心配して、話しこんでゐる中に朝になり、すると第二の早駕で原惣右衛門、大石瀨左衛門がやつて來た。

そして内匠頭の切腹、家の斷絕の命令が事實になつてあらはれた。

原惣右衛門は興奮してゐた。事實を報告したあとでつけ加へた。
『皆様、なんとお考へになりますか。殿は忍耐なされるだけ、忍耐なされたのです。殿のお言葉では、皆もさぞおどろくだらうが、かうなつたのはやむにやまれぬ勢ひだつたのだから、惡く思はないでくれとのお話だつたさうです。吉良が殿様にあたへた侮辱と云ふのは、一通りのことではなかつたのです。疊をかへなければならない所をかへないでいゝと云ひ、服裝なぞについてもまちがつたことをわざ〳〵敎へ、殿様と御同役の伊達様にはこびへつらつて、殿様にはあてつけがましくふるまひ、見てゐるものは皆、殿様のお怒りになるのを尤もだと申してをります。あれで怒らなければ腰ぬけだと、皆かげでは申してをります。それなのに吉良家にはなんのおかまひもないのです。江戸詰のわれ〳〵は腸が煮えくり返るやうな思ひをさせられました。殿様は何のおしらべもなく、すぐ御切腹をおほせつけられ、それも庭でむしろの上で切腹させられたのです。皆様くやしいことではございませんか。』
皆、怒つたやうな表情をした。どうしたら腹の蟲がをさまるのか。
さすがの大石もつい我慢が出來ず、涙をながしながら云つた。

『皆様、おきゝになつたでせう。何と云ふ亂暴な、片手おちのおさばきでせう。私達はどんな目にあはしても、かまはない。蟲けらとでも思つてゐるとしか、思へないなされ方です。我々には骨がないとでも思つてゐるのでせう。一日の猶豫もなく殿様は御切腹をなさつたのですぞ。そしてその晩すぐ江戸のお屋敷は三百何十人と云ふ人にとりかこまれて、立退を命ぜられたのですぞ。こんな侮辱を皆様は辛抱なさるおつもりですか。』

『誰が辛抱するものか。』

誰かゞ呶鳴つた。

『何とか復讐をしてやりたいものだ。』

『復讐。』

『復讐。』

『復讐。』

とあつちこつちから呶鳴るものがある。

三百何人あつまつてゐるのだ。それが皆怒り出した。中には臆病ものもゐたが、それははたの

劍幕がつよいので默つてゐる。

『吉良の首をとらないでは殿様にたいしてすまない。』

大石はそれ等の聲をたのもしく聞いてゐた。しかし場中で一番腹を立てゝゐたのは存外大石良雄自身だつたかも知れない。彼は生れてまだこんなに怒つたことはなかつた。

『日本中を相手にしても戰つてやりたい。』

しかし彼は責任のある位置だ。はやる心を靜めて最上な方法を考へなければならない。

それで先づ皆の意見をきいて見るより仕方がなかつた。

『大野殿、あなたは、どうお考へになる。』

『私は、死ぬだけが忠義だとは思ひません。この際お家が斷絶しないやうに、大學樣もゐられるのですから、骨折れるだけ骨折るのが順當かと思ひます。』

『それも一理はあります。』

皆、ぶつ〳〵云つたが、大石はとり合はず、次にひかへた人にきいた。

『私もお家斷絶にならないためには、辛抱出來ない所を辛抱する必要があるかと思ひます。この

際事を荒らだてるのは。』
『そんなことがあるものか。』
『靜かに。』大石は云つた。しかし皆靜かにはしなかつた。二人三人かたまつて、議論し出した。
その時大石は云つた。
『皆様、大野殿のおつしやる通りに、淺野家の斷絶は我等も願はない所だと思ひます。しかし私の考へは、この際おとなしくしてゐては、反つて相手につけ上られるばかりと思ひます。この際、我等は出來るだけ強硬な態度をとつて、相手をおどかすことが必要と思ひます。彼等は我々をどんな目にあはしても、泣き寐入りするものときめてゐます。しかし我々はそんなものではないことを示さなければいけないと思ひます。』
『さうです。』
『さうです。』
しかし大野達も、まけてはゐなかつた。
『大夫殿のおほせですが、反抗すればするだけ、なほ相手を怒らします。小しやくなと云ふ感じ

を與へるのは損です。長いものには卷かれろと云ひます。この際、相手の歡心を得ることが大事と思ひます。』

『そんなことが出來るか。』

『武士が不正なものに、頭をさげることが出來るか、それで亡き殿樣が喜ばれると思つてゐるのか。』誰かゞさう云つた。

『この際興奮は一番いけないと思ひます。この際、我等はよく利害關係を考へ……』

大野は何か云はうとしたが、若者達は承知をしないで、さきを云はせなかつた。

『殿樣が切腹された今、利害なんか考へるひまはない。』

『そんなことは云はないがいゝ。』大石はさう云つた。彼は今、吉良にたいして非常な怒りを感じてはゐたが、理性を失つてはゐなかつた。

『利害も大事な時がある。御城下の人達には、この際出來るだけ損をかけないやうにするのが私達の務だ。しかし私達武士は、この際利害なぞ考へる必要はないと思ふ。我々はもう生命のいらない人間だ。たゞ殿樣が侮辱されて、切腹なされたことだけが、煮えくり返るやうに腹が立つ

てゐる。赤穂の人々にも骨があることを示さないわけにはゆかない。私達は君はづかしめらるれば、臣死すと云ふ言葉を知つてゐるが、今やその時だと思ふ。皆さんもこの際生命が惜しいなぞとは思はれないでせう。』

『思はない。』

『しかし生命の惜しい方もあるかも知れない。さう云ふ方は自由になさるもいゝでせう。しかし私達はこの城をやす〳〵と人にあけ渡さうとは思はない。私達は幕府の人達が思つてゐる程、腰ぬけ許りではない。』

『さうだ。我等は腰ぬけ許りではない。』

大野達は自分の意見を云つてもきかれないことを知つた。しかし彼等も死にもの狂ひだつた。何故かと云へば、彼等は本能的に死にたくなかつた。死んでは浮ばれないと思つてゐた。だがうつかりしたことを云へば、なほ火に油をさすやうなものだ。彼等は沈黙する手段をとつた。

その日は相談がまとまらずに、一先づ解散した。城に殘る人もあつたが、多くは自分の家に歸

つた。
大石も家に一先づ歸ることにした。
原惣右衞門、吉田忠左衞門は大石についてゐた。

十七　三人の相談

吉田忠左衞門は大石のよき相談相手だつた。彼は人々が大石を晝行燈と云つて惡口を云つてゐる時から、大石を信頼してゐた。彼は思慮のある男で、出しやばらないが、いつも靜かに考へる男だつた。
原惣右衞門は、忠左衞門とはまるでちがつた熱のある男だが、しかし大石には愛され、又信用されてゐた。惣右衞門は、大石を信じてゐて、大石の云ふことならなんでも聞く男で、他の人が大石の惡口でも云はうものなら彼はムキになつて怒つた。だがおべんちやらな所は少しもなかつた。この二人が大石と心を一つにしてゐた。
大石は、他の人にうちあけないことも、この二人には氣樂にうちあけてゐた。

歸ると、妻と子供達は心配さうな顏をして迎へた。そして、
『御殿樣には御切腹だつたさうですね。』
と大石の夫人は云ふと同時に、泣き出した。
主稅も泣き出したが、彼は子供ながら決心してゐるやうな怒つた顏をしてゐた。
『おいたはしいことだつた。』
大石はさう云つて、暗涙にむせぶと、原惣右衞門も大聲に泣き出した。吉田は冷靜にはしてゐたが、眼に涙をためた。
大石は妻子にわかれて、客間に吉田や原と入つて、相談をするのだつた。
大石は云つた。
『私の胸は、どうしても吉良の首をとらなければやすまらない。』
『私もさうです。』
原はすぐ贊成した。
『吉良の首をとることは私も贊成ですが、その前にお家の再興を出來るだけつとめるのが本當

かと思ひます。』

吉田はさう云つた。

『それはさうだ。』

大石はすぐ贊成した。

原は不服さうに云つた。

『大學樣がもう少ししつかりした方だつたら。』

『そんなことは云つたつて始まらない。』

『あの人は恐ろしく腰ぬけです。』

『こゝだけの話だが、それはさうだが、しかしするだけのことはするがいゝ。しかし御家再興にはおとなしく出てもだめだと思ふ。』

『それはさうです。』

『おどすことが必要だ。再興さゝなければ、どんなことをするかわからないと云ふことを示すのが必要と思ふ。』

『それはさうです。私達を見くびつてゐるのです。』

『それで私は、籠城說を出して見るつもりだ。さうすれば臆病な奴は誰と誰だかわかる。少くも大野一派は逃げ出すにちがひない。それから籠城がだめになつたら、切腹說を出し、それでも決心がゆるがない人々にだけ本心をうちあけるやうにしてはどうかと思ふ。』

『それはいゝと思ひます。』

『忠左衞門殿はどう思ふ。』

『私もそれがいゝと思ひます。』

『私は今迄、死ぬのがきらひだつたが、御殿樣が切腹されたときいたら、私達も切腹してもいゝ氣になつて來た。をかしなものだ。』

『本當でございます。』

『御殿樣の御最期の御立派なことをきいた時、私はすつかり勇士になつてしまつた。』

『本當でございます。』

吉田もさう云つた。

『御辭世をうかゞつた時、涙が出たゝもう一度、きかせてもらひたいね。紙に書いて時々拜見したいから。』

大石はさう云つて、自分で硯箱をもつて來て、書く用意をした。

『風さそふ花よりもなほ我はまた、春の名ごりをいかにとかせん。』

大石はそれを書きとり、自分でそれを聲を出してよんで云つた。

『本當にお死にはなりたくなかつた御心が、よくわかる。それなのに御切腹なされなければならなかつたのだ。考へても、考へてもおいたはしすぎて、腹がたつてくる。煮えくり返るやうだ。』

三人又泣いた。同時に決心がます〳〵强まるのだつた。

十八　大石良雄妻と子

大石良雄の妻お陸は、夫の歸りのおそいのを心配してゐた。會議がどうなつたか、夫は歸つて來てもだまつて、たゞむづかしい顏してゐる。今日で三日、夫は會議をつゞけてゐる。

いつも快活だつた夫も昨日から急に氣むづかしい顏になつた。何か面白くないことがあるの

ではないかと思つた。聞きたいとも思つたが女が口を出すのもさし出がましいやうに思つて默つてゐた。しかし默つてゐればゐるだけ、なほ心配になる。

その時主税が起きて來た。

『お母さん、お父さんはまだお歸りがないのですか。』

『さうだよ。お前もまだ寐なかつたのかい。』

『えゝ、なんだか氣になるので。』

『お父さんはお前に何か云つていらつしたかい。』

『何にも、たゞ私がしのび泣きしてゐるのを見て、お父さんはお前も侍の子だねとおつしやつて、笑つていらつしやいました。だがお父さんも泣いてはいらつしたやうです。』

『本當に私達は、どんなことが起つても、しつかりしてゐなければならないのです。私達はどんなに悲しい日にあつても、ぢつとしてゐなければならないのです。』

『お母さん、私は、お父さんが死んだら、私も死ぬつもりなの、私だつて侍の子ですからね。』

『死ねる人が、私は羨ましいよ。御主人やお前に死なれて私は生きてゆかなければならないと思

ふと、本當にたまらないよ」』
『私は、お母さんのことを思ふと死にたくなくなるのですけど、弟や妹がゐますからね。』
『私は何にも云はない、とめもしないよ。』
母は、ぶる〳〵と、口をふるはしたが、涙を我が子に見せるのを恥ぢた。
『御後室樣のことを思へば、私達はどんなことでも辛抱しなければならないと思ふよ。』
『籠城するのだつたら、私もお父さんにお城へつれていつて戴いて戰ふつもりです。』
『それもいゝだらう。私はとめはしない。私だつて男だつたら、お城に入つてお前達と一緒に死にたいと思つてゐる。』
『お母さん、私はね、立派に討ち死にしてみせます。私だつて武士の子ですからね。』
『立派に死んでおくれ。私はそれをとめはしない。』
お陸はさう云ひ切つた時、目まひがしさうだつたが、彼女は勇氣を失ひはしなかつた。彼女も腹を立てゝはゐるのだつた。
『殿樣、お歸り。』

さう云ふ聲がきこえたので、二人はすぐに迎へに出た。良雄は昨日とかはつて、今日は機嫌よくさへ見えた。

『どうきまりました。』

『籠城に。』と主税は云つた。

『さうだ。』

『とう〳〵さうきまりましたか。』

『お前も喜んでくれ、赤穂には忠義者が澤山ゐてくれた。殿樣もさぞ冥土で御滿足に思はれてゐられるだらう。』

『お父さん。』

『なんだ。』

『私も籠城のお仲間に入れてください。』

『お前はまだ十四ぢやないか。』

『戰國時代には十二三で戰場に出て手がらをした人はいくらでもをります。』

『他の人と相談してみよう。』
『許しておやりください。』
『お前まで、その氣でゐるのか。』
『はい。』
良雄は妻の決心した顏を見て云つた。
『それではなるべく仲間に入れるやうにしてやらう。』
『ありがたう、お父さん。』
良雄は感情をそとに現さず、自分の室に一人で入らうとして、そしてふりかへつて妻に云つた。
『瀨川にさう云つて、岡島八十右衞門に一寸來てもらひたいと云はしてくれ。』
『今からですか。』
『あいつだつて、中々寐られはしまい、人には氣がつかれない方がいゝのだ。』
『左樣でございますか。』
良雄の妻は瀨川をよんで岡島へ使ひにやり、自分の室に入つた。一人になると今迄せきとめて

ゐた悲が、急に堰をやぶつた。

主税は寢床に入つても、ます／＼勇氣が湧くのを覺えた。彼は泣かなかつた。

良雄も泣かずに、何かしきりと、書物を見ながら、算盤をはじいてゐた。

十九　大石岡島を喚ぶ

夜おそく岡島八十右衛門が見えた。岡島は原惣右衛門の弟で、勘定方をやつてゐた。

『おそすぎたが、何となく話相手がほしくて、お喚びして、すまなかつた。』

『恐れ入ります。私も喚んで戴いて、こんなうれしいことはございません。』

『他のことでもないが、藩札のことが切りと氣になつて來たので、どうなつてゐるか、町の人々に迷惑をかけてはいけないと思つて相談したかつたのだ。』

『恐れ入ります。私もそのことが氣になつてをりました。』

『私達侍は、どうなつてもいゝとして、勿論下まはりの人達には出來るだけよくしたいが、町家の人達には、この際出來るだけよくしたく思つてゐる。しかし正直なことを云つて、淺野家の

再興の時の用意もしておかなければならないし、貧しい侍の家族の人達が路頭に迷はないだけの用心も必要だ。だからこの際藩札をいくらか安く引きとることが必要と思ふが、それも出來るだけ迷惑を少くしたいので、一つ考へてもらひたい。』

『畏まりました。』

『さうあらたまつてもらつては反つて困る。今出札はどのくらゐになつてゐるか、藩の財産は今どのくらゐあるか、他の人に知れないやうに調べてもらひたい。君がゐてくれるので安心だが、大野達は何をするか、わからないから、先手を打つて、思ひ切つてやつてもらひたい。それからこれはなほ祕密なのだが、君だから安心してうちあけるが、籠城は表むきなので、本當は、吉良の首を切るつもりなのだから、そのためにもいくらかの金の用意がいる。それも心得てほしい。』

『承知いたしました。』

『今日の大野のざまは面白かつたな。』

『本當でございます。兄が、刀に手をかけてつめよせて、籠城説をきかないのかと云はれた時の、あわてゝ方。』

『だが大野の云ふことにも一理はあるよ。あいつの腹が、口とは別なことがわかるから、腹が立つだけだ。あいつも、太平な時には役に立つ男だつたが、生命をすてる仕事には、あいつはむかないやうだ。あはゝゝゝ。』

良雄は陽氣に笑つた。

『それでは萬事たのんだよ。』

『はい。』

岡島は丁寧に禮をして歸つていつた。

良雄は一人になると、

『それなら俺も寢るとしようか。』と獨り言を云つて立ち上つた。

二十　眠れぬ人々

大石親子は中々眠れなかつた。

良雄は決心がきまつたので存外おちついてゐた。彼は三人のうちで一番早く安らかな眠りに入

つた。連日の疲れも出て。
妻のお陸は、末つ子と一緒に寢てゐたが、中々眠れなかつた。お陸はまだ、夫は本當に籠城して死ぬものと思つてゐる。それも武士の意地としてやむを得ないことと思つてゐた。彼女も今となつてはたゞ立派な態度をとつて、他人に笑はれないやうにふるまはなければならないことを覺悟してゐた。そしてまだ幼い子供達のことを考へ、その子供達を立派に育てなければならないことを知つてゐた。それは、死にまさる苦しみにしろ、お陸はそれを堪へなければならないことを覺悟してゐた。

お陸は忍び泣きしてゐる中に、だん／＼決心が強まつて來た。

兼ね／＼、夫は云つてゐた。昔の武士が如何に勇ましく死んでいつたか、そしてその妻子がいかに勇ましく夫や父の死を覺悟してゐたかを。お陸は夫の普段の心がけに、いつのまにか感化されてゐた。お陸もいつのまにか寐てしまつた。

しかし主税はまだ起きてゐた。彼は、自分が勇士として、父と一緒に死んでゆくことを考へてゐた。子供らしい純粹の氣持で、彼は自分が忠義な武士であることに傲りを感じてゐた。そして

自分は勇ましく戰ひ、そして死んでゆくことを考へた。死が苦しければ苦しいだけ、それに打ち克つことが、彼には勇ましいことのやうに思へた。

しかし夜眠れないのは彼等親子許りではなかつた。赤穗の城下では、三百何十人の家族が、皆それ〴〵に眠れないでゐるのだ。

大野親子も、その例にもれなかつた。

大野九郎兵衞は、どう考へても、死ぬのはいやだつた。死んで何になる。死んでしまつた方にとつて、自分達が死んでも、何にもなりはしない。籠城、それが何になるのだ。死んでしまへばそれまでぢやないか。馬鹿々々しいのにも程がある。考へれば考へる程、腹が立つてくる　馬鹿にあつては叶はないと思ふ。

晝行燈の大石まで逆上してゐる。原惣右衛門の今日の樣子、あれはなんだ。立派な氣違ひだ。あんな奴のお相伴になつて死んではたまらない。生命あつてのものだねだ。死んだら一體どうなるのだ。

さう思ふと、主人内匠頭にたいしても腹が立つて來る。御主人が病的な癇癪持でなかつたら、

こんな目にあはずにもすめたのにと思つた。
九郎兵衞は寐つかれないまゝに、息子の室までやつて來た。息子もまだ寐てゐないらしかつた。
『郡右衞門、まだ起きてゐるか。』
『えゝ、おきてゐます。お父さん。』
九郎兵衞は郡右衞門の室へ入つて來た。
『今日はおどろいたな。』
『本當におどろきました。』
『貴樣は籠城する氣か。』
『誰が籠城なんかするものですか。』
『本當に馬鹿々々しいことになつたものだ。』
『お父さんはどうなさります。』
『俺は生きられる限り生きて見るつもりだ。お前はどうだ。』
『私も無論、死ぬ氣にはなれません。』

『それでこそ、俺のせがれだ。』

『だが用心しないと殺されるぞ。當藩には氣違ひが多いから。』

『殿様が、殿様ですからね。』

『本當だ。馬鹿な目にあつたものだ。だが出來るだけ利口にしないといけないのだ。馬鹿が多いから。』

『これから、どうなるでせう。』

『すぐ職にありつけまいから、出來るだけ金をつくる必要がある。』

『本當です、お父さん。手ぬかりがないやうにしないといけません。』

『お互にぬかるな。』

『大石て、あんな馬鹿とは思ひませんでした。』

『本當だ。俺も今日は愛想がつきた。』

『あんなに忠義ぶらないでもいゝぢやありませんか。』

『それも一種の人氣とりさ。』

『それでも死んぢやつまりませんね。』

『あんなことを云つてゐるが、いざと云ふ時、逃げ出すのぢやないかと思つてゐる。』

『さうかも知れませんね。』

『あいつだつて生命は惜しいだらう。人間だからな。』

『生命の惜しくないなんて、どうも人間とは思へませんね。』

『だが、氣の小さい奴は、すぐ逆上するから、どんなことをするかわからないよ。』

『困つたことが出來たものです。』

『內心困つてゐる奴も多いのだが、皆、死ぬのが怖くないやうな顔をしてゐるからをかしい。いざ死ぬときまつたら、大概の奴は逃げ出すよ。見てゐるがいゝ。』

『本當ですね、お父さん。びく〳〵して顔色をかへながら贊成してゐる奴もゐましたよ。』

『俺の方を見て、そつと舌を出してゐた奴もゐたよ。贊成したやうな顔をしてゐながら、たちのわるい奴だ。』

『本當に籠城するものは何人くらゐでせう。』

『さあ、十五六人くらゐだらうな。』
『そんなにもゐるでせうかね。』
『そのくらゐはゐるだらうよ、生命の惜しくない奴がね。』
『生命の惜しくない人の氣が知れませんね。』
『本當だよ。』
多くの人々は大石と大野の間をうろついてゐた。

二十一　大石の遠謀

大石良雄は夜半にふと目をさました。すると、さすがにいろ〳〵のことが考へられるのだつた。彼は主人内匠頭の切腹された姿が、はつきり目に浮んで困つた。そしてその御姿を見るにつけて、彼は復讐を心に誓つた。

彼は自分でも不思議なくらゐ、吉良上野介を憎んだ。自分の善良な主人を虐めぬいた憎々しい姿が浮んでくる。また同時に、彼は吉良に好意を持ち、淺野家をぶつたふすことなぞをなんとも

思はないものに、自分達の内にも骨があることを示したかつた。
今に見ろ、おどろかしてやる。自分達は泣き寐入りをする程の意氣地無しではない。
必ずやつつけてやる。
復讐は當時の社會も正しいと見てゐる。殊に主人が無念の心を持つて死んでいつたのだから、その復讐をすることが悪いことだとは爪の垢程も思はない。
彼は主人の死を知ると共に復讐を誓つた。
しかし彼はその腹を人々に見せることを恐れた。吉田や原や、その他四五人の人には話しても大丈夫とは思つたが、そこで彼は先づ籠城說を唱へた。そして城を枕に死ぬことを宣傳した。
人々の決心が知りたかつた。

二十二　同

今夜中に目をさました大石は、先づ復讐をするにはどうしたらいゝか。
それには先づ吉良家の人々を安心させる必要があると思つた。それ以上味方が力を一つにする

ことが大事だと思つた。誰がたよりになるか、本當の味方は誰か、それを知る必要があると思つた。それは籠城說で、大がい見當がついたと思つた。そして昨日の會議を見ても、なか／＼たのもしい人々がゐてくれることを知つて、想ひ出しても嬉しかつた。

間瀬久太夫、潮田又之丞、間喜兵衛、同十次郎等、想ひ出しても彼は氣持がよかつた。また彼の顏をぢつと見てゐた、大高源五の淚ぐんだ顏も忘られなかつた。その他、彼は見廻して見た時に受けた、たのもしい顏が彼の目に浮んでくる。それは五人に一人、六人に一人のわりあひではあつたが、それで充分だと彼は思つた。

それで彼はそれ等の人と連絡をとる必要があつた。彼は自分が赤穗を去つてから、何處に住むのが一番いゝかゞ、彼の頭に浮んで來た。彼は同志と氣樂に逢へ、そして復讐の用意と同時に、死の用意をする處を考へた。

彼は先づ京都が頭に浮んだ。

彼はなるべく江戸の近くに住みたかつたが、しかし江戸に住むのはあまりに露骨であつた。名古屋も考へて見たが、どうも住みたくもなく、またなんだか不自然でもあつた。

京都は江戸には遠いが、しかし赤穂からくらべれば江戸に近く、その上に京都なら、自分も兼ね兼住んで見たく思つてゐた處だし、引越しても誰も不自然には思ふまい。また思はないやうにして見せることも出來ると思つた。京都なら自分の死んだ弟もゐた處だから。それに小野寺十内もゐるし、話相手もあるし、淺野家と所縁の深い瑞光院もある。

彼は瑞光院のことがふと頭に浮ぶと、『あすこがいゝ』とすぐ思つた。同志と逢つて話すのに、あすこ程いゝ處は他にないと思つた。

さう考へてゐる內に急に彼は京都の郊外に住むことに腹をきめた。

それで彼は思ひ立つたが吉日と、すぐ起きて、燈火のもとで一通の手紙を書いた。

『急ぎ、一紙申し入れ候。このたびのことすでに御存知のことと存じ候。これも是非なきこと、我等家中一同の心底御察し下されたく、就てはいづ方にか片付申すべき了簡に候へ共、何處へ罷り越す可き心あたりも御座なく、難儀に及び候。就ては岡崎邊か山科邊に、上下十四五人も居り申したく、上方の儀不案內に之あり候故、浪人など住む處に惡きも計り難く存じられ候。いかゞに候や。伏見か、大津邊とも存じ候。貴僧近所とも存じられ候。この段御調べ願ひ上げ候。以上』

あて名は男山八幡宮の法印大西坊あてで、其處には甥の證讃が住んでゐた。
彼はそれを書きあげると、また床に入つた。
萬事が自分の思ふやうにゆくやうに思つた。
疲れが出たのか、ゝゝゝまどろむと、すぐ朝が來た。彼はまた朝食がをへると、すぐ登城した。
そして彼は登城の途中で、一緒に來た瀨尾孫左衛門に夜中に書いた手紙をわたして、これを祕密に證讃のゐる京都の大西坊にとゞけるやうに云つた。證讃はまだ少年であつたから、弟の弟子達にとゞけさしたのだ。
そして彼はすまして、城では籠城說を唱へてゐた。
そして彼は城中では、またすまして、次のやうな手紙を書いてゐる。
『恐れながら書をもつて申し上げ奉り候。今度內匠頭不調法仕候て、御法式之通りに仰せつけられ候段、畏り奉り候。然共上野介殿御存生之由うけたまはり傳へ候。左候へば當城離散仕り、何方へ面を向け申すべき樣も御座なく候。此段家中一同之存念に御座候につき、色々敎訓仕候得共、田舍者にて御座候へば、不通に承引仕らず候。然しながらもし離散仕

りても安心つかまつる筋も御座候はゞ、かくべつの儀に御座候。上にたいしたてまつり毛頭も御恨みがましき所御座なく候へ共、當城に於て餓死つかまつるべき覚悟に御座候。此段申し上候。恐惶謹言。

元祿十四年三月二十四日

大石内藏助

並家中一同』

彼はそれを書き上げると、吉田と原を呼んだ。そしてその手紙を讀んできかせて、これを城を受けとりにくる使者に出さうと思ふが、どうだと云つた。

二人は、

『結構です。』と云つた。

『だが、もう間にあはないかも知れませんね。』

原はさう云つた。

『間にあはなければ、それも反つていゝだらう。大きな聲では云へないが、この手紙は表むきには

きゝめがあるとは思つてゐないのだ。この手紙のきゝめは、開城の口實を得さへすればいゝのだ。この手紙を見れば、江戸の藤井殿や安井殿はおどろいて、大學樣や、戸田樣などに見せるだらう。さうすれば、きつと城を無事にあけ渡せとくるにちがひない。さうすれば、世間では開城は無理がないと思ふだらう。そこで本當の勝負が始まるわけだ。』

二人は大石が先の先まで考へてゐるのにおどろいた。

『處で使ひにやる人だが、江戸の藤井（又左衞門）殿や安井（彦右衞門）殿なぞと仲のいゝ人は誰か。彼等と相談がしたくなる人に行つてもらはないと、この役目は出來ない。』

二人は默つてゐた。

『そこで私の考へでは多川九郎左衞門、月岡治右衞門はどうかと思ふ。』

『結構です。』吉田はさう云つた。

原は『大夫殿はなか〳〵お人がわるい。』と云つた。

だが大石は笑はずに、眞面目な顔をしてゐた。

そこで早速多川と、月岡がよび出された。

大石はすまして云つた。
『君達は御苦勞だが、これから江戸へ急使に行つて戴きたい。』
『はい。』
『この手紙をもつて、城を受けとりにくる荒木十左衞門殿、榊原采女殿にお目にかゝり、この手紙をお目にかけてください。お兩人が江戸をおたちになるまへに、お目にかけなければならないのだから、そのつもりで、氣の毒だが、急いでもつて行つてほしい。だがこの手紙は、藤井殿や、安井殿にはお目にかけないやうにしてほしい。御心配をかけると悪いから。』
大石はすましてさう云つた。
二人は畏まつて承知した。
吉田や原は、大石のそのすました態度を滑稽に思つた。しかし大石は眞面目だつた。

二十三　籠城の噂

赤穗の武士達は籠城するにきまつた。

誰云ふとなくその噂が、口から口と傳はる。その傳はり方の早いことは、驚くべきである。
『赤穂の武士達は籠城して幕府を相手に戰ふさうだ。』
かう云ふ噂は、人々を喜ばさないわけはない。
何か面白いことがあればいゝと、泰平つゞきの人々は話の種をほしがつてゐる。そこに淺野の刃傷、切腹の話が傳はり、皆、吉良のやり方に腹を立てゝゐた時なので、赤穂の籠城說は人々を喜ばした。
『さうなくてはならない。』
『待つてゐた。』
さう聲でもかゝりさうに、人々はこの噂を受けとり、興味をもち、話しあつた。
そして人々は、赤穂の武士が奇蹟的な力をあらはし、雲霞のやうに押しよせてくる寄手をやつつけることを空想して、さうなると愉快だと思つた。
尤も城下の人々は、そんなに爭ひがひどくなることは望んではゐなかつたが、しかし赤穗から離れてゐる人々は、戰があることを面白がつた。さうして內々赤穗の武士達に勝たしたがつた。

赤穗の人々が怒るのはあたりまへだ。怒らなければ腰拔だ。世評はさう云ふ意向を見せた。

自分が討ち死にするのだと一寸考へる人も、他人の話だと事件が大きくなる方が面白い。それで赤穗の人々が籠城してどんなに働くか、それが樂しみで、この火事が出來るだけ大きくなり、話の種を澤山つくつてくれることを期待した。

しかし赤穗の武士達には、さう暢氣な問題ではなかつた。籠城すれば十が十まで死ななければならない。どうも死んでは面白くない。さう思ふ人も少くなかつた。むしろその方が多かつた。

それ等の連中は集るとは云つた。

『君は籠城するつもりか。』

『そんな馬鹿なことはしない。』

『生命が惜しいのか。』

『生命なんか、惜しくないが、僕は大石といふ男が氣に喰はないのだ。』

『僕もさうだ。あいつのおちつきはらつた顏を見ると、いやになつてしまふ。あいつは自分達だけが、勇士だと思つてゐる。籠城もいゝが、あいつのことを考へると籠城する氣になれない。』

『本當にさうだ。』

自分の臆病は棚に上げて、大石のせゐにしてゐる。

二十四　同

籠城の噂がたつと、方々から籠城組に加へてもらひたいと、申し込んで來た。

大石はそれ等の人に一々會つて、加つてもらふ人、斷る人と、實にはつきり解決をつけた。

今度の事件の起る前は晝行燈と云はれて、馬鹿か利口かわからなかつた大石が、今度の事件が突發してから、本當に怒り出したのか、決心して立ち上つた男のやうに、實にテキパキと自分の考へで、事を處理してゆく。そしてそれがまた實に道理に叶つてゐて、誰も正面から反對することが出來ず、たまに反對する人があつても、大石に說かれると、尤もだと云ふ氣になつて、內心不服でも、表面は反對することが出來なかつた。

大石がゐなかつたら議論百出して、まとまりさうもない時でも、大石が出てくると、すぐ解決がついた。それは大石が一番位置が高かつたせゐでもあるが、彼にしつかりした考へがあつたか

らで、他人の意見に動かされて、朝夕で考へが變るやうな男だつたら、さう話がまとまるわけにはゆかなかつた。

京都の淺野の家の留守番をしてゐる小野寺十內なぞも、今度の事件が起ると、養子の幸右衛門と赤穂にやつて來て、籠城の仲間に參加したが、十內は齡は五十九で、大石より十七歳上だが、大石にはすつかり感心して、友人に出した手紙にこんなことを書いた。

『內藏助の働き家中一統に感ぜられ候。……齡若に候得ば、少しもつかれる樣子なく、毎日終日城にて萬事を引きうけ少しもたじろがず滯りなく取りさばき申し候』

大石の樣子は、この手紙の通りだつた。

二十五　片岡磯貝の反對

その內に江戸から片岡源五右衛門や磯貝十郎左衛門など赤穂へ歸つて來たが、二人とも籠城說には反對だつた。二人は何處迄も復讐說で、吉良の首をとらないでは我慢が出來なかつた。それで二人は歸るとすぐ、私かに大石の處へたづねて來て、復讐說を持ち出して見たが、大石はてん

で相手にしなかつた。
それで二人は怒つて、城にもあまり顔を出さなかつた。
大石は、腹では賛成してゐたが、表面は何處迄も、城を枕にして討ち死にするふりをしてゐた。復讐說なぞは、今の場合口にすべきではないと彼は思つてゐた。それで、二人を頭から馬鹿にするやうにあしらつた。
二人の怒るのを見ると、大石は心で喜んだ。たのもしい人間だと思つた。

二十六　良雄浪人に逢ふ

或る日大石が城から下ると、道で、一人の男に出逢つた。その男は大石に丁寧に頭をさげた。大石も見ず知らずの浪人だが、丁寧に頭をさげた。
『御家老には私をお忘れになりましたか。』
『一寸想ひ出せません。』

『私は今でこそ浪人してをりますが、以前は赤穗にをりました近藤重右衛門と申す者でございます。どうか私めも籠城のお仲間にお入れください。』
『お志は嬉しく思ひますが、浪人を集めたとあつては公儀に對して憚りありますから、その儀はお斷りします。』
『どうしても御承知ございませんか。』
『どうも殘念ですがお斷りするより他ありません。』
『私がこんなに申してもおきゝ入れくだされなければ、私も武士の意地で、切腹いたすより他ございません。どうか、あはれと思つてお仲間にお入れください。』
『それはいけません。死ぬだけが忠義と云ふわけでもありますまい。私達は仕方がないとしても。』
『さうおつしやるのは復讐しろとおつしやるのですか。』
『復讐なんて以ての他です。私達は淺野家の再興以外は考へてをりません。私達の籠城も御家再興の御許しを願ひたい許りなのです。他に考へがある譯はありません。先君がおなくなりになつたことは殘念なことですが、公けの御處置に對して恨む筋合のものではありますまい。私

達は公けの御處置には不服を持つてゐるものではないのです。』
『さうですか、さうおつしやられると、私達が想像してゐたのとは、隨分ちがつてをります。』
『どう想像していらつしやつたのです。』
『復讐をなさるおつもりかと思つてをりました。』
『公儀に對して、私達が怒つてゐるとでも、思つていらつしたのですか、お若い考へです。』
大石は笑つた。
その浪人は去つていつた。
大石はついてゐた瀨尾を、ふりかへつて云つた。
『今の男はなんだと思ふ。』
『浪人でせう。』
『何處の。』
『當藩の。』
『お前も隨分人がいゝな。』

『それならなんですか。』
『間者だよ、あまり利口でないね。』
『さうですか。道理で、へんなことをおつしやると思ひました。』

二十七　籠城の會議の當日（連盟書）

やがて籠城會議の日が來た。
籠城したいと申し込んで來たものも可なりゐるといふ噂を聞いてゐた。若い義士達は、今日は大勢の人間が廣間に一パイ集つてくるだらうと、何となく思つてゐた。
處が約束の時間が來ても五六十人の人が集つて來ただけで、その他の人の姿は見えなかつた。
今に來るだらう、今に來るだらうと思つても、誰一人來なかつた。
來るものは早く來た。約束の時間に遲れて來たものは一人もなかつた。皆、啞然とした。
必ず來ると思つたもので來ない人が隨分ゐる。さうかと思ふと、こんな人がと思ふ人が來てゐる。

平時、強さうなことを云つてゐた連中で、來ないものも多かつた。また平常威張つてゐる連中は大概來なかつた。それは小氣味よいことではあつたが、天下を敵にしてゞも戰はうと云ふ空想をしてゐたものには、何と云つても六十人ではものにならない。何となく皆、元氣がぬけたやうな氣になつた。益々空元氣を出さうとは思つても、出すのに骨が折れた。

しかし大石は、がつかりはしなかつた。

籠城をしようと本當に思つてゐたのなら、彼もがつかりしたかも知れない。しかし彼の本心は復讐にあつた。だから五六十人もゐれば大丈夫だと思つた。

そして彼は一座を見廻して、そこに決心した。たのもしい人々の顏を見ることが出來たことを喜んだ。

其處には、

吉田、原、小野寺父子は勿論、潮田又之丞、岡野金右衛門、大石瀬左衛門、間喜兵衛、同十次郎、千馬三郎兵衛、大高源五、萱野三平、武林唯七、等々の顏がならんでゐる。それを見ると、大石も心が引きしまるのを覺えた。

來ないものなんか、前からあてにはしてゐないと彼は思つた。反つて少ければ少いがいゝと思つた。
人々は大石が口をひらくのを待つてゐた。
その待つてゐる顔の中には、十五歳の少年もあれば、七十歳を越してゐると思へる白髪頭も交つてゐた。
『もう集るのはこれだけだらう。』
『まあ、そんな處と思ひます。今日は、急病人が澤山出來たと見えます。』
原がさう云ふと、皆笑つた。
『それでは始めるとしよう。』
大石はさう云つて、威儀を正した。
人々も畏まつた。あたりがしいんとして、松葉のこぼれる音も聞えさうだ。
『今日は急病人が多く出來て集るものが少かつたことは、殘念ではありますが、急病人はいたし方がないとして、丈夫な我々はなほ決心を強くして、我等の目的を貫徹しなければならないと思

ひます。しかし正直に云つて、この人數で天下の大兵を引きうけて、一ト月さゝへることが出來るとは、思へません。そして淺野家を再興するためには、どうしても一ト月は當城をさゝへなければなりません。また我々が籠城したはいゝが、一日で落ちたでは面白くない。我等の名譽にはならないと思ひます。それで私が考へますには、これだけの人數より他、たよりにならないときまつたら、籠城は思ひ切つて、他の手段をとるより仕方がないと思ひます。それで私の考へる處では、城を受けとりにくる使者に、出來るだけ御家再興を賴んでみて、それでもどうしてもきゝめがなかつた時、我々一同は切腹して、御殿樣のあとを追ふことにしたらどうかと思ひます。さうすれば天下の同情が集つて、御家再興が出來るかと考へます。皆樣のお考へはどうですか。』

人々は意外の大石の言葉におどろいた。そして何と云つていゝかわからなかつた。

すると原惣右衛門が大きな聲を出して云つた。

『御家老のおつしやることは一々御尤もでございます。私達の生命は御家老にお任せいたします。切腹しろとおつしやれば、私が先づ第一に切腹いたしてお目にかけます。』

すると吉田忠左衛門も云つた。

『このありさまでは、戰つてすぐ負けて世間の物笑はれとなるよりは、一同切腹した方がたしかに天下の輿論を動かすことと思ひます。城を枕にして死ぬことは私達の覺悟してをりましたことです。戰ふのが不利ときまれば、御家老のおほせの如く、切腹より他に道はないと思ひます。』

『それでは誰も不服はございませんか。』

『ございません。生命の惜しいものは今日は皆急病になつて、こゝには來てをりません。城を枕にして死ぬことを覺悟して來たもの許りですから、不服なものはございません。』

原は一人で引き受けた。

『それでは、こゝに盟約をたて、一同この連盟書に連名していたゞきたい。』

さう云つて、大石は連盟書を、うや〳〵しく風呂敷包みから持ち出した。

人々は手廻しのいゝのにおどろいた。

人々は反對する氣になれなかつた。しかし同時に、人々の顏は少し青ざめて見えた。だが大石が、

『それでは失禮して私から名を書かさして戴きます。』と云つて、連盟書をあけて、おちついた

態度で、少しも手をふるはさず、しつかりした字で名を書くのを見てゐる中に、人々の中には、へんに勇氣がわいて來た。

中にはだん〳〵氣が滅入り、氣が遠くなるやうに思へ、額に膏汗がにじみ出てくるものもあつたが、多くは反つて、へんに力がわいて來、早く自分の番が來てほしいやうな一種の誘惑さへ感じた。

大石は、名を書くと、小刀を出して自分の指を切り、血判を押した。そして次席にひかへてゐた奧野將監に渡した。

奧野將監は人のいゝ男だつたが、彼はこの場に來なければよかつたと云ふやうな氣が、やゝもするとするのだつた。彼は不忠者ではなかつたが、死の恐怖に打ちかつには、骨の折れる男だつた。

だがそれだけ、反つてそれを知られるのを恐れて、平氣な顔をしようとしたが、字を、書かうとすると、ふるへさうで困つた。

彼は書き上げて血判を押したが、勇氣は出てくれず、氣が滅入りたがるのでよわつた。

連盟書は、つぎ〳〵と廻された。
あるものは、書くとます〳〵元氣になれ、決心が强まつた。あるものは何となく氣が滅入つたり、心細くなつたりした。
皆、今更に決心を强ひられたが、顏色の靑ざめる人と、赤くなる人とあつた。
手もふるへる人と、ふるへない人とあつた。そのふるへ方にもいろ〳〵あつた。勇氣が滿ちてふるへるもの、字を書くのが死ぬよりも怖くつてふるへるもの、また死が何となく怖くつてふるへるものがあつた。
連盟書はつぎ〳〵と廻る。

二十八　同

城を明け渡すと同時に切腹することにきまつて、連盟書には次から次と署名がつゞけられて行つて、矢頭の息子、右衛門七兼教の手にわたつた時、今年十六の兼教は子供心の純粹さから、忠義心に燃えて、その連盟書に名を書くことを光榮に思ふ氣で一ぱいになつてゐた。彼は待ちかま

へてゐたやうに、うや／＼しく連盟書を取り上げた時、
大石は聲をかけた。
『一寸お待ちください。』
『なんでございますか。』
『矢頭さんの御子息は今年何歳になられます。』
『息子めは十六歳でございます。』
『息子さんはまだお若い身の上で、私達と一緒に切腹なさるのは、お氣の毒に思はれてなりません。切腹なされる御覺悟はわかつてゐますが、こゝの所、生きのびられて、一家の今後のためにお働きになつてはどんなものかと思ひます。私にはあなたの息子さんを、今死なしたいとはどうも思へません。』
矢頭の親の方が何か云はうとした時、息子は、默つてはゐなかつた。
『これは大夫のお言葉とも思はれません。私は見小姓として先君にお仕へして、御恩を受けたものです。生命を先君に捧げてをりますもので、忠義の心では皆様に負けることを恥ぢるもので

ございます。今度、父が死ぬ覺悟をしました時、私も覺悟をいたしました。どうぞ私にも皆様と同じやうに、忠義の道を歩かしてください。私は生きのこる氣にはどうしてもなれません。』
聞くものは涙ぐみ、心が淸められた。大石も、わが子主稅のことを想ひ浮べて、矢頭の子の願ひも聽かないわけにはゆかなかつた。
主稅は十四で、この席には出ては來なかつたが、彼はこの時、主稅を助けたくつて、そんなことを自分が云ひ出したやうに、人々に思はれることを恥ぢた。
矢頭の父もつゞいて云つた。
『私の子は不束者ではございますが、先君を、お慕ひしてをりますゆゑ、どうか、私同樣、皆樣のおともをすることをお許し願ひます。』
彼の聲はふるへかけて來た。彼は涙聲を出すことを恥ぢて、それ以上は云はなかつた。
其處で大石も、かう云はないわけにはゆかなかつた。
『御立派なお二人の覺悟、大石感心いたしました。』
矢頭の息子は喜び、盟書を押し戴いて、自分の名を書き、血判をした。皆感動して見てゐた。

矢頭親子はその時、本當に死んでもいゝと思つた。

二十九　同

連盟書はまたつぎ〳〵とわたされ、皆、謹んで、それ〴〵自分の性格を見せながら、自分の名を書きこんだ。

この時、下廻りの働きをして、座の人々の用をしてゐた三村次郎左衛門が入つて來た。見るから武骨な、腕力の强さうな男だが、如何にも善良さうな男だつた。

それを見ると、あわてゝ連盟書を隱したものがあつた。

三村はその瞬間、侮辱された憤りに、身體がふるへて來、頭に血がのぼつて來た。

『私は小祿者ではございますが、忠義の心では皆様に負けるとは思つてをりません。それに私を敵と內通するものとでも思はれて、私がくると、あわてゝお隱しになる。あまりに私を侮辱されるなされ方。私は口惜しうございます。』

男泣きに泣き出した。

大石はそれを見て、

『三村に隠す必要はない。三村、今我々はこの城を明け渡した上切腹することにきめて、その連盟書に皆、名を書いてゐた所だ。お前も一緒に切腹してくれる氣なら、その連盟書に名を書いて、血判するといゝ。』

『大夫様、私めもそのお仲間に入れて戴けますか。ありがたうございます。ありがたうございます。』

今度は彼は喜んで泣き出した。

人間にとつて、死ぬこと程恐ろしいものはないやうに思へるが、しかし今こゝに集つた人々は、死んでもいゝ氣になつた。

人間には、喜んで死ねる時がある！

三十　同

大石は、へんに感激した。

三村は最後に署名をし、血判をした。大石はそれを受取り、うや〳〵しく戴いて、そして其處に書かれた名を一通り見た。一座は緊張して沈默があたりを領した。洟をすゝる音が時々、何處からか聞えた。しかし多くの人は、怒つたやうな表情をしてゐた。大石はそれを一通り見ると、またあらためて、連盟書に禮拜した。そして眞面目になつて云つた。

『皆樣が連盟書に名を書かれた以上、安心して私は本音を云つていゝと思ひます。しかしこのことは絶對に祕密に願ひたいのです。それは先君が上野介のあまりな無禮をお怒りになつた結果、今度のやうなことが起つたのですが、その吉良上野介には何のおとがめもなく、腰を拔かしたことについてお褒め言葉さへ戴いたと云ふ噂です。殿中で我が君を侮辱したことについては何のおとがめもなく、殿中と知つて刀を拔かなかつたことを褒められたのです。それを拔かなかつたのではなく、拔けなかつたのです。臆病の腰拔けのためです。そして我々だけには甚いおとがめを戴いたのです。先君はさぞ御無念なことと存じ上げます。それで私達は死を決した以上、たゞ死ぬのでは、先君のお志を果したことにはならないと思ひます。表て向きは切腹と見せて、實

は我々の信頼出來る、祕密の打ち明けられる方は、どう云ふ方かを知りたかつたのです。今日皆樣の誠意がわかりました。我々が力を一つにし、死を恐れずに讐を打たうと思へば、必ず打てると思ひます。皆樣のお考へはどうですか。』

人々はそれを聞くと、聲をあげて喜んだ。ほつとした人もあつた。人々は、何となく快活になつて來た。たゞ、切腹するだけではなく、やつつける敵が出來たのだ。とつくむ相手が出來た。

それ以上、吉良が憎くつて仕方がなかつた人や、吉良を恨んでゐる人々は、歡聲をあげた。

そして、どんな苦しい目にあつても必ず復讐して見せると云つた。

たゞ二三の老人連だけは、殉死をする方を望んだ。それも敵を打たないうちに、病死してはすまないと云ふ理由だつた。

しかしさう云ふ人は、大石や、吉田や、原や、片岡や、小野寺なぞになだめられた。

其處で酒もりが始められた。一同へんに元氣になり、勇氣が久しぶりにわいて來た。

『やつつけてやるぞ。』

目前にひかへてゐた死が少し遠ざかつてくれたことも、内證ではあるが、彼等を陽氣にした。

三十一　お陸と主税

お陸は子供を寐かしつけて、自分の居間に入つて平家物語を讀まうとしたが、さすがに今日の會議が氣になつて本は讀めなかつた。

彼女は本を讀むことが好きで、殊に平家物語は好きだつた。しかし今はそんな時ではなかつた。彼女は落ちついてゐたかつたが、やつぱり落ちつけなかつた。

主税も同じ思ひであつた。彼も出來るだけ落ちついてゐたく思つたが、落ちつけなかつた。そして母の處へやつて來た。

『お母さま、お父さまはまだ。』

『まだですよ。』

『遲いのですね。』

『まださう遲くはないのだよ。』

お陸は、一寸歸りが遲くつても、こんなに氣になる自分が、もし夫に死なれたら、どんなに參

るだらうかと、ふと考へた。
思ふまい、思ふまい、そんなことは思ふまいと考へるのだつた。
實際お陸は今になつて、いや夫が近いうちに死ぬと云ふことを知らされてから、なほ夫が大事で大事で仕方がなくなつた。
これではいけまいと自分で注意して見るのだが、どうにもならなかつた。しかし、いくら夫を失ひたくなくつても、夫に死なないでくれとは云へなかつた。むしろ夫と一緒に死にたいとさへ思つた。しかしそれさへ子供を育てなければならない彼女には、望めないことだ。
彼女はたゞ默つて、誰にも知らさないやうに泣くより、仕方がなかつた。
そして主税を見ると、この子も、父と一緒に死んでゆくのかと思ふと、可哀さうで仕方がなかつた。だが武士の妻として、そんな弱い心では仕方がないと思つた。彼女は誰をも恨まなかつた。
『お母さんは今日何人くらゐ集つたと思つて。』
『百二三十人くらゐは集つたらうね。』
『僕は二百人は集ると思ひますよ。』

『そんなにお集りになるといゝけど、お父さんのお話だと、うまくいつて、百人前後だらうとおつしやつていらつしたよ。』

『それだつて、まさか、逃げたりかくれたり、そんな見ともない眞似は出來ないでしよ。』

『意見の相違だからね。』

『それだつて、籠城に反對する人は臆病な人許りだつて、爺やが云つてゐましたよ。』

『大きな聲では云へないが、それは生命の惜しい方も澤山ゐるだらうがね。』

『そんな人、僕は澤山ゐるとは思ひませんよ。』

『處がゐるのだよ。存外、生命の惜しい人はゐるものだよ。』

『武士に生れてゐてもですか。』

『それはさうだよ。』

『よく恥かしくないな。』

『それは恥を知つてゐる人には出來ないことでも、出來る人は存外多いらしいよ。』

『少くつてはお父さまもお困りになるでせうね。』

『それはお父さまのことだから、少ければ少くつてもいゝとお思ひになるだらう。お父さまはどんな目にあつても、お困りにはならない。それもいゝだらうとお思ひになるよ。』
『僕は本當云ふと、籠城するよりは、吉良をやつつけたいの。』
『そんなことは云ふものではありません。お父さんのお考への方が、私達よりは深いのだから、私達はお父さんのおつしやる通りしてゆけばいゝのです。』
『それは、さうです。だから僕はお父さんのおつしやる通りします。ですが、吉良のことを考へると、僕は腹が立つて仕方がないのです。』
『それは私だつて腹が立つよ。煮えくりかへるやうにね。實によくない人らしいからね。上にはおべつかをつかつて、金をとること許り考へてゐる。思つても、不愉快な人らしいね。』
『お殿様は、そんな男に、意地悪をされたのですからね。僕は本當に腹が立つのですよ。』
『私が男だつたら、矢張り吉良を殺したくなるだらうよ。』
『本當に考へても僕は腹が立つて仕方がないのですよ。』
『いくら云つても切りがないよ。お前は早く寐たらいゝだらう。その方がお父さまはお喜びにな

るから。』

『それだつて、僕はちつとも睡くないのです。』

『それにしても、もうお歸りになりさうなものだ。もしものことがあつたら。』

『大丈夫ですよ、お母さま。いろ〱の人が、まぎれ込んでゐるさうですが、お父さんは大丈夫だと思ひますね。』

『私だつてさう思ふけど、萬一のことがあつたら。』

『僕、爺やをつれて見て來ませうか。』

『そんなことをすると、反つてお怒りになるよ。』

『僕もなんだか氣になりますね。』

『二人で、そつと氣がつかれないやうに、角まで見に行つて見ようか。』

『えゝ。』

『庭からそつと出て見よう。』

『えゝ。』

その時、
『殿樣のお歸り。』といふ聲が聞えた。
二人は喜んで出迎へた。
良雄は少し酒を飲んだらしい顏をしてゐた。そして上機嫌だつた。
『どうでした、お父さん。大勢集りましたか。』
お母さんよりさきがけして、主稅は訊いた。
『大勢集つたよ。』
『それは感心でしたね。』
『全部で六十一人集つた。』
『たつた。』
主稅はむら〳〵と腹が立つて、口が利けなくなつた。
『六十一人もゐれば充分だよ。』
『それで籠城なさるの。』

『籠城は止めにした。』

『どうして止めたの？　お父さん。』

『六十人前後ぢや、いざと云ふ時、もつと減つても、ふえはしない。それでは籠城しても、すぐ城は落ちてしまふ。反つて、赤穂には忠義な臣が少いと云ふことを天下に知らすだけだ。』

『籠城を止めてどうなさるのです。』

『切腹するのさ。』

『切腹？』

『切腹するのですか、お父さん、讐も打たないで。』

『さうだよ。お前切腹するのはいやかい、矢頭の息子の十六になる子も切腹する仲間に入つた』

『僕は切腹なんか、怖かありません。僕はたゞ吉良が憎くつて仕方がないのです。』

主税は泣いた。

良雄は珍らしく妻の居間に入つて來て、

『もう少し酒が飲みたい。』と云つた。

『本當に切腹なさるおつもり。』自分で酒の用意をしながら云つた。
『俺が切腹したら、少しは泣いてくれるか。』
良雄は冗談半分に云つた。
『私、泣きませんわ。』
『感心と云ひたいが、少しは泣いてくれないと困る。』
『どうして。』
『俺が腹切るだけでは損だ。お前にも少しは辛い思ひをさしてやらなくつてはね。はゝゝゝゝ。』
良雄は嬉しさうに笑つた。
『本當は切腹なさるのではないでしよ。』
『ないかも知れないね。死ぬのが少し厭になつて來たからね。死んだつて馬鹿氣てゐる。』
『本當にさう思つていらつしやるのですか。』
『矢張り俺を死なしたいと見える。』
『そんなことはありませんわ。』

『だが俺が切腹も厭、讐を打つのも馬鹿氣てゐる。この世は愉快に過すのが一番いゝのだと云つたら、どうだ。矢張り内々は、お前は俺に死んでほしいのだらう。』
『…………』お陸は返辭が出來なかつた。
『だが、それでこそお前は武士の妻だよ。俺の妻だ。この馬鹿な俺のね。』
良雄はかう云つて、ふと息の主税が、むづかしい顔して坐つてゐるのに氣がついた。
『切腹の仕方をお前は知つてゐるか。』
良雄は存外醉つてゐるのかも知れなかつた。
『知つてをります。』
『感心、感心、それなら一つして見せろ。』
『かうでせう、お父さん。』
主税は、其處にあつた物指を取つて、切腹の眞似を眞面目にして見せた。
『なか〳〵うまい。だがそんな持ち方では腹は切れないぞ。かう持つて、やるのがいゝのだ。だが早く寐るがいゝ。』

『はい。』
『一寸待て、本當は、こゝでだけの話だが、切腹は吉良の首を取つてからの話だ。切腹よりは、内證で人を切る稽古をしろ。』
『本當ですか、お父さん。』
『内證だぞ、生命にかけて。』
『はい。』
主税は初めて嬉しさうな顔をした。
『もう寐るがいゝ。お前も俺の子で、男だから、しつかりしなければいけない。』
『はい。』
主税は、
『おやすみあそばせ。』と丁寧にお辭儀して勇んで行つた。
『可愛い奴だ。』
『私もきつと復讐をなさるのだと思つてゐました。』

『お前も嬉しいのか。』
『あなたは。』
『嬉しくもあり、嬉しくもなしだ。俺は今日しみ〴〵考へた。今日集らない奴に、本當に偉い奴がゐるのではないかと思つた。』
『そんなことはありませんわ。』
『處があるのだ。俺は內々目にかけてゐた、二人の若者がゐたが、その二人とも今日は來なかつた。そいつは、死んでもつまらないことを知つてゐるのだ。死んだつて何にもならないことをね。俺はそれに氣がついて、ぞつとした。俺だつて、家老でなかつたら、そして二十二三の若者だつたら、今日お城なんかには集らなかつたと思つた。俺は世間が怖い、生きて恥かくのが怖い。俺が死ぬのは忠義のためだか、世間が怖いためだか、俺にはわからなくなつた。』
『そんな事はありません。殿樣を愛してゐる方は、復讐しないでは、辛抱が出來ないのがあたりまへと思ひます。』
『孔子だつたら復讐はなさるまい。また神君や、太閤だつたら復讐はなさらないであらう。復讐

なんかするために一つきりない生命を投げ出さないでは我慢の出來ない俺達は、ごく小さい人間にすぎないことに今更氣がついた。だが、のりかけた舟だからやることはやるが、大人氣ない氣がして來て、へんに淋しい氣がした。それで俺は、つい酒を飲んでしまつた。俺は死ぬのが怖いのではない。だが、復讐するより他に能がない自分が情ないのだ。』

お陸は何か云ひたかつたが、何にも云へなかつた。

『これも武士の意地だ。俺は見ともないことがしたくない。俺は臆病ものになりたくない。それで俺はやるのだ。たゞそれだけだ。利口な奴は俺のことを笑ふだらう。だが、俺はおめ〳〵と生きながらへる氣にはなれない。』

さう云つて、良雄はまた酒を飲んだ。

『どうせ、大したことは出來ない俺だ。痛快な事をして、世間をうんと騒がせるくらゐが俺の仕事として丁度いゝ處かも知れない。俺はやらうと思つたことだけはやるが、俺は若い連中のやうに、吉良の首を取ることにさう夢中にはなれないので、皆と一緒に興奮してゐるやうな顔はしてゐたが、皆が元氣になるに從つて、へんに氣が滅入つて困つた。だがお前は俺が臆病になつて世

間の物笑はれになつて生きるよりは、俺達が忠義の臣になつて死んで貰ふ方がいゝだらう。いくら淋しくつても。俺もさうなのだ、笑はれて生きてゐるのは死ぬよりも嫌ひなのだ。その上何かしてやらないと氣がすまない。だが俺は若いもの達のやうに夢中にはなれないのだ。』

良雄はまた、妻に酌さして酒を飲んだ。

『どうでもなるがいゝのだ。俺は生きてゐるのが厭になつたのだから死ぬことはさう厭ではない。』

『それでも殿樣のことを思ひますと。』

『さうだ、なき殿樣のことを思ふと、この俺でも吉良の首が見たくなる。だがそれは俺の人物が大きくない證據なのだ。』

『そんなことが。』

『だが、どうだつていゝ、俺は自分相當のことをやればいゝのだ。』

良雄は、しんみりさう云つた。

『かうやつてゐると氣が落ちついてくる。寐ることにしようか。』

『はい。』
良雄には、へんに自分の妻が今宵は美しく思へた。
妻もまた、夫をかぎりなく大事に思はれ、いたはしくも思へた。

三十二　使歸る

江戸へ使に出された二人は、道中無事に江戸に着いたが、もう城を受取る役人が出たあとだつた。それで二人は相談した。
『大石殿はこれを渡される時に、江戸の家老の藤井殿や、安井殿に見せるなとのお話だつたが、こゝまで來て、逢はずに歸るわけにもゆくまい。』
と云ふことになり、
二人に逢つて、大石から預つた手紙を見せた。無能で事なかれ主義の二人の江戸家老は、それを見てびつくり仰天。お家の一大事と思つて、使の二人をつれて早速、大垣侯の戸田釆女正殿の處へ出かけて行つた。

大垣侯は藤井安井の話を聞き、おどろいて大石の手紙を見た。
大垣侯は、それを見ると、怒り出した。
『こんな手紙の書き方をする奴があるか、大石と云ふ奴は餘程、井の中の蛙と見える。こんな嘆願状を公儀へ出したら、どんなにお怒りを蒙るか知れない。馬鹿にも程がある。餓死するとはなんだ。こんな奴勝手に餓死さすがいゝが、俺達もお相伴を食つてはたまらない。』
そして大垣侯は、すぐまけずに手紙を書いた。
『多川九郎左衛門、月岡治右衛門兩使を以てよこされ候紙面の趣、家中面々無骨の至に候。御當地不案内の趣に候。内匠日ごろ公儀を重じ奉り勤仕いたされたる事、各〻存じのことに候。内匠家中奉公の筋は速に其地を引拂ひ、城滞りなく相渡され候段、公儀を重じ奉る内匠日頃の存念に相叶ふべく候間、申すに及ばず候へども、追々指圖の通相守られ、早速穏便に退かれ候段、肝要の事に候。此旨家中の面々之を承り、納得あるべき者也』
それからまた内匠頭の弟の大學も、開城するやう、懇々と說き、藤井安井も尻馬に乗つて、不心得のないこと、公儀に背かないことをムキになつて忠告した。

二人は江戸に行く時よりは、なほ本氣になつて大急ぎで歸つて來た。ゆきに八日かゝつた所を、今度は五日あまりで歸つて來た。

早速大石のところへ出かけて、使のおもむきを云ひ、そして大垣侯初め、大學等の手紙を渡した。

大石は大垣侯の手紙を押し戴き、讀み出したが、むら〳〵と腹が立つて來た。

先君が公儀をそんなにまで重じてゐられたのが本當なら、幕府の處置の嚴しすぎるのは、なほ腹を立てゝいゝはずではないか。大垣侯の云はれるやうなことを、我々が知らないと思つてゐられるのか。

しかし大學からの手紙を讀むに從つて、彼は怒りよりはむしろ、一種の力脫けがした氣がした。

そして藤井安井の手紙を見ると、彼はふき出したくなつた。

『臆病もの、うろたへたな。』

しかし反つていゝ。これで無事開城する理由が出來た。

これ等の人々は喜ぶだらう。だが今に見てろ。更に恐ろしいことを仕出かして、おどろかして

見せる。その時、腰を抜かさないやうに用心するがいゝ。
しかし彼は、顔にはそんな樣子は見せなかつた。いかにも謹んで拜見してゐるやうに見せた。
そして自分の考へ不足が、氣まりがわるいやうに見せた。そして二人に、
『御苦勞だつた。』と云つた。
彼はすぐ吉田と、原を喚ばした。二人はあわてゝ來た。
『どうだ、この手紙を見て見るがいゝ。』
二人は見て云つた。
『おどろきましたね。』
『だがお蔭で開城が出來、最後の方法が自然にとれることになつた。』
『本當に開城にいゝ口實が出來ました。』
『馬鹿と鋏は、使ひやうで切れると云ふが、本當だね。』大石はさう云つた。
三人は笑つた。

その晩、お陸はいつまでも夫の處にお客が來てゐるのが、氣になつた。自分も男に生れてゐたらと思つた。心の中だけで心配してゐて、それが口に出せない、また相談にも乘れない身が口惜しかつた。

だが彼女は謹み深く、何にも氣がつかないやうな風して、夫の樣子を見てゐた。そして夫の元氣な聲を聞くと、嬉しかつた。同時に彼女は家來達に命じて、祕密をうかゞふ人々がないやうに見廻らした。自分もいざと云ふ時、すぐ薙刀を持つて庭に飛び下りる心の用意をしてゐた。

三十三　開城の會議

開城の會議は面白かつた。開城ときまると、大勢が集つて來た。今度は生命が危くない許りではなく、あと始末の時、皆に金が分配されることも知つてゐた。だから義士不義士の區別なく皆集つて來た。

そして會議が始められた。大石はすました顏して、

『困つたことが出來ました。』と云つた。そして、大垣侯達の手紙を謹んで讀んで聽かせた上、『こ

とがかうなつた上は、籠城は公儀に對し、また大學殿に對し、また大垣侯に對し、不穩當すぎるやうに思はれます。不肖ながら、一時の腹立ちから、其處まで氣がつかず、籠城說をとなへたことは、誠に恥かしいことで、穴があつたら入りたいやうな氣もします。しかし君子は過を改むるに憚ること勿れと云ふことがありますから、私は過を改め、開城說の方々に贊成しようと思ひます。皆樣のお考へはどうですか。』

『大夫のお考へに私は第一に贊成します。』

原惣右衛門がさう云つた。大野達は、狐にばかされたやうに眼をぱちくりやつてゐたが、話がさうきまれば、彼も安心して、のさばり出ることが出來た。

『ですから私は、初めつから云はないことではなかつた。それで開城するについては、いろ〳〵の手はずが必要と思ひますが、それはどう云ふ風にしたらいゝですか。』

『それ等の點については、大夫殿に御一任した方がいゝと思ひます。皆樣はどうお考へになりますか。』

『それがいゝと思ひます。』

大野達が何か不服を云はうとしたが、義士達は何も云はさないうちに、大石に一任することに話をきめてしまつた。

『それでは不肖私が明日までに考へまして、その上で、皆さんのお考へを聽くことにしませう。』

かくて開城説は、あつけなくきまつた。

不義士達は義士達の變節ぶりに愛想をつかして、俺達にも出來ない眞似をすると思つた。しかし義士達はまた心で、不義士達を輕蔑し、自分達の祕密を内心得意にしてゐた。

『今に見ろ、おどろくな。』

三十四　開城の相談

赤穗の城中の廣間には今、三百人近くの人が集つてゐる。それ等の人は大石が何か云ひ出すのを待つてゐる。そして皆、見ないふりしながら、眞中に積まれてゐる一萬六千四百兩の金をぬすみ見てゐる。

主君が切腹して、城が開け渡される時でも、黄金の魔力は人々の心を捕へてゐる。大野父子を先頭とする不義士は勿論、義士の中でも少數をぬかす他は、金に無心にはなれなかつた。あの中のいくらが自分のものになるのだらう。私かに胸算用してゐる者も少くなかつた。

彼等が犬だつたら、尻尾が自づと動き出してゐるにちがひない。しかし、彼等は幸ひ尻尾をもつてゐないから、露骨に自分の根性を出さずに、表べは神妙にしてゐた。

大石にはそれ等の氣持がよくわかつた。しかし彼はそんなことに憤慨する男ではなかつた。彼でも金はあるに越したことはなかつた。それだけ彼は今日金の分け前を自分は辭退することにきめてゐたが。

若い正義の武士には、籠城の時は集らなかつた人間が、開城ときまり、殊に、今日金の分配される日だと云ふことがわかると、厚顔にも集つてくる人々の心が露骨にわかつて、不快だつた。彼等は、そのあてつけにも金を辭退したいと思つたが、しかし、金がないと實際困る事情に自分達がゐることを思ふと、斷る勇氣もなくなるが、しかし金が欲しいとは思ひたくなかつた。それでも矢張り金のことが氣になるのだつた。

酒が飲めるな、あそべるな。――

なぞと考へてゐるものは罪のない方かも知れない。少しでも多く取りたいと思つて、逆上しかけてゐるものも少くなかつた。人情の機微を知つてゐる大石は、それ等の人に不平を起させずに、この厄介な面白くない問題を、すら〳〵と解決したく思つた。

大野は、まるでちがふ考へをもつて、其處に坐つてゐた。彼には、どうも大石達が何かずるいことをしてゐるやうに思へた。ずるいことはさせないぞと監視する氣で見てゐた。

一體町人達に渡してあつた藩札を、わりにいゝ條件で交換したのさへ、大野が見ると、町人とぐるになつて、町人からうまい汁でも吸つてゐるにちがひないと思はれた。彼は、大石や岡島達のやり方が腑に落ちなかつた。大野には大野の見方がある。今日もきつと彼等は何とかうまいことを云つて、俺達をだまして得するにちがひない。彼はさう思ふと、だまされないぞと云ふ氣になつて、少しでも損をさせられてはたまらないと、眞劍な氣持になつてゐた。

これは大野ばかりではなかつた。百人近くは期せずして内心そんな考へをもつてゐた。

大石は痛くない腹をさぐられるのは面白くないが、しかし彼には彼で、復讐のための用意の金

をつくつておくことは必要だつた。

彼は不義士達に、どう思はれてもかまはないと思つた。こゝでも彼は孔子の言葉を想ひ出すのであつた。

『内に省みて疚しからずば、夫れ何を憂へ何を懼れん。』

自分が得するのではない。武士道のために働くのだ。生命を投げ出してする仕事だ。他人の思はくなぞ恐れて何が出來る。潔白に思はれたいために、不義士に媚びて、大事な兵糧を失つては讐は打てない。

彼は時分はよしと思つて、しやべり出した。彼の決心はきまつてゐたのだ。

『さつきも申しました通り、開城の役わりもきまりましたから、今度はいよ〳〵こゝに取りよせました、一萬六千四百兩の金を處分する事にいたします。皆様は今の場合、金のことなぞは念頭におありになるとは思ひませんが、しかし城も無事に開け渡し、我等も切腹せずに離散することになりますれば、何と云つても先立つものは金だと思ひます。勿論、十分に金があるわけではございません。こゝにあります金が全部でございまして、この中から淺野家の御菩提所や、由緖の

ある寺々に永代の御禮祀をお願ひする金も出さなければなりませんし、また、先君の奥方、瑤泉院殿が御入輿の時持つて來られた御化粧料は、お返ししなければならないと思ひます。皆樣の中に御異存のある方がありましたら、おつしやつて戴きます』

大石はさう云つて、一座を見廻した。

『御異存はないと思ひます。それではさう云ふことにきめます。それから次に、淺野家再興の時の用意金を取つておく必要があると思ひますが、いかゞですか、不服のある方がございましたら、おつしやつて戴きます。』

誰も默つてゐた。

大野は腹の中で、こいつがあやしいと思つた。だが彼も、すぐは口を切ることは出來なかつた。

『それでは御異存がないものと思ひます。』

『一寸お待ちください。』

大野は、こらへ切れずに口を切つた。

『御異存がおありになるのですか。』

大石は押へつけるやうにさう云つて、大野の顔をぢつと見た。
『さう云ふわけではありませんが、その用意に、どのくらゐの金を取つておくおつもりですか。』
『それはこれから申さうと思つてをりました。以上で、少し少いやうでございますが、一萬兩だけは要ると思ひます。』
『一萬兩?』
『少うございますか。』
さすがの大野も多いとは云へなかつた。腹の中がむしやくしやしたが、しかし彼はかう云ふより他なかつた。
『さう云ふわけではないのです。』
『それでは多いとおつしやるのですか。』
『さう云ふわけでもありません。しかし、私の聞く處では、藩札と金とを交換なさる時、ちと餘計、金がかゝりすぎたと云ふ噂でございます。』
『私はさうは思ひません。私はもつと多く拂ひたかつたのです。町の人達に損はかけたくな

い、殊にかう云ふ際、人心が動揺してゐる時、損をさしたくないと思つたのです。』
『御立派なお考へですが、しかし噂によると、金を持つて逃げたものもあるやうな話、また金をちよろまかしたものも、あると聞きましたが、大夫殿にはその責任はどうなさるおつもりです。』
『不正はありません。』
『人の口には戸が締められないのが、残念です。』
『何とおつしやるのですか。』
兄と同じく腹を立てる名人の岡島は云つた。
『私でも不正をしたとおつしやるのですか。』
『さうは申しませんが。』
岡島は何か云はうとしたが、大石は止めた。
『誰も岡島を疑ふものはない。この席では、さう云ふ話をする暇はない。それであと六千四百両残るわけですが、これを皆さんにお分けしたいと思ひます。私の考へでは、いつも禄を多く戴いてゐる方は、この際さうお困りではないと思ひますから、それで我々は浪人してしまへば、皆

平等になるわけですから、この金は一同平等に分けた方がよくはないかと思ひますが、皆さんのお考へはいかゞですか。』
『それは不賛成です。』
大野は二十兩そこ〳〵で逐ひだされては大變と思つた。彼はもう人の思はくなぞ氣にしなくなつた。それ程、彼にとつて金を少しでも多く取ると云ふことは、大事件だつた。
大野は云つた。
『大夫殿のやうに平常お心がけがよく、金をおためになつてゐる方は別です。我々は平常用意しておくだけの餘裕なぞはございません。祿高の多いものはそれだけ、人を使つてもをりますし、何かと入用も多いものです。ですから、祿高で分配された方が、正しいと思ひます。召使なぞにも、金を分けてやらねばなりません』
『大野殿のおつしやることが正しいと思ひます。實際我々にとつては二十兩や、三十兩では、あと始末がつくとは思へません。』
『それでは、祿高によつて分けると云ふことに異存の方はございませんか。』

さすがに時代が時代なので、さう云ふ不服を云ふものはなかつた。

『それでは祿高によつて、きめるやうにしませう。岡島、その分配の高を一つ計算してほしい。』

『畏まりました。』

岡島は廣間から出て、調べに行つた。そして、間もなく歸つて來て云つた。

『百石について二十四兩のわりになりまする。』

『さうか、百石について二十四兩、少いが已むを得まい。御主君が御切腹なされてゐられるのだ。我々はどんなことがあつても、辛抱いたさなければなるまい。』

大石はさう云つた。

大野は百石で二十兩だと、二百兩一寸だと胸算用した。少いが、しかしあぶない所で二十兩切りもらへない所だつた。先づ口を出してよかつたと思つた。

先つ第一に大石の前へ、三百六十兩の金が運ばれた。大石は、

『私は大野殿も云はれたやうに、貯へもありますから、これは御辭退いたします。百石以下の方々へ渡す方にでもお入れください。』

と静かに云つた。それは皮肉ではなささうだつた。

三十五　大野父子の逃走

大野は席からはなれても、なほ未練がましく、同じ穴のむじなと話しあつた。
『どうも俺は、岡島と云ふ男はあやしいと思ふのだ。商人に恩を賣つて、賄賂でも取つたのではないかと思ふ。』
これを聞いてゐた一人が、あとで岡島八十右衛門にしやべつた。身の潔白に内心傲りを感じてゐた岡島は、それを聞くとかつとした。すぐ大野の家に出かけて行つた。
『おい、主人はゐるか。主人はゐるか。』
玄關で呶鳴つた。
とりつぎは出て、その劍幕におどろいた。
『まだお歸りになりません。』
『歸つたら、岡島八十右衛門が一寸お訊きしたいことがあつて來たとさうとりついでくれ。また

後刻來るから。』
岡島が歸つて間もなく、家へ歸つて來た大野は、それを聞くと、顏が青ざめた。
『聞えたのだな。』とさう思つた。
『來たら留守だとさう云へ。』
『畏まりました。』
岡島は間もなくやつて來た。
『歸つて來たらう。』
『まだお歸りになりません。』
『噓だらう。』
『本當でございます。』
『さうか、それなら歸つたら、とりついでくれ、首を洗つて待つてゐろつて。』
『へい。』
玄關番は腰を拔かす程おどろいた。

岡島は門を出て、方々歩き廻つて、またやつて來た。
『主人はゐるだらう。ゐなければ、上つて待つぞ。止めると承知しないぞ。』
無理に上らうとした。
『一寸、どうぞお待ちください。聞いて參りますから。』
玄關番、出て來て、平蜘蛛のやうになつて云つた。
『主人は急病で臥りました。明朝來て戴きたいとのことです。』
『さうか。それなら明朝まで生命は預けておいてやる。病人は相手にはしない。君の主人はよく急病にかゝると見えるね。あはゝゝゝ。』
大笑ひして歸つて行つた。
翌朝、岡島はまた出かけた。
所がその時、旣に大野父子は逃げてゐなかつた。
金さへ取れば用がなかつたのか、生命が惜しかつたのか、二人は逃げてゐなかつた。それも餘程あわてゝ逃げたらしく。

大野の爺の方は女輿に乘つて逃げてゆき、息子の方は夫婦して逃げたが、赤坊は泣くと人に氣がつかれると云ふので、子供をおいて逃げたのだつた。
さすがの岡島も、これにはおどろいて、開いた口が塞らなかつた。
『限りのない馬鹿だ。腰拔けだ。』
大野父子の逃げ出したことは、瞬く間に町中の話の種になつた。
城を開け渡す用意で忙しがつてゐる義士達は、それを聞くと、大いに笑つた。
さすがの大石も、大野の思ひ切つた臆病ぶりには苦笑するより仕方がなかつた。
『苦々しい奴だ。』
さう吐き出すやうに原は云つた。
大石の妻や主稅もその話を聞いた時、おどろいた。愛想がつきる以上に腹さへ立つた。
良雄は笑ひながら云つた。
『珍らしい男さ。』

三十六　お陸主税と散歩す

その翌日の夕方、大石の妻は主税と二人、夫の歸るのを家にぢつと待つてゐる氣になれず、私かに町の樣子を見に行つた。

町の面目は一新してゐた。道は掃き淸められ、橋は直され、道路のこはれてゐる所は直され、多くの人は武士に指圖されて、城を受けとりに來る使者を迎へるために働いてゐた。町人達も、心を一つにして自分達の店や、家を掃除してゐた。

實によく統一がとれてゐた。そして殺風景な處が少しも見られなかつた。人心は落ちついてゐた。たゞいつもより嚴肅な氣分が漂つてゐた。そして人々は忙しさうにしてゐた。

處々で人々は大野父子の逃げた話をして、笑つたり、おどろいたりしてゐたが、しかし大概の人は暢氣にしてゐた。大事件が起りかけて、起らなくなつたので、町の人々は安心して、落ちついて日常の生活をいとなんでゐる。

大石の妻と子は、その落ちついた町のありさまを見て、心が引きしまるのを覺えた。もうぢき

自分達はこゝを離れなければならない。永く住みなれた處だけ、何となく心殘りだつた。
道を忙しげに行く武士達の中には、大石の妻子に氣がつき、びつくりして丁寧にお辭儀するものもあつたが、氣がつかない人の方が多く、彼等は、暮れゆく町の姿を、感慨無量に歩いてゐた。
いつも氣がつかない町のこまかい處まで今日は氣がつき、夫や、父の心づかひが、隅々まで行きわたつてゐるのに、二人は今更に感心した。
町の人々は、少しの損で過ぎたのを喜んでゐるやうだつた。
『それなら、歸るとしようかね。』
『はい。』
『何處まで行つても限りがないから。』
『はい。』
主稅は神妙にさう返事をした。彼は何かしやべると、泣きたくなりさうだつた。
暢氣に見てゐられなかつた。彼は町を見ても、心の中では復讐のことが一杯だつた。殿様が切腹された姿が、町を見ても、眼の前に浮んでくるのだつた。この上なくお仕合せでゐられるお身

體なのに。
彼はさう思ふと泣きたくなるのだつた。そしてこの町も誰か他の大名に支配されることになるのだ。さう思ふと、殘念な氣がした。腹さへ立つて來た。
母の方は腹が立つよりは、何となく淋しかつた。もう一生、この町へは來られなくなるかも知れない。また來られたにしろ、その時はもう自分達の町ではない。他國の武士達が威張つて歩き廻る町にちがひない。
これが見納めになるのではないかと思ふと、今迄よりも町が美しく、貴いものに見えた。
この時、足早に二人を追ひこして行く三人の浪人がゐた。
『大石と云ふ男は、もう少しは勇ましい男かと思つた。』
『本當にがつかりした。あいつは變節漢だ。籠城すると云つてゐるかと思ふと、切腹するなぞと云ふ。さうかと思ふと、また澄まして開城だと云ふ。』
『あんな男とは思はなかつた。』
『だまされた俺達が馬鹿だつたのだ。』

二人はそれを聞くと、腹が立つた。

『今に見ろ。』と思つた。殊に主税は口惜しがつた。しかし默つてゐるより仕方がなかつた。

『今におどろかしてやる。』主税はさう決心した。

『何とでも云ひたい人には云はしておくより仕方がないね。お父さんはいつも云つていらつしやる。君子は人に知られないでも怒らないつてね。お父さんは誤解されることなんか、少しもお恐れにはならない方だ。反つて臆病者と思はれることを喜んでいらつしやるだらうよ。敵が安心するからね。』

『本當にさうですね。お母さん。』

主税は少し嬉しくなつた。

三十七　堀部安兵衞等大石を罵る

大石を攻撃するのは、不義士ばかりではなかつた。江戸から籠城軍に加らうとして歸つて來た堀部安兵衞、奥田孫太夫、高田郡兵衞なぞも大石の態度を攻撃した。これは大石が變節したと思

つたのだ。
それで大石の處へ、赤穗へ來るとすぐ談判しに來た。
三人の大きな聲が室外にまで響いてくる。お陸は、その聲を聞くとはら〳〵した。今にも喧嘩でも始りさうな勢ひだ。夫の聲は低いのでよく聞えない。三人が怒つて歸つたあと、妻は氣にして夫に訊いた。
『大丈夫安心してゐるがいゝ。』怒つたやうにさう云つた。其處へ主税が入つて來た。
『お前何處にゐたのだい。』
『僕、廊下の蔭に隱れてゐたのです。』
『なぜ隱れてゐたのです。』
『お父さんを三人が切りつけでもしたら、僕はお父さんの加勢をしようと思つてゐたのです。』
『あはゝゝゝ。』大石は笑つた。
『なか〳〵いろ〳〵の人がゐますから大へんですね。』
『腹さへきまつてゐれば何でもない。お前達は、そんなことに口は出さないがいゝ。』

『はい。』妻はさう云つた。

三十八　大石の病氣

日は一日々々と過ぎてゆく。

赤穗の城の開け渡しも無事に過ぎた。大石は妻子を妻の實家にやつて、自分は忠僕八助の家のある在處の尾崎村に小さい家を借りて、其處に假住居をしてゐた。

過ぎたことは夢のやうだ。同志は時々やつて來たが、誰も來ない日が多かつた。

夕方蛙の聲なぞがやかましく聞えてくるが、それも何となく寂しい風情を添へてゐた。彼は其處で靜かに本を讀んだり、考へたりして日を送つてゐた。かう云ふ日が一生つゞいても惡くないと思ふ瞬間さへあつた。

所が彼は不意に兩腕が痛み出し、腫物が出來た。醫者に見せると疔だと云ふことだつた。彼は痛みに打ちかてずに、時々嘆息をついたり、うなつたりした。痛みのはげしい時は萬事を忘れ、どうなつてもいゝと思つたが、痛みが治ると、またいつもの内藏助に戻つた。

彼は早く治したいと、あせればあせる程腫物は痛み出した。もう勝手にしろ、なるやうになれと思つて、氣を鎭めて見たが、また痛み出して、うめきたくなつた。

大石は落ちついた男だが、本能的な所のある、また快活な所もある男だつた。冗談もよく云つた。八助夫婦が忠實に介抱してくれたが、彼は時々、妻子がゐないのが、心殘りだつた。妻がゐてくれたら隨分我儘を云つてやるのにと、とき〴〵思つた。

それと同時に、ゐたら心配するだらう、ゐない方が結局氣樂だとも思つた。そして、八助が奧樣にお知らせしませうかと云つても、彼は「知らせるな」と云つてゐた。

彼が病氣でも、同志達は遠慮しなかつた。性急の連中はもう江戸に出かけて行つた。そして大石にも早く來るやうにと催促して來た。

大石はそれを聞くと、

『若い奴にも困る。』と云つたが、別に困つてもゐないやうだつた。たゞ疔には困つた。

こんな小さい腫物に、男子がこんなにまでやつつけられるのは恥だとも思つたが、彼は時々わざと誇張してうなつて見たりして、八助達を心配さして、うさはらしをした。

少し氣分のいゝ時は、近所に住んでゐる原を喚びにやつて、話相手にするのだつた。原の性急で、感じが早く、快活なのを彼は好いてゐた。

原に逢ふと氣が暢氣になれた。

原が來て、

『腫物はどうですか。』と訊くと、彼は、わざと痛さうな顏して、

『こんなに痛いと、切腹でもする方が樂なやうだ。生きてゐるのが、いやになるよ。』

『醫者に訊きましたら、大層およろしいと云つてゐました。』

『あいつの云ふことがあてになるものか。ますく〵惡くなるばかりだ。だがどうだ、性急坊主から何か云つてくるか。』

『よく云つて來ます。』

『それで何と返事を出してゐる。』

『せいては事を仕損じると云ふことを書いてやつてゐます。』

『あやしいものだね。內心贊成してゐるのだらう。』

『あなたの御病氣が治りましたら。』

『病氣が治つたつて駄目だよ。病氣が治つて、すぐ死ぬのは馬鹿氣てゐる。浮世の風に少し吹かれてから死にたいものだ。』

『はゝゝ。そんなことを若いものに聞かせたら、怒りますよ。』

『いや、それは內證さ。いつだつて人間は死ねる。急いで死ぬ必要はない。俺はなるべくゆつくり死ぬつもりだ。』

『御冗談を。』

『君は早く死にたいかね。俺は、皆をじらすだけじらして、それから起ち上つてやるつもりだ。俺が起ち上れば、それ迄だからね、皆、死んでしまはなければならない。だから、皆の熱心がなくならない程度で、延ばせるだけ延ばしてやらうと思つてゐる。あゝ痛い。』

『痛みますか。』

『それは痛むさ、あゝ痛い。涙が出るやうだ。』

『どうも本當とは思へませんね。笑ひながら云つていらつしやいますからね。』

『嘘ぢやない。一つ君に、この痛さを分けてやりたいよ。』
『それには及びません。』
『近所に人はゐないか、見て來てくれ。この頃、よく變な奴が樣子を見に來るのだ。』大石は小聲で云つた。
外を見て來て原は云つた。
『誰もゐないやうです。』
『皆によく云つておいてほしい。一度仕損じたら、もう取りかへしがつかないのだから、大丈夫と云ふ見込がつくまでは決して、早まつてはいけないとね。それから相手を油斷させないで、上杉の處へでも逃げ込まれたら一大事だからね。』
『承知いたしました。』
『この病氣が治るまで萬事、君と吉田に任せるから、いゝやうにやつておいてくれ。』
『承知しました。』
『あゝ痛い。』

今度は本當に痛さうだつた。

三十九　大石の妻子

お陸は夫がそんなに病氣に苦しんでゐるとは知らなかつた。彼女は三人の子の世話に氣を取られてゐた。彼女は初めて兩親に逢つた時、隨分泣いた。

しかし、彼女は兩親に夫の自慢をすることになると、急に元氣になりお饒舌りになつた。城を開け渡した時の夫の態度の立派さ、用意のよさ、注意の行き渡り方が、どんなに使者の人達を感心させたか、また諸士がいかに夫を尊敬し、信賴してゐるか、また大事が起きるに從つて夫の實力が增して來たことなぞ、兩親に自慢しながら話した。

兩親もそれを聞くと、喜ばないわけにはゆかなかつた。

『さう云つては惡いのですけど、殿樣がいらつした時でも、あのくらゐ皆が心を一つにして働くことは出來ないだらうと、皆云つてゐました。御殿樣より、内藏助樣の方が睨みがきくと皆噂してをりました。私も主人にあんな力があるとは思ひませんでした。主人に一言云はれると、私

の性根もしつかりするのです。』
お陸は夫が戀しくなると、夫の自慢、子供の自慢することで自分を慰めた。
兩親も、また始つたと笑ふのだつた。しかし兩親は嬉しかつた。父は城中へ上り、京極侯の藩臣達をつかまへては、大石のことをほめて話すので、皆に陰で笑はれた。
主税は劍術を習ひに毎日かよつてゐた。彼は日ましに大きくなるやうに見えた。成長するさかりで、もう五尺三四寸になつてゐた。一體に身體が大きい方だつたが、筋肉がしまつて來た。太刀先きの鋭さは師を感心させた。他の人と氣合がちがつた。
劍術の師匠は友達に云つた。
『赤穂の人達は復讐する氣でゐる。』
『どうしてわかる。』
『大石殿の御子息の稽古を見ればわかる。他の子供達とは氣合がまるでちがふ。復讐する人の氣合だ。』
『さうかね。』

この噂をお陸が聞いた時、主税に云つた。
『撃劍に眞劍になるのはいゝが、復讐する噂を立てられないやうに、注意するがいゝね。』
『はい。』
主税は赤面した。
母は子供が可愛くつて仕方がなくなつた。
義士達はあつちこつちで復讐のために心をくだいてゐた。一人々々眞劍な氣持でゐた。
吉良の方でもそれを感づいてゐた。
『誰が打たれるものか。』
吉良は事情を許す限り防備に骨を折る。
日は一日々々と經つてゆくのである。

四十　山科閑居

日は一日一日と過ぎてゆく。人々は何事も起らないやうに無事な顔をしてゐる。

山科の往來を歩いてゐるものは、其處に新しく家が建て增されてゐるのを見た。
その家の主人が庭へ細君と出て來た。それは大石夫婦である。大石は今度山科に引越して來て、家を盛んに建て增し、庭にしきりと手入れをやり出し、樂隱居ぶりを見せだした。
大石の素性を知らないものは、金持の武士の樂隱居だと思ひ、羨ましく思つて見た。そして金のかゝつた普請を見て感心してゐた。
しかし素性を知るものは、あまりほめなかつた。赤穗の腰拔け家老が、君の讐も打たず、暢氣に贅澤に暮らしてゐる。あの平氣な面、千枚張りの面の皮の厚さよ、なぞと云つてゐる。しかし大石は何にも知らないやうだつた。
そしてのどかな、のんびりした顏して、大工を指圖してゐる。
『なるたけ丈夫につくつてくれ。』
『畏まりました。』
『こゝの所はかうしてはどうかと思ふが。』
『それも結構かと思ひます。』

『ひまはかゝつてもいゝから、念入りにつくつて貰ひたい。』
『畏まりました。』
大石は妻とまた他を見まはりながら、滿足さうな顏をして、
『なか〳〵よく出來たね。』
『本當に。』
妻はさう云つた。妻は夫の芝居のうまいのに感心したが、時々、夫は芝居してゐるふりして、實は矢張り讐を打つ氣なんか、なくなつたのではないかと思つた。
さう思ふと、夫は世をあざむくと同時に、同志をあざむき、自分をあざむいてゐるのかとも思へた。夫は、この頃讐のかの字も云はなくなつた。同志も殆どこの家には來なかつた。夫は時々出かけた。そして京都のある寺に四五日泊つてくることもあつた。
その時同志に逢つてゐるのだと妻は思つてゐる。しかし、さう思ふ自分が目出たくつて、實は矢張り藝妓に夢中になつてゐるのではないかとも思へた。
さう思ふと、さすがにいゝ氣持はしなかつた。

そして、夫の腹を見ぬかうと思つて夫の顔を見るが、一向それらしい顔も見えず、至つて暢氣さうだつた。永遠に平和なやうな、のどかな顔をしてゐる。

彼女はよく、このまゝずつと暮らせてゆけたらどんなに嬉しいだらうと思つてゐたが、この時は、夫の腰抜けの態度が、へんに不愉快になつて來た。私までだまさうと思つていらつしやる。誰もゐない處では復讐をなさるらしい様子も見えるが、その方が反つて嘘なのではないか。いやそんなはずはない。夫はそんな腰抜けの方ではない。しかしどうも時々疑ひが起るのであつた。あまりに夫は暢氣だつた。

たしかに良雄は暢氣な所があつた。良雄は讐打ちを決して忘れてはゐなかつたが、天氣のいゝ時、秋の一日を氣持よく、何もかも忘れて過すことも珍らしくはなかつた。

その時でも、時々復讐のことは頭に浮んでは來たが、この秋のいゝ氣持を、そんなことを考へるのでつぶすのは惜しいやうに思つて、思つても始まらない時は、暢氣にしてゐた。

しかし彼には、それがまた一つの努力であつた。彼は大工の中にも、また新しく雇つた女中の中にも、間者がゐないとは限らないと思つた。ゐないとも限らないと思つたよりゐてくれると大

いにいゝと思つてゐた。たしかにまた間者の手先をつとめる者はゐると彼は思つてゐた。だから彼は、妻には氣の毒だが、妻もだまして、妻と喧嘩する所を見せるのも、一つの方便だと思つてゐた。

だから妻が夫を疑ふのも、無理はなかつた。

彼はよく五年も六年もさきの計畫をして、まるで自分が死なないものかと思ふやうに振舞つた。それがまた實に自然だつた。だから妻が時々はがゆがるのも、無理ではなかつた。

四十一　同

妻は家の建つのを嬉しさうに見てゐる夫に、そつと云つた。

『この家が出來るのを、あなたは御覧になるおつもり。』

『俺が早く死ぬ方がいゝのか。』

『さうぢやありませんが。』

『讐は打つことは打つさ。』

『それでも皆さんは、しきりと焦つていらつしやいます。へんな陰口をきくものもあるさうでございます。』
『云ひたい奴には云はしておくさ。』
『吉良は齢よりだから、いつ死ぬかわからないとおつしやつてゐる方があります。』
『そんなに早く死ぬものなら、生かしておいてやつてもいゝ。』
『それがあなたの本音なのですか。』
『本音だよ。』
大石はまだ、骨組みの出來た上で働いてゐる大工を、面白さうに見てゐる。
『それではあなたは、讐は打たないおつもりなの。』
『打つよ。』
『いつ。』
『死にたくなつたら。』
『まあ。』

『お前は俺をそんなに早く死なしたいのか。俺だつて少しは生きてゐたいからな。』
『そんなことをおつしやつて濟むと思つていらつしやるの。』
『濟むも濟まないもない。こんないゝ天氣に、死ぬことなんか考へたくないよ。』
『あなたがそんなに臆病な方とは思ひませんでしたわ。』
『俺はまたお前がそんなに薄情な女だとは思はなかつたよ。』
妻はすつかり腹が立つて來た。妻は妊娠してゐた。もう五月になつてゐた。だからいつもより、いくらか神經質になつてゐた。
『口惜しい。』さう云ひたかつたのを、彼女はそれを耐へたが、身ぶるひがして來た。
『身體にさはるといけない。家に入つてゐろ。俺のことは安心するがいゝ。俺だつて男だから、いざと云ふ時、腰なんか拔かしはしない。まだいざと云ふ時が來ないだけなのだ。』
良雄のその聲を聞くと、妻はいくらか安心出來た。そして自分の室に歸つた。
『夫は何か云ふと、私が夫を早く死なしたいやうに云ふ。誰が死なしたいものですか。ですが武士には武士の名譽と云ふものがあります。世間に顏向けも出來ないやうでは、生きてゐるのが恥

です』彼女はさう思ふと同時に、矢張り自分が夫の死を、自分の名譽のために望んでゐることがはつきりわかつて來る。しかしさう思ふのはいやで、其處でごまかして、夫の死ぬのが、どんなに自分には辛いことかを考へる。

實際、夫や主税を失つて、どうして自分が喜んでゐられよう。だがしかし、世間に顔向けが出來ないのも、隨分苦しいことには違ひなかつた。

人間にとつて、愛するものを失ふことはどんなに辛いものか、お陸は知らされてゐる。だが社會はまた、名譽心と恥辱心とのつかひわけで、實は強く人々の心を支配してゐる。

名譽心のなくなつたもの、恥を知らないものはいゝ。それを知つてゐるものは、最愛のものを失つても、社會の命令に從はなければならない。夢中で從へるものは仕合せでもある。大石良雄は、生命慾と名譽心と、どつちが大事なものかと云ふ問題に、時々ぶつからなければならなかつた。

彼は最後に自分が、吉良をやつつけることは疑はなかつた。だがそれと同時に、靜かに生きてゐたい氣もなか〳〵強かつた。そして、それを恥かしいことと許りは思へないことが、彼にはは

がゆかつた。

若い者達には、吉良を殺すことは實に勇ましい痛快なことに思へた。そしてそれはまた正義でもあり、忠義でもあり、名譽でもあつた。しかし大石には時々、それが小さい事、馬鹿氣たことに見えるのだつた。

しかも彼は、復讐しないではやまない力に、自分が引きずり廻されてゐることを感じてゐた。

四十二　大石なぐられる

大石はまだ家を見てゐた。其處に一人の武士が、づか〳〵と、入つて來た。

『大石殿は御在宅ですか。』

と大石をつかまへて訊いた。

『私が大石です。』

『あなたが、ですか。御高名は常に承つてをりました。お目にかゝれて嬉しく思ひます。』

『さうおつしやられると恐縮です。』

『隨分立派な家が出來ますな。』
『あまり立派でもありませんが、貧乏浪人ですから、このくらゐな家きりつくれません。』
『いつこの家は出來るのですか。』
『來年までかゝると思ひます。どうせ閑人ですから、いくら遲れてもいゝので、なるべく金のかからないやうにつくつてくれと云つてゐるのです。あはゝゝゝ。』
『お樂しみですね。』
『まあ、他に樂しみもありませんから、何しろ暇で困つてゐます。』
『お羨ましいお身分で、御主取りをなさるお氣はないのですか。』
『金に困らない間は、主取りは御免かうむるつもりです。』
『武士は二君に仕へずですか。』
『それは昔の話でせう。』
『あなたは本氣にさう思つてゐるのですか。』
『私はこの頃になつて、いろ／＼のことがわかりました。』

『どんなことがわかつたのです。』

『人間は生きてゐればいゝと云ふことが、その他は馬鹿氣てゐると云ふことが。』

『それならあなたは復讐なんかしないつもりですか。』

『勿論です。復讐して何になります。死んだ人を、それで喜ばすことが出來ますか。』

『あなたは生命が惜しいのですか。』

『私はこの頃になつて、生きてゐることは、實にいゝことだと云ふことがわかりました。』

『馬鹿！』その武士は、いきなり大石をなぐつた。大石は、なぐられて怒つて、

『なぜあなたは私をぶつのです。』

と云つたが、相手が本當に怒つてゐるのを見ると、こそ〳〵と逃げていつた。

武士はそれを見送つてゐたが、その兩眼から涙が流れ出て來た。

『武士道も、もう終りか。』さうその武士は歎息をついた。

大工達もそれを見て、大石の態度をあさましく思つた。

四十三　大石の道樂

それから四五日たつて、大石がぐでんぐでんに醉つぱらつて、役者の瀨川竹之丞と云ふ有名なかげまをつれ、その他藝妓や舞妓や幇間を大勢つれて京の町を歩いてゐるのを、人々は見た。

大石を知らぬものさへ、その有樣を見て顏を反けた。大石を知つてゐるものは、なほあさましく思つた。大石は如何にも愉快さうに、竹之丞や、藝妓とふざけてゐた。

京の惡童達は、それを見ると、聞えよがしに唄つた。

『あかほでわるうてあはう浪人、大石かるくて張拔石。』

大石は、そんなことには少しも氣がつかないやうに、醜態を演じてゐた。

四十四　母と子大石の歸るのを待つ

『お父さんは昨晚もお歸りにならなかつたの。』

主稅はさう云つた。

『あゝ、お歸りがなかつたよ。』
もう人目につくやうなお腹をしてゐるお陸は何氣なくさう云つた。
『お父さん、何處にいらつしやるのでせうね。今日で四晩もお歸りにならない。』
『御用がおありになるのだから、いつお歸りになれるか、わからないのだよ。』
『それでも、僕はへんな噂を聞いたのですよ。』
『誰がどんなことを云はうと、お父さんは立派な方だから、お考へがあつてなさることで、世間の人の知る所ではないのだよ。』
『それでも、世間ではあんまりひどいことを云ふので、僕は腹が立つのですよ。僕のことを、やあすこに張拔石の息子がゐらあ、なんて。』
『何とでも云はしておおき、今に皆、お父さんが本當に偉い方だつたと云ふことを知るやうになるからね。恥を忍ぶことが出來ないやうな人には、大きな事は出來ないものだよ。』
『お父さん、今でも復讐は本當になさるおつもりなの。』
『そんなことを聞くものではありませんよ。壁に耳ありと云ふことがありますからね。』

『こなひだ、原さんが來てね、お父さんは本當に復讐なさるおつもりなのかと、僕にこつそり訊くので、僕はびつくりしたのよ。』

『あら、原さんまで。』

『えゝ』

『それでお前は何と云つた。』

『それは復讐なさるつもりでせう、僕にはよくわからないが、と云ひました。』

『そしたら。』

『注意して見てゐてください。そして、もし復讐する氣がおなくなりになつたやうでしたら、そつと知らせてくださいと云つてゐました。』

『さうかね、敵をだますためには、先づ味方をだまさなければね。この頃は間者が何處にも入りこんでゐるのだからね。』

お陸は口ではさう云つたが、自分も原と同じくらゐにきり、夫を信じられなくなつてゐるので、ぞつとした。しかし、そのことは誰にも知らすまいと思つた。

『お前はどうだ。』
『僕は勿論、復讐しますよ。お父さんのお伴をしてね。僕はこの頃になつてもよく想ひ出すのです。殿様が、僕が生れて間もなく僕の守刀として太刀をくださつたことを。あの太刀を見る度に僕は、あの太刀を持つて復讐することを殿様に誓ふのです。』
『それでこそ、私の子だよ。お父さんがもしものことがあつても、お前だけでも。』
『もしものことつて。』
『人間はいつ死ぬものか、わからないからね。』
其處へ、弟の吉千代が入つて來て、
『お兄さん、撃劍、教へてくれない。』
『教へてもいゝ。』
二人は出ていつた。
お陸は一人になると、何と云ふこともなしに涙が出て來た。

四十五　大石の歸宅

良雄はそれから二日程たつて、一人で歸るのが氣まりが惡いか、小野寺をつれて歸つて來た。

お陸は機嫌よく二人を迎へた。

良雄はお陸を見るとすぐ、

『身體の工合はどうだ。』

『順調でございます。』

『それは結構だ。それでは小野寺、また明後日お伺ひする。』

『はい、それでは私はこゝで失禮します。』

『そんなことをおつしやらないで、まあお茶でも上つてお歸りになつてはどうですか。』

『それなら少しくらゐ上つて歸つたらいゝだらう。山の神の御機嫌も惡くはないやうだからな。』

『それでは一寸お邪魔をさせて戴きます。』

『どうぞ。』

良雄は自慢して、小野寺に建ちかけてゐる家を見せながら、『どうだ。この家も惡くはあるまい。京都もいゝが、こゝも惡くあるまい。』

『結構な御普請です。』

『こゝで一生を送るのも惡くはないだらう。』

『惡くはありませんね。』

『そして時々京都に飲みにゆくのもね。』

『時々ですか。』

『あはゝゝ、時々歸るのも惡くはないと云ふのが本當らしいな。』

それから二人は庭から室に入つた。

二人は何か話してゐるらしかつたが、そのうちにいびきが聞え出した。小野寺は室から出て來て、

『おやすみになりましたから、失禮します。』

と云つた。

『さうですか。』お陸は驚いて急いで室に來て見ると、夫は大の字に、ぐつすり寐こんでゐた。風邪をひくといけないと思つて、蒲團をきせた。そして、歸りかけてゐる小野寺に云つた。

『小野寺さん、一寸お話したいことがあるのです。』

『なんですか。』

『あのことは、きまりましたか。』

『まだはつきりはきまりません。』

『いろ〳〵ぬけた方や、主人を誤解してゐる方もあるさうですね。』

『ぬけても惜しくない人はぬけたやうです。』

『誤解してゐる人はないのですか。』

『それはありません。大石殿には皆感服してをります。』

『本當ですか。この頃夫は、隨分出たらめで、評判がよくないさうですが。』

『お心のわからないものは、何とか云ひますが、私なぞは一日々々、大石殿を尊敬し、信頼いたします。』

『同じ穴のむじなではないのですか。』
『大丈夫です。』小野寺は笑つた。そしてつけ加へた。
『あなたは御主人を信用しきつていらつしやいまし、まちがひのない方ですから。』
『どうですかね。』
お陸は笑はうとして笑へなかつた。
『間者は何處にゐるかわかりませんから、御用心なさいまし。そしてあなたは、御主人が、もう復讐する氣がなくなつたと思つて、怒つていらつしやるくらゐで丁度いゝのです。』
『少しもよくはありませんわ。ですが、お話のやうに出來るだけ骨折つて見ます。』
『ことは段々よく運んでゐるのです。』
『さうですか。』
『すべての人は御主人に注意を集めてゐる中に、こつそり働くものは働いてゐるのです。これは内證ですが、あなたにだけ申します。御主人は出來るだけ馬鹿な眞似して、注意を御自分だけに集めていらつしやるのです。』

『私もそれは存じてをりました。』
さうは云つたが、お陸は氣が輕くなつた。
小野寺は歸つていつた。
夫の室に行つて見ると、夫は死んだやうに寐てゐた。
外から歸つて來た子供達は云つた。
『お父さん歸つていらつした？』
『しつ、靜かに、よく寐ていらつしやるから。』
さう云つた。夫の見ともない寐姿を子供には見せたくないと思つた。

四十六　大石の心のなか

大石の道樂は、最も近い同志達をも、心配させだした。彼は酒をがぶ飲みし、女にかけてもなか〳〵の曲者であり、その上竹之丞を可愛がることは人目にあまつた。
小野寺だけが、最後までの同情者であつたが、それでさへ、酒をあまり無茶飲みするのを見て

は、默つてはゐられなかつた。
『そんなにお飲みになつては、お身體にさはります。』
『さはつたつていゝよ。このまゝ死ねば本望だ。』
『そんなことを云ふので、皆が心配するのです。』
『心配するものには心配さしておけ。俺のことは俺が知つてゐる。小野寺、貴様はもう六十になるが、俺はまだ四十二だ。だから少しは飲んだつていゝだらう。俺は酒飲んでゐる間だけ、生きてゐるのが嬉しいのだ。さあ、小野寺引こめ。そして竹之丞、もつとこつちに來い。爺の顔なんか見たつて面白くない。竹之丞、さあ酒をもつと飲め。』
そして大石は醉ひすぎると、へんに淋しくなるらしく、よく泣き出した。
『殿樣がいらつしたならな、この上、殿樣がいらつしたならな。』
しかしそれは、腹心の者許りがゐる時だけに限つた。彼は醉つた翌日は、切腹してもいゝやうな氣になるのだつた。

四十七　時機が近づく

江戸の連中からは矢の催促が來る。大石もやつと時機が近づいてくるのを知つた。しかしそのことが、大石には、嬉しいと許りは云へなかつた。彼はへんに生に執着が感じられて來た。しかし生に執着が強くなるに從つて、彼はます〳〵復讐しなければならない氣になる。これ以上生に執着しては困ると思ふのだつた。

或夜彼があそんでゐる最中に、小野寺が來た。

『お留守に赤ちやんがお生れになりました。男のお子さんで、お二方とも御無事でした。』

『さうか。それは目出たい。すぐ歸るとしよう。』

大石は立ち上つたが、足がふら〳〵した。彼は何となく妻に濟まない氣がした。

彼は醉もさめて、輿をいそがして歸つた。

明け方、彼は家についた。

彼は生れた男の子を見ると、『これが俺の身がはりだな。』と思つた。二人死んで、二人のこ

る。彼はそんなことを考へた。
『それでいゝのだ。』理窟なしにそんなことを考へた。
その晩珍らしく彼は家にゐて、生れた子の名を考へた。彼は三番目に生れた子で、自分の身代りになる男なので、代三郎とつけようかとも思つたが、代は露骨なので、大石の大をとつて大三郎と名づけることにきめた。
彼は吾が子の無事に育つことを、何かに祈りたい氣になつた。

四十八　若い連中

或日、江戸からのたよりで、吉良上野介はもしかすると、自分の子供を養子にやつた、上杉侯の本國米澤にうつるかも知れないと云ふ噂があるので、早くことを擧げた方がいゝと云つて來た。
若い連中達は、すぐそれに贊成した。彼等は內々大石の態度を苦々しく思つてゐた。だからその反動的にも、早く實行したかつた。
だが大石は、まだ早いと云ふ考へをなくすわけにはゆかなかつた。それにはまた理由はあつた。

淺野家の再興に對して、彼はまだ絶望してゐなかつた。内々彼は運動してゐた。そして、その運動が功を奏しなかつたら、何をするかわからないと云ふ、奧の手を取つておきたかつた。

しかし月日がたつに從つて、同志の中にも旗色のはつきりしない連中が出て來、同時に、大石がぐづ〳〵してゐれば自分達だけで決行する、何も大石のやうな腰ぬけをたよりにする必要はない、と云ふ連中も出來て來た。

大石も、今のまゝでほつたらかしてはおけないことを感じた。

彼は生命が惜しくなくはなかつたが、しかし腰ぬけ武士にはなりたくなかつた。彼はまた、やらうと思ふことは必ずやると云ふ根性も、實に強く持つてゐる男だつた。

吉良上野介をやつつけてしまふ、それは彼にとつては、一種の動物的本能のやうなものにさへなつてゐた。時代がそれを彼に強ひてもゐたし、許してもゐた。彼はその本能では、若い連中には負けてゐないのだつた。たゞ彼には、もつと他のものがあつた。

生きてゐる中に手おちのないだけのことはやつておきたい。そして出來たら、快樂の味も、生きてゐる間に味へるだけ味つて見たいと云ふ本能も、彼にはないとは云へなかつた。

彼は一本調子の男ではなく、一擧兩得、三得をしようと云ふ男だつた。道樂は道樂のため許りではなかつた。また敵をあざむくため許りでもなかつた。生きてゐる淋しさをごまかすため許りではなかつた。それ等が一つになつて、彼を勇敢な道樂ものにした。そして人々に惡口云はれゝば云はれる程、今に見ろと云ふ氣はあつた。

彼は實にいろ〱のことを同時に考へ、また實行してゐた。自分は酒を飲み、女やかげまにふざけてはゐたが、彼はその間にも、なすべきことは忘れてはゐなかつた。

四十九　山科の集合

或日彼は不意に、小野寺や、吉田に使を出して、皆に山科に集るやうに云つた。

皆、集つて來た。若い連中は少し怒つてゐるやうな顏をした。何となく殺氣立つてゐた。

大石はまちがひなく集つて來た人々の顏を見ると、へんに皆が可愛く、可憐に見えた。生命を先君のために投げ出したがつてゐる人々、その動機はどうあらうと、一緒に近い將來に死ぬ人々だ。彼は愛しないわけにはゆかなかつた。

彼は皆の席がきまると云つた。
『皆さんに一人の新しい同志を御紹介します。もつと早く御紹介したかつたのですが、若すぎたので、遠慮さしておきました。』
人々は誰かと思つた。大石が世話して働いてゐる瀨尾に合圖をすると、間もなく其處にあらはれた少年があつた。彼は靜かに襖を開けて入つて來た。皆は一せいにその方を見た。
それは主稅だつた。彼は襖を坐つて閉めると同時に、丁寧にお辭儀した。皆の眼には思はず淚が浮んだ。

五十　同

山科の大石の家では廣間に十何人の人が集つて何か相談してゐる。
外部からは何事かわからない。新築の祝ひのやうでもある。料理が運ばれ、銚子が代へられ、泉水には明るい二階の障子が華かに映つてゐ、人々は愉快さうに談笑してゐる。
祕密の話をしてゐるにしては、少し陽氣すぎる。女中達は着かざつて陽氣にしてゐ、少しは酒

を飲んだらしい、赤い顔してゐる者もある。
子供達も今日はまだ寐ずに、何かさわいでゐるやうだ。時候はまだ寒いので障子はしめられてゐるが、祕密の話ではないやうに見える。だがそれは表だけであつた。
お陸は今日は肩がこると云つて、さつきから一人の女中にあんまさして、暢氣な、田舍の話をしてゐる。この女中は少しこの役目を喜んではゐないやうたが、お陸はその女中を自分の側にひきつけて放さない。
その時大石は醉つて二階の廣間から降りて來た。御機嫌が大へんいゝ。
『肩はどうだ。』
『大へんよくなりました。』
『それはいゝ。』
さう云つて、大石は憚りに行つて、また二階へ上つて行つた。

五十一　同

お陸の肩をもんでゐた女中は、それから間もなく二階へそつとのぼつて、聞き耳をたてたが、人々は藝妓の話に夢中になつてゐた。殊に良雄は、陽氣に、馬鹿な話をして、皆を喜ばしてゐた。
主税はもう自分の室に入つて、寐られぬ身體を、無理に寢床に入れてゐた。
人々は、この上なく陽氣で愉快さうであつた。
女中は『なんだ』と思つて降りて行つた。

五十二　同

會は夜ふけて終つて、人々は三々五々に歸つて行つた。
『お父さん。』
小野寺の養子幸右衛門は云つた。
『なんだ。』
十内は靜かに返事した。
『矢張りお父さんのおつしやる通り、大石様は偉い方ですね。』

『さうだらう。あの人は私達の考へ及ばないことを考へてゐられる。だから私達は安心して大石殿の御考へ通りを實行すればいゝのだ。』

『私も今日初めてそれに氣がつきました。他の性急連中も、今日は安心したらうと思ひます。主税樣も、隨分御立派な方ですね。』

『あの父にして、あの子ありだ。』

『本當でございます。私は主税樣が、我々の仲間に加入なされた時、涙が出て來て困りました。それと同時に、死んでもいゝと思ひました。』

『私もだ。あんなにお若くつて。』

『お母さんのお身になつたら隨分おつらい事でございませう。』

『本當にしつかりした方だから、涙一つお見せにならずに、主税殿の御加盟を御贊成になつたにちがひない。』

『今日の會は本當にいゝ會でございました。皆の決心も今日で、一段と强まつたことと思ひます。』

『これからます／＼敵方を油斷させなければならない。そして世間の人にます／＼大石殿を腰ぬけ武士と思はさなければならない。』

『もう世間では、大がいさう思つてをります。』

『ます／＼さう思はせるがいゝ。同時に我々も大石殿を見ならつて馬鹿にならないといけない。それさへうまくやれば、大石殿も云はれたやうに、吉良は好きな江戸をすてゝ田舍に引こむやうなことはしないに違ひない。吉良に安心させることが、これからの私達の第一の仕事だ。』

『本當にさうでございます。私達は、今後客氣にはやるやうなことは、決していたしません。』

『それを聞いて、私も安心した。』

五十三　大石達の墮落

實際それから、世間には、赤穗の武士は、あはうの武士だ。復讐するよりは、酒を飲んだり、女を買つたりする方がすきなのだと云ふ噂が益ゝ廣まり出した。そして皆、大石達を憎み出した。だが大石達はます／＼墮落して行くばかりに見えた。そして今まで固いやうに思はれた若い義士

達も、いつのまにか大石にかぶれて、いゝ氣になつて、くるわ街を醉つぱらつて歩いて、恥かしいとは思はぬやうになつた。
厄介な奴達だと皆思つた。
さう思はれて喜んだのは、大石良雄等であつた。
そんな氣がしたが、しかし大石は、珍らしく他人の思はくが氣にならない質だつた。
『今に見ろ。』
彼は自分のいゝと思ふことを、どし〳〵行ふ力を持つてゐた。
彼は內心、皆の非難も滿更中つてゐないとも思はなかつた。彼は實際時々、へんに死ぬのが怖くなるのだつた。
だが彼は、復讐する用意はやめなかつた。
江戶の連中からは、頻と早く復讐したがつて來た。もう一周忌も間もなくやつて來る。
世間では赤穗の義士達が、吉良をやつつけることを樂みにしてゐる。今か、今かと待つてゐる。
若い人々が、早く吉良の首をちよん切りたいのも無理はなかつた。

『一周忌が來た。』

吉良家では、寐ずの番をしてゐた。吉良も寐たふりはしたが、一寸の音にもびく〳〵してゐた。そして早く朝が來るのを待つてゐたが、なか〳〵朝は來なかつた。

だが、とう〳〵朝は來た。吉良は、急に自分が強くなつたやうな氣がした。

彼はこんなに、朝が來たことを嬉しく思つたことはなかつた。

彼は氣前よく、皆に酒を飲まし、自分も腰元相手に酒を飲んだ。いつもより露骨に元氣だつた。

五十四　一周忌

義士達は悲しみを新にした。

江戸にゐる人々は泉岳寺へ出かけ、赤穗にゐるものは華岳寺にお詣りをした。華岳寺には赤穗の市民達も大勢お詣りをした。涙を流すものも少くなかつた。

大石良雄の姿も華岳寺にあらはれた。彼は御位牌の前に平伏して、なか〳〵顏を上げなかつた。

寺僧達はその姿を見て、涙ぐんだ。

大石はをがんでゐる時、先君の御姿がはつきり目に浮んで來、切腹された有樣が、はつきり見えるやうに思つた。彼は内匠頭の最期が、お痛はしくつて、しかたがなかつた。自分なんか死んでもいゝと、その時はつきり思つた。

そして『復讐をしてやる！』と云ふ決心を強くするのだつた。

殊に片岡や原やは、その日先君のことを想ひ出さないではゐられなかつた。片岡は自分一人が、最後の瞬間にお目にかゝれたことを想ひ出すと、なほたまらなかつた。

若い過激な連中は、悲しみよりも、腹立たしさの方が、強く彼等を苦しめた。

『吉良の奴、喜んでゐるだらう。』

さう思ふだけでも、不愉快でならなかつた。そして大石達のゆつくりかまへてゐるのが、今更に腹が立つて來た。

五十五　同志等又大石を疑ひ出す

だが大石は相變らず暢氣にしてゐた。彼はもう滅多に家には歸らなかつた。彼の姿は家よりも

島原、祇園や、伏見の里の撞木町なぞでよく見られた。いつも豪遊して、酒びたりになり、女や、い、、かげまと戯れてゐた。

初めは冗談だと思つたものも、大石のはまり込み方がひどすぎるのにおどろいた。

仲間のものは一時大石を信用したが、またいろ〳〵疑ひ出して來た。

一體どつちが本當なのか。

『世間をだましてゐるのか、我等をだましてゐるのか。我等が會ふと如何にも讐をうちさうな風を見せるが、存外、その方が、嘘かも知れない。』

小野寺幸右衛門まで、又そろ〳〵疑ひ出した。

大石はそんな噂を聞いても、一向平氣な顔をして、大きな聲出して笑ふだけで、別に辯解しようとはしなかつた。

五十六　大石と竹之丞

彼は或る日、瀬川竹之丞と二人で、雨に降りこめられながら話してゐた。

『うきさま。』
『なんだ。』
『私、いつまでもうきさまのお傍にゐたいと思ひます。』
『誰かに入れ智慧でもされたのか。』
『また、そんなことを云つて、ごまかしてもだめです。私はちやんと知つてゐますから。』
『何を、知つてゐるのだ。』
『あなたが讐をおうちになることを。』
『それは誰だつて知つてゐる。』
『處が、どなたも御存知ないのです。私によくおきゝになります。』
『馬鹿な奴だよ。』
『處が、利口な方がおきゝになります。』
『それでお前は何と返事をするのだ。』
『私にはわかりません、あの方のお氣持ちだけは、とさう申してをります。』

『お前にしては大出來だ。そしてお前は自分一人だけが俺が讐をうつことを知つてゐる氣でゐるのだらう。實はこの俺だつて知らないのだからね。』

『私にまで、おかくしになるのですか。』

『お前は信用してゐるよ。正直に云つて、俺の心を、何もかも吐き出すことのできるのは、お前ばかりなのだ。』

『なか〳〵お口が、お上手ですね。』

『遠慮はしないがいゝぞ。』

『私もそれは存じてをりました。うきさまは、どなたにも本音を見せない方だと云ふことを。』

『つぶしの利かない奴に本音は見せられない。またつぶしの利きすぎる奴に本音は見せられない。俺の正直な姿を見せても、おどろかないのはお前ばかりだ。お前の心は俺よりもキタナイからな。』

『あんなことを。』

『だが、お前は誰よりも俺を信用してゐてくれるから。』

『愛してをります。』
『あてにはならないね。』
『遠慮していらつしやるのですね。』
『お前に愛されてゐるものは他にゐることを知つてゐるぞ。』
『私だつて半分は男ですが、だが私の半分は、あなたを本當に愛してゐるのです。』
『それは知つてゐるよ。だから安心して、何んでも云ひ、何んでもするのさ。』
『私はまだ、あなたのやうに慾のない方を知りません。心の中の中まで見とほしても、あなた程すきとほつた心をお持ちの方を、見たことはありません。あなたは不思議な方です。』
『つまり俺は馬鹿なのさ。』
『賢すぎるのです。』
『おだてるな。』
『今日は私は、二人きりですから、何もかも云つてしまひます。さう永くは、お逢ひできないのですから。』

『何處かへ行くのか。』
『私は何處へも行きませんが。』
『俺だつて何處へも行かないよ。』
『それは嘘です。』
『嘘としておくさ。』
『あなたが、いつまでも生きていらつしやりたいのはわかつてをりますが、生きてゐられないこともわかつてをります。もう死神があなたにとつついて、離れないのです。』
『さうかも知れない。』
『私は、いつまでもあなたに生きてゐていたゞきたいのです。』
『不義者にしたいのか。』
『忠義者と、云はれたいにしては、あなたは娑婆氣がなさすぎます。』
『處が俺は、いくぢなしなのだ。』
『いくぢなしなら、死にはしないのですが。』

『生きるにしては勇氣がありすぎ、死なないにしては勇氣がなさすぎる。そんな處かも知れない。』

『何處かであなたは、生きようと思つていらつしやる。』

『何處かでまた、死なうと思つてゐる。お前はどうだ。』

『私は臆病ものです。くさつても自分では死ねません。』

『可愛がつてくれるものが多いからな。お前は仕合せものだ。』

『私には何んにもわからないのです。』

『どうかね。わかりすぎてゐるのだらう。』

『私はゼロのやうな人間です。あなたのお傍にゐると、あなたの望む通りになる。その時、私は、今迄經驗したことのない、しんみりした氣持になるのです。そして時々、死神の姿が、目の前にちらつくのです。さうすると、ます〳〵あなたが、私にとつて大事な大事な方になるのです。』

『可哀さうな男だ、お前は。』

『可哀さうな方です、あなたは。』

『俺は、可哀さうな人間ではないぞ。俺は、死ぬことなんか恐れてはゐない。』
『本當ですか。』
『本當だよ。』
『今はでしよ。だが時々怖い時もあるのでしよ。』
『時々はお前だつて、生きてゐるのが、いやになるだらう。』
『でも、私は死にたくはありません。』
『まだ若いからさ。人間は四十を越すと、死ぬことは、さういやぢやなくなる。』
『本當でせうか。』
『少くも俺はね。處が先君は四十にならずに切腹なさつたのだ。』
『先君は、あなたを愛していらつしやらなかつたと云ふ話を聞きましたよ。少くもあなたを馬鹿にしていらつしたと云ふことを。』
『俺は自分だつて、自分を馬鹿だと思つてゐるよ。』
『本當ですか。』

『世間の奴は皆俺より馬鹿に見えるがね。』
『だけども、うきさまは先君を愛していらつしやるのですね。』
『仕方がないさ。』
『私にも、その御氣持はわかります。』
『お前にわかつてたまるかい。』
『そんなに馬鹿になさらないでも。』
『俺は世間の奴には面と向つて馬鹿とは云へない。それでお前が好きなのだよ。お前なら馬鹿と云つたつて、怒らないからな。』
『私は利口すぎますからね。』
『さうだ、お前はなか〳〵利口だよ。』
二人は、酒をちよびり〳〵飲みながら、雨の中を、のどかに話してゐる。
このまゝ、日が來、日が過ぎて行つたら、どんなにのどかだらう。大石は、ふとさう思つた。

五十七　死を前に見るもの

死を前に見るものの生活は、普通の人の生活とは、違はないわけには行かない。

義士達は加速度に、死神にひつぱられて行く。彼等は死が怖くないのではないが、復讐しなければならないと云ふ觀念は、なほ強く彼等を支配する。

しかし不義士達には、義士達が、金づかひがあらく、道樂仕放題の有様を見ると、何んとなく腹が立つて來るのだつた。

俺達をうまく逐ひ出しておいて、そして自分達は腹を肥せるだけ肥して、讐をうつやうなふりして、世間をだまして勝手なことをしてゐる。それだつたら、俺達も彼等の仲間に入つてゐればよかつた。

世間も段々、赤穗事件を忘れて來た。復讐することなんか考へなくなつた。たまに想ひ出す人があつても、復讐はしないことにきまつたのだと思つて、別にそれを不思議にも思はなくなつた。

大石にとつては、それはあつらへ向きだつた。萬事が、自分の思ふ通りに行くのを知つて、彼

は嬉しくもあつたが、同時に淋しくもあつた。彼は復讐したあとの空虚さが、時々はつきりすぎる程見えるのだつた。

だが彼は、復讐をやめる氣にはならなかつた。時は、だん〳〵近づいて來る。

彼の亂行はます〳〵大げさに世間に噂され出した。噂を大きくさせる一人は、彼自身でもあつた。

彼は或る日、醉つて家に歸つた。

久しぶりに歸つたので、妻子は喜んで彼の傍に集つて來た。彼は、

『うるさい、うるさい。』

と、それ等を追ひのけた。そして自分の室に大の字になつて寐入つてしまつた。

妻はそつと蒲團をかけに來て、變つた夫の姿を見て、思はず涙を流した。

この時、大石はふと目をあいた。そして妻を見ると、

『水、水を持つて來い。』

と云つた。その言葉の調子も、なんだかいつもの良雄とは、まるで違つてゐた。

お陸は、いそいで水をもつて來た。
良雄は、その水を一寸飲みかけて、
『こんななまぬるい水が飲めるか。』
さう云つて、床の間に、その水をぶちまけた。
お陸は、びつくりして夫の顔を見た。
『お前の顔を見ると胸がわるくなる。』
良雄は、さう憎らしく云つた。
『どうせ、お氣には入りますまい。』
お陸も、かつとして、ついいつもにない口答へをした。
『氣に入らないことがわかつてゐるのか。』
良雄はさう云ふと、お陸の反對に向いて、ごろつとまた、寐てしまつた。
お陸は堪へられずに、わつと泣き出してしまつた。
だが良雄は默つて、怒つたやうに寐たふりしてゐた。

良雄も、心ではお陸を氣の毒には思つてゐたが、彼はお陸を離縁しようと思つてゐた。そしてお陸が、彼を憎んでくれることを、望んでゐた。

實際また、彼は家へ歸つて、お陸の顔を見るのが、つらくもあつた。彼は今の場合、お陸に實家に歸つてもらふ方が、氣がらくでもあつた。

翌日彼は、あらたまつて、お陸をよび、離縁することを、云ひわたした。

お陸は反對しなかつた。涙さへ見せなかつた。

『私もきつとさうだらうと思つてをりました。』

『さうだらう。俺にもお前の心はわかつてゐる。』

『子供のことは、どういたします。』

『主税は大石家のあととりだからおいて行つてもらはう。あとは氣の毒だが伴れて行つてくれ。』

それを聞いた時、お陸は初めてわつと泣いた。

彼女は夫の心に觸れたのだ。夫は腹の底までは腐つてはゐないことを知つた。

すると、また未練が出るのだつた。

『泣いてはいけない。お前もお前のお父さんの子ぢやないか。そして俺の子の母ぢやないか。しつかりしなければいけない。』
『はい。』
『人が聞いたら、正直に、俺に女が出來て、逐ひ出されたのだとさう云へ。あの人には、あいそがつきたとね。』
『はい。』
『わかればいゝ。離縁狀は書いておいた。身體を大事にしろ。子供のことは賴んだぞ。』
『はい。』
大石はまた、ぶらりと家を出た。
お陸は、夫の惡口を聞えよがしに、女中にこぼし、そして子供を伴れて、泣く／＼、實家に歸ることにした。
そして主稅をよんで云つた。
『お前は何もかもわかつてゐるだらうが、お父さんのこと、よろしくたのんだよ。そして、お前

は立派にお父さんと力をあはせて、御主君の讐をうつておくれ。』
『はい。』
『だが敵方には何處までも油斷をさせなければならないから、そのつもりでおいで。そしてお前も知つてゐるだらうが、家の中にも、敵のまはしものがゐるのだからね。』
『はい、よく存じてゐます。』
『これで、もうお前には、逢へないかも知れない。』
『そんなこと。』
『氣をしつかり持たなくつてはいけない。私は安心してゐるが、大石の名を汚さないでおくれ。』
『はい、お母さん、御安心ください。』
二人は、忍び泣きした。
いつまでさうしてゐても限りがなかつた。
『お母さん、用意が出來てよ。』
『さうか。それでは出かけませう。』

二人は襖をあけると、其處に、もう支度が出來て、主税の弟と妹がゐた。
弟や妹は愉快さうにしてゐた。
『お兄さん、それでは行つて來ます。』
『お兄さんも、あとからいらつしやい。』
主税は元氣さうに、
『あゝ、あとから行くよ。』さう云つて、母の方を見て、にこつと笑つた。
母は、赤坊を抱いて輿に乘つた。
主税は母や弟達の輿をいつまでも見送つてゐた。だが女中や下男の手前、泣き顔は見せなかつた。あわてゝ自分の室に入つた。
その晩、主税はどうしても眠れないので、一人で淋しくつて忍び泣きしてゐると、襖のあく音がした。おどろいてきつとふり向くと、其處には思ひがけぬ父が立つてゐた。
『お父さん。』
主税はびつくりして、かじりつくやうに云つた。

『しつ。』父は口をとめた。

『皆、眠つてゐる。俺の歸つたのを知つてゐるのは瀨尾一人だ。皆、無事に立つたな。』

『はい。』

『それを聞いて安心した。』

『お父さん、いつですか。』

『今年の十二月にやることにきめた。』

『お父さん、お願ひがございます。』

『なんだ。』

『僕を江戸に行かしてください。』

『いゝ機會を見て。』

『こゝにゐると、へんに淋しいのです。』

『それはわかつてゐる。だが敵は何處にでもゐる。』

『それは知つてゐます。』

『それならなるべく早く行けるやうにしてやらう。』
『お願ひします。』
『それでは俺はまた出かけるよ。』
『どうぞ、御用心なすつてください。』
『安心しろ、皆、そとに待たしてある。』
父は襖をしめて消えて行つた。

× × × ×

それから間もなく、田舎道を五六人の人が、ぶらり〳〵と歩いてゐた。
その中の一人が、大石良雄であることだけはたしかだ。
あとは、それをとりまいてゐる人々だつた。
『どうでした。』
『主税だけ、家にゐた。淋しがつてゐた。』
『それはお淋しいでせうね。』

『だが、あいつは俺よりは強い男だ。一人で平氣で死を恐れずにゐる。あいつの顏を見ると、俺なんか、穢れすぎた人間のやうだ。あいつを生かしておきたいと俺は思ふのだが、こればかりは思ふやうには行かないらしい。』しかし良雄には、それが自慢でもあつた。

『あなただつてお若い時がおありだつたのでせう。』

『今だつてまだ若いつもりだよ。だが俺だつて主税くらゐの時はあつた。あの時分の俺だつたら、矢張り主税と同じやうに、死にたがるだらう。』

『それで、あなたは今、死にたくないのですか。』

『このまゝ、このまゝで死んで行けたらな。だが、君達、生きてゐて面白いことがあるか。死ぬのも生きるのも、面白くもあり、馬鹿氣てもゐると思はないか。』

『さう云へばまあ、さうですわね。』

『馬鹿。生きてゐることはこの上なく面白いことなのだぞ。だが死ぬことはまた、それ以上面白いことなのだぞ。このたうへん木。』

大石はさう云つて、無遠慮に大きな聲を出して笑つた。

その時、彼は何んにも怖いものはなかつた。
だが何んだか、泣きたかつた。

五十八　大石お輕をひつぱりこんだ

大石良雄の評判はます〳〵面白くない。彼は妻子を逐ひ出したあとに、二文字屋のお輕をひつぱり込んだ。そして傍若無人に人々に仲のいゝ處を見せ、その上又せつせと他の女の處に通つてゐる。人々はあきれ果てた。
そして父のもとに一人のこされた主税に同情した。實際主税は可哀さうだ。しかし一人では母を思ひ出して涙をながす主税も、他の人が見てゐる處では元氣にしてゐた。そしてお輕にたいしても、少しもいやな顏を見せなかつた。彼は絶對に父を信じてゐたから。
だが父とお輕の馬鹿笑ひの聲の聞える時、さすがに主税は自分の室に逃げ込まないわけにはゆかなかつた。
之で大石良雄の評判がよかつたら、天地はひつくり返るであらう。ます〳〵評判はよくない。

しかし當人はそれを知つて一向平氣でゐる。平氣でゐるはずである。彼はそれをのぞんでゐた。一體大石良雄と云ふ男は圖太い男だつた。勿論それは無神經とはちがふ、彼は無神經所か、神經質な男である。だが彼はすべてを捨てることの出來る男だつた。彼は名譽も生命もすてゝかゝれる男だつた。世間を彼は怖れない。彼はたゞ一つの目的に向つてゐた。

しかし彼はその目的を果してしまふと、其處に死が嚴然とひかへてゐることを知つてゐた。彼は若い者程、夢中になれなかつた。彼は冷靜に自分が死に近づいてゆくことを知つてゐた。自分はあと一年とは生きてはゐられない。

このことは正直に云つて、大石には心のこりなことだつた。正直に云ふと彼は死にたくはないのだ。しかし死ななければならないのだ。彼は死を恐れて許りはゐられないのだ。彼の覺悟はきまつてゐた。

どうあつても男の意氣地として吉良上野介の首はとらねばならない。そして亡君の墓前に供へなければならない。

人が何と云はうとも、自分のやらうと思つたことはやる。だがこの世に心殘りをなくしておき

たかつた。

彼の道樂は勿論敵をだますためだつた。しかし彼は又同時に死をだますためでもあつた。今の彼にとつて唯一のたのしみは、女と酒だつた。この二つのみ、彼に死を忘れさし、生るよろこびを知らした。

だから彼の道樂は誰が見ても本氣に見えた。いくら疑ひ深い敵も、彼の墮落を信じないわけにはゆかなかつた。それは無理もなかつた、いかに彼を信じてゐるものも、彼が本當に墮落したのではないとは信じ切れなかつた。

五十九　大石味方まであざむく

敵をあざむくには先づ味方をあざむかなければならない。大石良雄は遂に味方まであざむいた。あざむかれた味方は遂に怒り出した。殊に大石に逢ふ機會がなく、噂だけ聞かされてゐる江戸にゐる連中は怒り出した。

六月十二日の事だつた。堀部安兵衛とその義父彌兵衛とは次ぎのやうな話をした。

『お父さん。』

『なんだ。』

『この頃の大石殿の御様子をどうお思ひになります。私達若い者達は困つたことだと話してをります。』

『大きな聲では云へんが、わしも少し腑に落ちない。』

―讐をうつおつもりではゐられるのでせうね。』

『まさか、お心變りもなさるまいが。』

『いつ讐をうつお考へなのでせうね。』

『それはわからん。』

『早い方がいゝと思ふのですがね。』

『わしも一日も早く讐をうちたいと思つてゐる。ぐづ〳〵してゐる内に、わしの方が病氣で死なぬとも限らない。氣が氣ではない。』

『もういつでも大丈夫討てると思ふのですがね。私の考へを正直に云ふと、大石殿は讐をうつお

氣がなくなつたのではないかと思ひます。この頃はお輕とか云ふ女をひき入れて愉快さうにくらしてゐられると武林からの手紙にかいてありました。武林も内心、心配してゐるやうです。あの方の御氣持だけは私達にはわからないとかいてありました。』

『困つたものだ。』

『敵をだますためか、味方をだます爲か、あゝなつてはわかりません。讐をうたない顏をして讐をうつおつもりか、讐をうつやうな顏をして、實は讐をうたないおつもりか。人によつては、あの湯水のやうにおつかひになる金の出所についても、へんな噂をいたすものも御ざいます。』

『どんなうはさだ。』

『上杉家から出てゐるのだと云ふ。』

『まさか。』

『それでも、御用意の金には御自分は少しも手をおつけにならないさうですから、いくらお金がおありになつても、さうはつゞくわけはないと云ふのです。』

『わしも、もう兵糧が無くなられる時分だと思つてゐる。それがなくなる時、大石殿が腰をゆる

りとお上げになる時だと思つてゐた。だがいつまでもつゞくには、わしもほと〳〵根氣がつきて來た。』

『ぐづ〳〵してゐる内に同志も段々、生命が惜しくなつて來たやうです。一人ぬけ、二人ぬけ、し始めました。』

『今に、お前とわしだけになるかも知れん。』

『まさか、そんなこともありませんが、何とかしないと、今のまゝでは面白くないことが起ります。』

『お前もそれに氣がついたか。わしも前からさう思つてゐた。俺達の手でやつてしまはうか。』

『十人仲間がゐればやれると思ふのです。』

『やれるとも。』

その晩堀部安兵衞は京都にゐる同志、原惣右衞門、潮田又之丞、中村勘助、大高源五、武林唯七にあてゝ、早々江戸に下るやうに手紙をかいた。その中にはこんな文句がかゝれてゐた。

『兼ては二十人も無之候はでは、本望難達と申達したる事に候も、退て能々考申候處、

二十人無之候得共、存切たる眞實の者十人も有之候はゞ、心安く本望は相違すべくと存候……
近頃江戸侍了簡多く、畢竟腰の不立故と申可歟。絶言語候。十人存切たる者共有之候はゞ、
中々再往如此及御相談申間敷ものを口惜存候』

京都や大阪の同志は之を見ておどろいた。十人ゐれば、俺達に知らさずにやるつもりらしい。
十人ゐなくつて仕合せだつた。

處が安兵衞は手紙だけでは面倒だと思つた。それで手紙をかいてから六日もたつと自分で京都や大阪に出かける氣になつた。彼は火のやうな男だつた　思ひ立つとぢつとしてゐられなかつた。

六十　大石ゆるりと腰をあげた

大石良雄は安兵衞が京都に出て來たことを知つた。しかし安兵衞は彼の處には姿をあらはさず、原や、潮田や、武林なぞと往來をしてゐるのを知つてゐた。なにしに來たかは勿論、彼は知つてゐた。

彼は困つたとも思つたが、同時に、たのもしくも思つた。來るものが段々近づいて來たことを

知つた。だが彼は何にも知らないやうに振舞つてゐた。
この時にあたつて、淺野内匠頭の弟の淺野大學、去年の三月以來閉門されてゐたのが、閉門は許されたが、同時に知行召上げられ、安藝國の本國に左遷されることになつた。
今迄は大學のことを氣にしてゐた義士達、殊に大石良雄も、この事實を知ると、怒りを新にした。それは七月二十二日の事だつた。
もう誰にも遠慮はいらないと思つた。この事實で、大石良雄はゆるりと腰を上げたのだつた。
だが安兵衛達はそのことを知らなかつた。そして同志と相談をし、自分達で事を上げようと思つてゐた。
大阪にゐた原の處に大石から使が來たのはそれからまもなくだつた『私かに來るやうに』と云ふ密使だつた。原は急いで、山科に出かけた。
その結果、七月二十八日辰の下刻（午前九時）に圓山重阿彌の別莊で會議を開くことに相談がまとまつた。
七月二十五日の夜だつた。大石良雄は珍らしく家にゐた。今日は一寸かきものがあるから、彼

はさう云つてお輕も自分の室に入れず、一人机に向つて、何かかいてゐた。
彼の目には涙があつた。だが彼は泣きくづれはしなかつた。彼の筆は次のやうな文字をかいていつた。

『一……私達も仕度出來次第父子共江戸に下向仕るべく、左樣御心得下さるべく候、在府中若し死亡仕ることも候はゞ、萬に一つ妻子に何樣の事御座候や、計り難く、其節は見苦しからざる樣、よろしく御申しつけ下されたく頼み奉り候。各樣御難儀の段、誠に是非なく、迷惑至極と存じ候へども、今更いたし方なく、不慮に御緣家に相成り、かくの如き次第、本意によらざる事共、何とも申しやう御座なく候、いろ／＼考へ申し候へども、よき考へも浮ばず、幾重にも御免し下されたく頼み奉候。事改まりたる申し上げ事に御座候へども、只今迄の彼是の御懇情忝けなき次第、御禮の申し樣も御座なく候。一度お目にかゝりたく存候が、それも出來兼ね誠に殘念に存奉り候。

一、女ども方へは態と申しつかはさず候。御手前樣より宜敷きやうに氣色次第仰せくださるべく頼み奉り候。若ふかくごにて取みだし候風情も御座候へば遺憾に存じ候。我人武士の家には珍

らしからざる事情にて御座候。主税儀心底心もとなく存じ候處、存じの外に丈夫に承り屆け、此段千萬私大慶仕候。御察し下されべく候。最早念ひ殘すことも御座なく候。此上ながら御手前樣何かの御苦身推察奉り候。忝けなき次第に御座候。何分にも宜敷賴み奉り候……』

大石はかきつゝ自分の決心がかたまるのをおぼえた。彼の心は段々澄んで來た。彼は手紙をかき上げると、自分の名の處に池田久右衛門とかいた。

彼はその自分のかいた手紙を押し戴いて、何かに祈つて、それから、その手紙を論語の下にかくした。そして、彼は床間に立てかけてあつた三味線をとつて、靜かに爪びきした。するとお輕が靜かに襖をあけて、美しい顏を見せた。

『御酒でも持つて參りませうか。』

『あゝ持つて來ておくれ。』

大石は何事もなかつたやうに靜かに云つた。

六十一　大丈夫が決心したのだ

大丈夫が決心したのだ。怖ろしいものが何處にあらう。大石は遂に、心の底から決心したのだ。しかし外見は、少しもかはらなかつた。變らないのはあたりまへである。彼はいつでも腹の底の底では決心してゐたのだから。

たゞ彼はその決心を誰にも見せたくなかつた。彼自身にさへ、彼は時々その決心をかくした。そしていつまでも生きられる人間のやうにふるまつてゐた。

又誰よりも生命が惜しいやうに、ふるまつた時さへあつた。それは又嘘ではなかつた。彼は一筋縄の男ではなかつた。誰もが彼の腹を見ぬくことが出來なかつたのは、彼自身、自分の心を知らなかつたからだ。だが今彼は自分で自分の心を知つた。いつ彼は吉良の家に切り込むか。十二月、彼は自分の腹では何と云ふことなしにさうきめてゐた。

二十八日に圓山に集つて來た人は、二十人許りの人だつた。來るはずの人で來ない人もあつた。大石はこの日主税をつれて會議に出た。人々は大石の心をまだ疑つてゐた。大石が少しでもあいまいなことを云つたら、自分達だけで事をあげる許りだ。もうだまされない。さう若い人達は心できめてゐた。だが大石の姿を見ると、矢張り彼等は、尊敬しないわけにはゆかなかつた。何と

なく大人物のおちつきがあるのを感じた。
堀部安兵衛も大石を見ると、やゝもすると涙ぐみたくなり、信頼したくなつて來たが、しかし彼はさう云ふ自分の感じを殺さなければならないと思つた。そして、わざと怖い顔をして居た。座はなんとなく白けてゐた。

大石は上座に坐つて默然としてゐた。

誰も口を切るものがなかつた。その時間瀨久太夫が云つた。

『こなひだ堀部彌兵衛殿より書面を戴きましたが、彌兵衛殿は上方の永分別にも厭き申した、自分は八十に近づいて、いつ死ぬ身かわからないので、氣が氣ではない、もし讐をうたない前に病死でもすれば、先君にお逢ひして何と申し上げていゝか、わかりませんので、老後の思ひ出に一人でも吉良の館にふみこんで死にたいとかいてありました。私もそれをよんで他人事とは思へません。私も六十をこしてをりますから、今日のお話のもやうでは彌兵衛殿と一緒に、死にたく思つてをります。』

『御尤です。』同じく老人組の小野寺十内が云つた。『私もいつ死ぬかわからぬ身ですから、さう

云ふ時に御一緒に死なして戴きたいと思ひますが、大夫殿には又いゝお考へもおありでせうから、一つ御きかせ願ひたいもので。』

今迄、辛抱してゐた、安兵衞辛抱出來ずに口をきいた。

『私達も一日も早く讐をうちたいと思つてはをりましたが、大夫の深い思召もあることと今迄辛抱して參りましたが、大學殿もあゝ云ふことになりました以上、大夫にも御決心がおつきになつたことと思ひます。この上は一日も早く復讐いたすより他に、道は御ざりますまいと思ひます。』

安兵衞は言葉はなるべく丁寧にしてゐたが、しかし彼の聲はふるへ、目は血ばしつてゐた。大石の返辭によつては斷行あるのみと云ふ決心が見えてゐた。

其處で大石良雄は靜かに口を切つた。

『皆さんの決心はよくわかりました。一難ふる毎に決心のぐらつく男も、ないとは云へない今の世に皆さんのやうに、ます／＼決心を強くされる方がゐて下さるのは、實に賴しく、私も感激いたしました。先君の靈も、さぞ御滿足のことと思ひます。皆樣もおつしやつたやうに、大學樣があのやうな處置をとられた上、もう私達の決心はきまつたわけです。しかし私は皆さんと少し考

へを異にしてゐる點が御ざいます。』大石はかう云つて一座を見廻した。一座の若い者達の燃えた目は大石の目にぶつかつた。大石の目は靜かな、だが何とも云へない深いおちついた目だつた。人々は反抗しようとしたが、大石の目を本當に見たものは、大石の心にふれることが出來た。何を大石が云ひ出すか。人々は緊張した。

『皆さんは敵をのんでかゝつてゐられる。それは大いにいゝことではあるが、我等は立ち上つた以上、そして討入りをした以上、たゞ死ぬのが目的ではないのはわかり切つてゐます。たゞ死ぬだけなら、今迄の皆さんの苦心は水泡となり、吉良は會心の笑をもらすでせう。我々は討入つた以上、吉良の首を持つて歸らなければなりません。一度しくじつたら、もう我等は吉良の首をあげることは出來なくなります。ですから、我等は事をあげるまでにはそれだけの用意がいります。我等が討入りした、だが犬死にしたとあつては、先君のお名前にもかゝはるわけです。大概大丈夫だ位でことを上げるわけにはゆきません。その位なら、私は今日までのやうに苦心はしませんでした。私にはそれ相應の考へがあつて、今日までやつて來たのです。そして今後も、皆さんと苦心を共にして、必ず吉良の首を御墓前にお供へして見せるつもりでゐます。私にも相當の考

へはあるつもりです。私を信じないもの、勝手に犬死にしたいものは、何をなさつてもかまひませんが、その時は他の人々の今迄の苦心を無駄にし、他の人の忠義な心をおろそかにしたことになります。「算多き者は勝・算少なき者は勝たず」と云ふ言葉があります。必勝を期せずにたゞ死にたいではこの大石は贊成出來ません。だが既に時は來ました。我々はいたづらにぐづ〳〵はしてをれません。私達は十月には江戸に參ります。皆さんも十月迄には江戸に出て下さい。仲間を裏切り、ぬけがけの功名を望むものは、私達の同志だとは思ひません。私達は同じ時に死ぬことをお互に誓つたのです。心の變つたものは別です。心の變らないものは、心を一つにし、敵の動靜をさぐり、赤穗には忠義の家來が少なくはなかつたと云はれるやうに心がけたいと思ひます。皆さんはさうは思はれませんか。忠義にかはりはございません。お年よりだけが忠義と云ふわけもございません。私達も一緒に死なしてもらひたく思ひます。だがそれまでには、吉良の首はあげなければならないと思ひます。』

一座は感激した。

『何事も大夫におまかせしようではないか。』

原はさう云つた。誰も元より不服はなかつた。
『大夫がさう云ふ御志でゐられたことを知らなかつた私達は誠に馬鹿者でした。今の御話をうかゞつて私はうれしくつて仕方が御ざいません。』
安兵衞はさう云つたかと思ふと、男泣きに泣き出した。
皆も涙が出てくるのをとめることは出來なかつた。
それから酒がはこばれた。人々は思ふ存分酒をのんだ。小野寺十内は、うれしくつて仕方がなくなつた。手鼓をうつて『剛者の交り、賴ある中の酒宴哉』と小謡の一曲をうなり出すと、原惣右衞門は得意の亂舞をやり出し、扇を開いて、『富士の御狩の折を得て、年來の敵、本望を達せん』とやり出した。

六十二　神文を返す

堀部安兵衞の喜びは又一層だつた。彼はこの喜びを一時も早く義父に知らせ、仲間に知らせたかつた。彼は翌日京都をたつた。大石は潮田を一緒に江戸にゆかした。二人の元氣は當るべから

ずであつた。二人は濱松で、左遷される大學殿にゆきあつたが、私かに拜しただけでわざとお目にかゝらなかつた。復讐した後に御迷惑をかけたくなかつたからだ。

この二人だけではなかつた。義士達は皆大學殿にはお目通りしなかつた。大石も病氣と稱してお目にかゝらなかつた。

大石は心に思ふことがあつて、それからまもなく貝賀彌左衞門と大高源五を呼んだ。そして二人に、手許にある幾十通の誓約の神文を渡して、それを本人に返させることにした。

二人はおどろいて大石の顏を見た。大石は笑つて云つた。

『この神文をだまつて受けとるものは、望みのない男だから、おとなしく生かしてやるがいゝ。この神文をかへした時、顏色をかへて怒るものは望みのある男だから、本當のことを聞かしてやつて、十月迄に江戸に出るやうに知らせてほしい。』

其處で二人は大石の心を知つて、

『承知いたしました。』とお辭儀をした。

『かう云ふ風に云ふのだ。「私達が本日參上いたしましたのは、大夫の命をお傳へするためで、大

夫には昨年來貴殿方と御相談致され、只管御家の御再興に苦心せられた甲斐も無く、大學殿には此度の御始末、かくなりし上は、お互の忠義も、これまで、力の盡しやうもござりませんから、何時まで盟約を續けましても限りがございませんから、御差納れの神文盟書は、一先づ御手許に御返却申し上げます。又よきをりでもあれば、改めて御相談申し上げる折もございませう。それまでは御各〻御自分の身の振り方をつけられるやうおつしやいました」それで相手がよろこんでうけとつたら、君達も、おとなしく歸つてくるのだ。生きたい者は生かしてやるのがいゝのだ。』

大石はさう云つた。

『よくわかりました。』

二人は大石の心の大きさに今更に感心した。心がはりしたものにまで思ひやりがゆきとどき、そのくせ大事なことは忘れてゐない。相手の顔を立てながら、相手の眞意を見ぬく、その方法の婉曲で巧みなのに感心した。二人は方々へ出かけて、大石の云ふ通りに云つた。或人はかくし切れぬ安心した樣子を見せ、ある者は本氣に怒り出した。怒り出したものは二人から本當のことをきかされて、今度はすつかり喜んだ。

二人は神文をかへしに行つて喜ばれるとがつかりし、怒られるとよろこんだ。

六十三　お輕を返す

大石の決心は既にきまつた。さすがに彼も放蕩者になりすませるわけにはゆかなかつた。見かけは今迄と同じではあつたが、さすがに浮かれ切ると云ふわけにはゆかなかつた。だがこの氣持がわかるものは他には居なかつた。大石自身それに時々氣がつき、自分の心の修業がまだ足りないのにはつとした。まだ／＼自分は至らぬ人間だと思つた。落ちついてゐるつもりで矢張りおちついてはゐられないのだ。だが他の人から見ると、なほおちついて來たやうに見えた。

『どうも身體の具合がよくない。』彼はそんなことを時々云つた。

『あまりすぎるからですわ。』

『さうかも知れない。』

しかし大石は無邪氣には笑へなかつた。

『あんまり浮き樣は氣が多すぎるのよ。』

『そんなことはないよ。』
『かくしてもだめ。』
そんなことを云はれても、彼は何となく空々しさを感じた。
彼は半年と自分がこの世に生きてゐられないことをまざ／＼と知つた。
彼は山科をひきあげるのにどうしたら一番敵から疑ひをかけられずにすむか、それを先づ考へた。そして道樂で金に困つて、備前岡山の家老池田玄蕃方に暫く身を寄せることにしたと、人々に告げた。そして家を抵當に入れて金をつくり、家財を賣つて金をつくり、そして女や若衆の處にかよつた。人々は大石の一家の破滅が來たことを感じた。
或る日、彼はお輕に云つた。
『暫く二文字屋に歸つてゐてほしい。』
『それは歸れとおつしやれば歸りもいたしますが。』お輕は泣き出した。
大石は默つてゐた。彼とてお輕と別れたいとは思つてゐなかつた、だが時が來たのだ。
『あなたのお氣持はよくわかつてをりますから、私は何にも申せませんが、せめてこゝをおたち

になるまでわきにおいて戴きたうございます。』
『その氣持はわかつてゐるが、私だつて一時も多くお前に居てもらひたいのだが、その私が云ひ出したのだから、聞いてくれないと困る。』
『それではどうあつても。』
『さうだ。』
『それでは之が今生のお別れなのですか。』
『なぜそんなことを云ふのだ。』
『私には何にもかもわかつてをります。』
『それなら、なほ歸つてもらはなければならない。皆も苦しんでゐるのだ。誰もかれも妻子と別れてゆくのだ。私だけさう呑氣にはしてゐられない。』
『よくお氣持がわかつてゐるだけ、私はつらいのです。』
お輕は又泣いた。
口には云へないだけ、二人はつらかつた。

『お前にはどんなに禮を云つていゝかわからない。いろ〳〵苦勞をさせたが、またいつか花が咲かないものでもない。お前は若いから、いつか今日のことをたのしく思ひ出すこともあらう。』

『そんなことが。』

『その時になつて見ればわかることだ。』

大石はお輕にいろ〳〵のものを渡して、二文字屋にお輕をかへした。そして自分は一時四條の梅林庵をかりて、其處に引越た。彼の行狀は益ゝ墮落しつゝあるやうに見えた。

彼は親類に近衞家の諸大夫をつとめてゐる、進藤筑後守長富に百兩の借金を申し込んだ。進藤は大石の行狀が氣に入らないので、冷淡に斷つた。斷られた大石は、元よりがつかりしたが、しかし彼は相手がさう出れば出る程自分の方はしつかりしなければならないと思つた。それで彼は自分の金を借りたがつたのは道樂の爲ではないことを知らしたく思つた。それで彼は岡山へ引こむから、その間おあづかり下さいと云つて、長持に書籍や、書畫や、刀劍を入れて、それに一一宛名をつけ、死後にわけてもらふやうにして、進藤家へとどけさした。

『今に自分の心がわかり　今日自分に百兩貸さなかつたことを後悔するであらう。』と彼は會心の

笑みを見せた。

彼は負けてはゐない男だつた。

六十四　大石、三宅多中に牡丹を送る

義士達はおひ〳〵江戸に集つた。だが大石良雄は相變らず、京都で遊び歩いてゐた。大事を起す人には見えなかつた。勿論それは外見だけであつた。決心してからの大石はいつも立ち上る用意は出來てゐた。

たゞ彼はその日のくるのを落ちついて待つてゐただけだ。いざと云ふ時が來て腰がぬけるやうな男ではなかつたが、いざと云ふ時が來ないのに、あわてるやうな男でもなかつた。

日のたつのは早かつた。彼は誰にもうたがはれず、そのくせ出來るだけあとを淸くしたく思つた。それで彼は他の人のやうに急いで江戸に出ることは出來なかつた。いざと云ふ時迄、彼はいやに落ちついてゐるやうに見えた。彼はいつ迄も死なない人間のやうにふるまつてゐた。

江戸にゐる連中は、又心配になり出した。

又自分達お人よしはだまされたのではないか。
大石良雄の一族で大石無人と云ふ八十近い老人が江戸にゐたが、この老人は早く浪人となつて江戸に出、その長男は津輕侯に仕へて居た。この老人が第一に怒り出した。
ある日、片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門をよんで云つた。
『もう二年もたつのに、まだ復讐をしないと云ふのはどう云ふわけです。』
『大夫殿がまだ早いとおつしやるので。』
『早い。内藏助がそんなことを云ひましたか。あの男を私は見損なつた。近頃あの男の評判はどうです。あなた方は、あの男の云ふことを信用して、一日々々と日をのばしてゐるのですか。』
『大夫殿には深い御考へがあるやうなので。』
『考へも何にもないぢやありませんか。死を覺悟したものには、斷行だけが殘つてゐます。しくじれば自殺すればいゝ。讐を目前に見て、一日々々日をのばすのは、見てゐる私達でも、はがゆく思ひます。堀部彌兵衛殿なぞも口にこそ出されないが、內藏助の態度の煮え切らないのには、內心はがゆがつてゐます。誰か京都にやつてすぐ出てくるやうに云つたらいゝでせう。それでも

出てくる樣子が見えなかつたら、もうたのむに足りないと思ふより仕方がありますまい。』

無人は他の人が云ひたくつて云へないことを、老人の一徹でずば〳〵云つてのけた。

『使を出しませう。』

片岡にとう〳〵さう云はせて、無人は初めて我が意を得たと云ふ顏をした。氣早の連中はこの話をきくと喜んだ。すぐ急使を出すことになつた。急使が道中を急いでゐる時、落ちつき拂つた大石良雄は、更に落ちついてこんな手紙をかいてゐた。

『この間は御無音にまかり過ぎ候處、御手紙拜見、彌〻御無難の事珍重に存じ候。然ば明十一日御茶の事仰せ下され候、先々忝く存じ候。參上いたし御禮申すべき處、不本意に御座候へ共、下拙儀も京に住居成りがたく候故、近々在邊へ引越申し候。右に付何かと用事も多く、參上いたし兼ね候間、おゆるし下されたく、右御報御禮かた〴〵かくの如くに御座候』

九月十日　大石內藏助　三宅多中樣　さうして彼はそのあとに、かうつけ加へた。

『返す返す自由ながらかくの如くに御座候。よろしからず候へどもぼたん二三種其元へ御引取り下さるべく候、明後日頃からにても、御勝手に御人つかはさるべく候』

三宅多中と云ふ人はこの手紙をうけとつて自分の妻に云つた。
『大石様も御氣の毒だ。とう／＼都にお住ひが出來にくくなつたらしい。』
『それはあたりまいですわ。あんなに道樂をなすつては、どんなにお金があつたつてたまりませんわ。』
『明日早速牡丹をもらひに人を出さう。立派な牡丹だよ。』
『さうでございませうね。』
大石良雄の心中を知るものは、たゞ大石良雄だけだつた。その孤獨感が、彼には氣持のわるいものではなかつた。
彼はゆる／＼と彼らしく用意をしてゐた。
自分が死んだ後にも牡丹は美しく咲くであらう。彼は三宅の使が牡丹を持つて歸るのを見て、さう思つた。
彼の心は澄み切つて居た。秋の空のやうに。

六十五　主税母に逢ひにゆく

それからまもなくであつた。大石は赤穂の城に永井伊賀守がくることを知つたのは。それを聞いても、大石の心は靜かだつた。それは旣に覺悟が出來てゐたのだから。

しかし心で思つた。『今に見ろ』

さう云ふ氣持の時、江戸の使は大石をたづねて、早く江戸に出て來てほしいと云ふ口上をつたへた。大石は笑つて云つた。

『承知しました。』

『いつ頃江戸においで下さるか、はつ切りしたことをきいて來いとのことでした。』

『さあ、まだ京都でしなければならないこともありますから、日のことははつきり云へません。しかし行つていゝ時が來ましたら行きます。』

大石は自分を信じない人々の心がわかつたが、しかしそれは自分の氣持ちとはあまりに緣遠い氣持ちなので、同感出來なかつた。それでわざと冷淡に笑つた。

『それではいつ江戸に來て下されるか、わからないのですか。』
『わかりません。ですが、もう長いことはありません。來月には出かけられるでせう。』
『それならば來月來ていたゞけると報告いたしましてよう御座りますか。』
『どうぞ。』
大石は冷くさう云つた。使は歸つた。歸つたあと、彼は自分の斷り方が少し冷たすぎたのに氣がついた。わざ／＼來た者にたいして、自分は少し冷淡すぎたと思つた。だが今にわかることだ。
彼は主税に使が來た話をした。主税はそれを聞くと、すぐ父の氣持が感じられた。彼は暗示されたもののやうに云つた。
『お父さま、私を江戸にやつて下さい。』
『お前は行つてくれるか。』
『はい。』
『お前がゆけば、私の心も、皆にわかるだらう。それなら行つてもらふか。しかしゆく前にお母さんに逢つてくるといゝ。』

『お母さまの處へ行つてもいゝのですか。』
『行つておいで。』
『はい。』
主税は初めて父の前に涙をこぼした。つい聲を出して泣きじやくりした。大石も涙が出て來て困つた。だが彼は主税の泣くのを怒る氣にはなれなかつた。泣けるだけ泣かしておきたかつた。

六十六　母と子の再會

父の下に歸つて居た大石良雄の妻お陸は、さすがに毎日、夫のことや、子供の主税のことが思ひ出され、京都に飛んでゆきたいと思はないことはなかつた。たゞ乳のみ兒と、幼い子供達がゐるので、それでいく分氣がまぎれてはゐたが、もう一生夫にも長男にも逢へないのかと思ふと、さすがに泣かないわけにはゆかなかつた。
彼女は今も主税のことを思つてゐた時、主税が訪ねて來たことを聞いた。お陸は夢かと喜んだ。だが同時に、恐れながら待つて居た時が、とう〳〵來たことを知つた。

だがそれだけ彼女はなほ主税の顔が見たかつた。彼女はあわてゝ玄關の方へ出かけた。
向ふから主税がくるのに出あつた。『お母さん。』
見上げるやうな我が兒を見て、母は立ちすくんだ。
『よく來てくれたね。逢ひたかつた。』
『私も。』
二人は泣くのをこらへるのに骨が折れた。
二人は嬉しくつて泣くのか悲しくつて泣くのかわからなかつた。たしかに嬉しい。しかしたしかに又悲しい。
逢ふ。別れる。うまく讐がうてたとする。だが千に一つも生きられる見込はない。泥棒ではない。逃げかくれるわけにはゆかない。
二人は別れることを忘れたい。だが忘れるわけにはゆかない。死を忘れたい。だが忘れるわけにはゆかない。あと百日とは生きてゐられさうもない。喜んで許りは居られないのは當然だ。だが悲しんでもゐられない。君主の讐をうつものが泣いて許りはゐられない。

二人は喜んで話す。うまく讐をうつてくれ、うちますと話す。だがそのさきは中々云へない。『立派に死んでおくれ。』さうは中々云へない。だが決心は段々二人の間に強まつて來た。敵を見て泣くわけにはゆかない。逢つた喜びがすぎて、話が眞面目になればなる程二人は勇氣が出て來た。もう泣かない。

主税は決心が強まるのを覺えた。母の父は主税に逢つて、お祝ひを云つた。

『いよ〳〵江戸にゆくのださうだね。お父さんから御手紙をいたゞいたが、あなたの決心が強いのをよろこんでこられた。お祖父さんも鼻が高いわけだ。本當に立派な武士になつたものだ。』

お祖父さんはさう云つた。

主税はそれを聞くと勇氣がわくのだつた。

六十七　母と子の別れ

主税が歸るのを皆、戰場に行く勇士の門出のやうな氣持でお祝ひし、又送つた。母はもう泣かなかつた。主税も勿論泣かなかつた。

他の多くの人の方が、泣いてゐた。女中達はこんな立派な若樣が、讐を討ちに江戸にゆかれて、もう二度とお逢ひ出來ないのかと思ふと、御氣の毒で泣かないわけにはゆかなかつた。だが聲をたてゝ泣くものはなかつた。

主稅は從者をつれて、靜かに歸つていつた。母は走けてあとを逐ひたかつた。だがそんなことは出來なかつた。主稅の姿が見えなくなると、自分の室に入つた。そして一人で泣けるだけ泣いた。

その時主稅も馬上で、淚をこらへることが出來なかつた。だが彼は一人にはなれなかつた。淚を往來の人に見せたくなかつた。但馬の秋は美しかつたが、主稅の氣持は母のことで一ぱいだつた。それも無理はない彼はまだ若すぎるのだから。弟や妹のことなぞも思ひ出した。だが彼は又、父や、江戸にゐる仲間のことを思ひ出した。

『私も男だ。立派な大石良雄の子供なのだ。』

彼は勇氣が十倍し、誰が泣くものかと思つた。

父は珍らしく彼の歸りを待つてゐた。

それからまもなく江戸の人達は大石良雄の息子の主税が江戸に出て來たことを知つた。
『子供をよこす位だから安心だ、本尊も今に見えるだらう。』
人々は大石を又信用するやうになつた。
そして本尊はどうしたか。

六十八　大石お輕を訪ねる

十月六日、一人の男が、紫野の瑞光院の淺野内匠頭の御墓前に丁寧に額づいてゐた。
その男は大石良雄だつた。
彼はいよ〳〵復讐することを亡君に告げ、その加護を祈るのだつた。
そしてその夕方、彼の姿は二文字屋にあらはれた。お輕に逢ふためなのは云ふ迄もない。いや、お輕に逢ふためではなく、別れるためだつた。二文字屋では大さわぎをした。
彼は其處で靜かに酒をのみ、お輕親子と心靜かに話をした。彼はいよ〳〵明日立つことをつげた。

お輕は泣き出した。
『泣くものではない。』大石は靜かに云つた。
『喜んでおくれ。』
『はい。』
お輕は淋しく笑つて見せた。
『このまゝこゝに居られたら。』そんな氣がふと通り魔のやうに彼の頭をかすめた。しかし彼の決心はそんなことでにぶりはしなかつた。彼は氣輕に心がはりの出來る人々が羨やましかつた。
『お輕、何か聞かしてくれ。』
『はい。』
お輕は琴を持つて來てひいた。いつもよりもなほその音に感じがあつた。お輕の心は澄んで來た。涙聲だつたのが、冴えて來た。お輕の決心は強まつて來た。大丈夫の門立を祝したいやうな氣になつた。聲にはいつもより力がこもつた。大石良雄の心がお輕の心と響きあつた。お輕は最後に近づくに從つて何かが自分に乘りうつつて來たやうに思つた。

『七尺の屛風も躍らばよも踰えざらん。羅綾の袂も引かばなどか絶えざらん。』
彼女は最後の息をはき切つたやうな氣がした。彼は靜かにお辭儀した。
『おかげで勇氣百倍した。お輕、この內藏助はどんなにお前に感謝してゐるか、わからない。達しやにしてくれ。』
大石は立ち上つた。
彼はまもなく自分の家路を步いて居た。そしていつも曲る處を曲るのも忘れて十步程步いて、ふと氣がついた。
『俺はどうかしてゐる。矢張り冷靜なつもりで、何處か心のおちつきを失なつてゐる。自分の修業はまだ足りない。』
さう思つて、彼はあともどりした。
翌日彼は、おしのびで江戶へ出た。
さう人は思ふであらうが、彼はそんな男ではない。彼は大ぴらに、むしろ見せつけるやうに、江戶へ旅立つた。同勢十人で、それぐ馬にのり、日野家用人垣見五郞兵衛と大書した。繪符を

つけた長持二竿を雲助にもたせて、悠々と江戸に下つてゆく。

彼は何處までも彼である。他人流儀ではない。他の人には思ひつけないやり方をやる。そして敵をだます。かくれるよりあらはるゝことはないと云ふが、かう大ぴらにゆかれたのでは、かへつて人々は大石の本心を疑つたであらう。

意表外だから。

しかし彼はすぐ江戸には入らなかつた。川崎在平間村に一先づおちついた。それは先發隊の人達によつて見つけられ、又用意された家だつた。こゝに彼は十日許りおちついて居た。

六十九　大石江戸に來る

大石が來た。本尊が來た。義士達はいよ〳〵時が近づいて來たことを知つた。彼等は今迄にも、上野介の動靜をさぐることに苦心をしてゐた。しかし大石が來てから、ます〳〵熱心に力をつくした。何人もが手わけして、上野介の家は勿論その周圍の具合なぞも調べるだけ調べて、萬の一つもしくじりがないやうに、注意に注意した。

義士達はいろ〳〵に變相してゐた。醫者になつたり、米屋になつたり、或者は道場を開いたりしてゐた。

心の變つたものは自然と彼等の所によりつかなかつた。信頼してゐた人が一人ぬけ、二人ぬけすることはさすがに氣持のいゝものではなかつた。大石は人々が怒つてさう云ふ臆病者の話をする時、彼もその臆病者を憎まないわけにはゆかなかつた。だが彼は自分の内にも彼等と共通のもののあるのを感じないわけにはゆかなかつた。だが彼は自分の誓ひは忘れなかつた。又亡君の怒りを忘れるわけにはゆかなかつた。子供つぽいと自分でも思ふ程、彼は吉良を憎んでゐた。しかしそれ以上、彼の名を惜しむ心が、彼の心がはりを許さなかつた。そしてそれ以上にも、彼は自分のきめたことを實行しないと氣がすまなかつた。

結局、吉良の白髮首を上げないと氣がすまないのだつた。なぜ？　それは彼にもわからなかつた　世間がそれを强ひるのでもあつた。或る日彼の一番の相談相手の吉田忠左衞門と原惣右衞門が彼に呼ばれてやつて來た。

大石は二人がそろつたのを見ると云つた。

『もういつ迄もぐづ〳〵してはかへつて敵に悟られる。近い内にやつてしまふ方がいゝと思ふ。』

『おつしやる通りで御ざいます。』

『それで相談したいことがあるのだ。どうもいざと云ふと腰がぬける者が多い。腰ぬけはたよりにならない。腰のぬけないものだけ集つて、誓約を新たにして、勇氣づけ、注意すべきことは注意するのが必要と思ふ。』

『おつしやる通りで御ざいます。』

『それでは吉田に誓約文を起草してもらひたいのだ。最後のとどめの釘を打つてもらひたいのだ。この上へつては我等の宿望は達しにくい。戰ひと云ふものは勝たなければならない。我等がしくじつたらあとにつゞくものはない。吉良は會心の笑をもらすだらう。』

『おつしやる通りです。』

『だから我等は必勝を期さなければならない。それには吉良の邸を見はりして吉良が逃げられないやうにする人も入用だ。皆で出鱈目に討ち入つたら、何處かに手うすな所が出來て逃げ出さないとも限らない。だから功をあせる者があつては困る。それに又仲のよくない人々が居るやうだ

が、さう云ふ人達が私の爭をして何處かに手おちが出來ても困る。さう云ふ點をよく考へて誓約文をかいてもらひたい。』

『はい。』吉田は光榮を感じて云つた。『書いて見ませう。惡い處がありましたら、なほして戴くとして。』

それから三人はいろ〳〵と吉良の邸の圖面を見て夜討の相談をした。そしてまだはつきりしない點なぞ、今後皆にさう云つて、しらべてもらふことにした。

七十　誓約文

それからまもなく或夜吉田忠左衞門は大石良雄をたづねて來た。

『書いて見ましたが、見ていたゞいてなほす處はなほしたく思ひます。』

大石良雄は、吉田から誓約文を受けとると、それを輕く押し戴いて、丁寧に開いてよんだ。

『一、冷光院樣、御尊讐、吉良上野介討ちとる可き心ある侍共、申し合せ候處、この節に及び、大臆病者共心變りをいたし、退散いたせしものを選び捨て、必死相きめ候面々は、御靈

魂も御照覧あそばさるべく候。
一、上野介殿御屋敷へ押込働之儀、功の深浅之あるべからず候。上野介殿首揚げ候者も、警固一通の者も、同然たるべく候。然ば組合働き役好み申すまじく候。尤も先後の爭いたすべからず候。一味合體、いか樣の働役に相當り候共、少しも難澁申すまじき事。
一、一味の各々が自分の考へを申し出候とも、自己の意をふくみて妨げ申すまじき事、誰にても理の當然に申し合せ可く候。兼て不快の底意あり候とも、働の節互に助け合、急を見つぎ、勝利の全所を專に相働くべき事。
一、上野介殿十分に討取候共、銘々一命遁るべき覺悟之なきうへは、一同に申し合せ、散々罷り成申す間敷く候。手負の者之有るにおいては、互に引かけ助けあひ、其場へ集り申すべき事。
右四箇條相背候はゞ、此一大事成就仕るべからず候、然ば此度退散の大臆病者と同然たるべき事』
大石はよみ終つて、さすがに吉田だけのことがあると思つた。

『結構です。少しもなほす處なぞはありません、之以上にかける人はないでせう。いたれり、つくせりです。』
『恐れ入ります。』
『それなら早速、集ることにしませう。』
『それは結構と思ひます。』
それから原惣右衛門もよばれて來た。三人はそれから討ち入りの時のいろ〳〵の手はずについて相談をした。
その結果十二月二日深川八幡前の茶屋に義士達が集ることになつた。

七十一　決死の士

その日集つたものはさすがに決死の士許りであつた。臆病者は一人もゐなかつた。彼等は今やお互に信じあふやうになつた。すべての人が仲がいゝとは云へなかつたが、すべての人は望を一つにしてゐた。その望の前にはすべてを忘れることが出來た。

大石はもう臆病者ではなかつた。又放蕩者でもなかつた。彼は權威あるもののやうにおちついて上座に坐つてゐた。そのわきには主稅が端然と坐つてゐた。彼の若々しい心には純な決心の意氣が見られた。他の義士達も皆今日は緊張してゐた。そして大石の口からもれる言葉を待つてゐた。

大石は落ちついて、低い聲で、しかししつかりした言葉で云つた。

『皆樣が今日集つて來て下さつたことを、大石內藏助は實に有りがたく思ひます。冷光院殿の靈もさぞお喜びのことと思ひます。これだけの人が集れば、我等の大望は必ず成就することは疑がないからです。だが、それには私達の協力が必要です。私達が力を一つにしなければ必ず失敗するでせう。大事なことは私達が力を一つにすることです。それで今日集つて戴いたのも、私達の力を一つにして、望を達したいからであります。』

彼はさう云つて、吉田の方を見て云つた。

『起請文を。』

吉田は謹んで自分のかいた起請文を大石の前に持つていつて置いた。大石はそれを押し戴き、

そしてそれを開いて、力づよい聲で云つた。

『起請文前書の事。』

そしてつゞいてよんでいつた。

義士達は頭をさげて聞いてゐた。耳の痛い言葉もあつたが、しかしかゝれてゐることが本當なので、誰も畏れ入つて聞いてゐた。涙をながす人々もあつた。大石の聲もいく分ふるへて來た。だが最後の『右四箇條相背候はゞ、此一大事成就仕るべからず候、然ば此度退散の大臆病者と同然たるべき事』を讀んだ時は、大石の内から力がほとばしり出て、すべての人を威壓するやうに思へた。

『之に異存のある人があれば今の内に云つて戴きたい。異存のある方がありますか。』

誰も何とも云はなかつた。

『勿論異存がないのがあたりまへと思ひます。こゝにかゝれてゐることは本當のことで、皆さんがこゝにかゝれてゐることを守るか、守らないかで、我等の苦心は無駄になり、我等は世間の物笑はれになり、犬死になり、吉良上野介の嘲りの笑ひを買ふことになるのですから。だからこゝ

にかいてあることは、絶對に私達は守らなければならないと思ひます。私もこの起請文に決して背くやうなことはいたしません。』

大石はさう云つて、自分の名をかいて、血判を押した。

すべての人の決心はきまつた。皆、大石にまけずに、自分の名をかき血判をした。

それがすむと、夜討の時の心得の覺えがきが皆にわけられた。義士達の意氣は天をついた。

覺えがきにはこんなことがかゝれてゐた。

一、日がきまれば、前日の夜より靜かに定めておいた三ヶ所へ集ること。

一、その日が來たら、兼て定めて置いた時刻に出發のこと。

一、讎の首を揚げた時は、引とる所へ持參し、その時の樣子でその死骸の上着を剝取つて包むやうにし、若し上使などかけつけてくれば、この首泉岳寺へ持參したく思つてゐることを云ひ、お免しなき時は止むを得ないから御指圖通りにすること。勝手が許されゝば泉岳寺へ持參し御墓前に備へること。

一、上野介の息子の首は揚げることが出來ても、持參するに及ばず、そのまゝうちすてゝおく

こと。

一、父子討取りし時は相圖の小笛を吹き、段々吹きつぎ皆に知らすこと。

一、鉦の相圖は皆の引きあげる時。

一、退口は裏門。

一、引とる處は無縁寺、但し無縁寺に入れない時は兩國橋東の橋ぎはの廣場に集ること。

一、引取る途中近所の屋敷より人數を出し押しとゞめる時は挨拶して、その實をつげ、私共は逃げ去ることは決してないこと。無縁寺まで引取り、公儀の御見分の使を迎へ、旨趣を申し上げるつもりです。もしお疑ひあれば無縁寺まで御附き下さい、逃げるものは一人もありませんと申すこと。

一、かの屋敷より追手が追つて來たら、皆ふみとゞまり勝負すること。

一、勝負の內、御檢使があれば大門は開かず、くゞり戸から一人外へ出、御挨拶すること、勝負半にてももう勝負はすんだやうに告げ、當人も討ちとりましたから、生きのこりましたものを呼び集め、御下知を申し受ける覺悟でございます。私共一人も退去る者は御ざいません

と申し上げること。門内へ入つて見分すると云はれた時も、暫く待つてもらふこと、討入りの者が散つてゐるので何をされるかわからないので心配なことを申し、追附門を開き御目にかゝることを云つて、堅く門を閉ぢておくこと。

一、云ふ迄もないが、討入りの者は必死の覺悟、立ち退きの時の申し合せをかいたのは、その時の心得のためで、退口の覺悟をして討入つては臆病になりやすいものだが、私共は退去しても必ず死ぬ人々だから、その心配はないと思ふ。云ふ迄もなく討入りの時は丈夫の覺悟で粉骨の働きをすること。

以上。

勇士の面々はこれ等の文句をよんで決死の覺悟をした。誰も臆病なものはないが、しかし顔が赤くなつたもの、いく分靑ざめた者もあつた。彼等は自分の内に力のみなぎることを感じた。

『やつてやるぞ。』

大石はそれ等の人々の決死の顔を見て思つた。之等の人々と一緒に死ぬことは不幸ではない。

彼は少年や、老人の決死の顏を見ると、さすがに淚ぐみたくなつた。

我が子の顔をふと見た。

見てはならないものを見たやうに思つた。我が子が健氣で健氣で仕方がなかつた。可愛い奴だ。

彼は泣き顔を見られたくないので、酒宴の用意を命じた。

とは云つて、彼等の集りは武士の集りとは見えなかつた。頼母子講の集りとふれして集つて來たので、皆の姿はと見ると、何れも一癖ありげな顔はしてゐたが、坊主とか、醫者とか、宗匠とか、町人とかの集りだつた。皆、お互に自分達の姿を見ると滑稽に思はなければならなかつた。しかし今や、滑稽なぞとは考へられない。たゞ他の人が見ると、へんな男の集りに見えた。社會の落伍者のやうな人が多かつた。たゞ顔だけは皆立派だつた。だが中には、いかにも坊主になりすませてゐたものや、宗匠になりすましてゐた者もあつた。だがさう云ふ男の云ふことは姿に似つきもしない言葉だつた。注意して見たら、滑稽だらうが、さすがに忍んで相談することにはなれてゐる彼等は人々にへんに思はれるやうな、へまはしなかつた。相談がすむと、人々はまるで自分が富籤にでも當つたやうに、元氣なうれしさうな顔をしてゐた。皆が皆、籤をひきあてたの

たゝその籤にはなんとかいてあつた。
今月中に讐をうつこと、それから死！
だが誰も元氣さうにしてゐた。だが中には臆病風と戰つてゐるものも、一人や二人はゐたかも知れない。

七十二　良雄と主稅

それからまもなく、或る夜、大石親子は吉良邸の繪圖面を見てゐた。彼等の仲間はこの繪圖面をつくる迄にどんなに苦心したか。それを思ふと大石はその圖面を見ながらも、同志に頭をさげたい氣がした。用心に用心してゐた吉良家の人々はいつのまにか、自分の家の圖が赤穗の人々の手に入つてゐるのにおどろくであらう。其處には上野介の居間と、その子の左兵衞の室までちやんとかいてあつた。
『主稅、よくこの圖面を見ておくといゝ。之をつくる爲に、何十人の人が一年以上の時間を費やしたと思ふと、この圖面も貴いものだ。出入りの商人にばけたり、下女下男を買收したり、それ

も相手方にわからないやうにしなければならないのだから、骨が折れたわけだ。それだけ之が出來た時、どんなに皆喜んだらう。私にはこの圖面が目をつむつてもはつきりわかる。實地を見てゐるやうな氣になる。お前もよく覺えておく方がいゝ。』

『はい。』

『もうまもないことだ。お前は嬉しいか。』

『はい。』

『お前は冷光院樣には隨分愛されてゐた。いつも私が御前に出ると、わしが短刀をやつたあの主稅はさぞ大きくなつたらうとか、丈夫にしてゐるかと、おつしやつて下さつた。大勢の人をお使ひになる御身分でありながら、お前のことはへんに心にかけられてゐた。勿體ない程だつた。』

『いつも私は冷光院樣のことを思ひ出してをります。お目通りすると、おゝ主稅か、大きくなつたなーとおつしやつて下さいました。』

『あんなにお氣のお優しい御方はなかつた。』

主稅はとう／＼泣きじやくりした。

死んでもいゝその決心が、ありくと父の良雄に感じられた。

『それならもう休むといゝ。』良雄はさう云つて繪圖をおいたまゝ自分の室に歸つた。主税は繪圖を見つめてゐたが、淚が出て來て繪圖がぼんやりして居た。

『冷光院樣、御讐を必ず討つてお見せします。私は死ぬことなんかなんとも思つてをりません。』

主税は心でさう云つた。

七十三　復讐の計畫進む

だが良雄はさう單純にはゆかなかつた。彼も室に入つて暫くはぼんやりしてゐた。すぐ寐る氣にはなれなかつた。もうぢき讐を討つのだと思つたが、彼はそのことを何んだか本當のやうな氣にはなれなかつた。

彼は何かの力にひかれて復讐の計畫をどしくすゝめてはゐたが、それは自分から好んでしたのか。それがいゝことか、わるいことか、嬉しいことか、悲しいことか、それさへ考へるとわからなくなつた。彼は無理に吉良を憎んだ。そして無理に亡君の切腹された時の氣持を思ひ浮べた。

だがそれさへ今の彼には夢のやうな氣がした。彼はもつと澄み切つた氣持でゐた。すべてが無のやうに思へた。だが彼は何かの力にひきつけられて自分のしなければならないことは、ちやん〳〵とやつて居た。

彼は復讐のことも死のことも忘れて居たかつた。夜は益々冷え冷えして來た。だが彼はつと起きて、雨戸をあけて見た。滿月に近い月は、凍るやうにあたりを照してゐた。彼は寒さにもおどろかず、庭下駄をはいて、庭に出た。そして空を見上げた。

『やるぞ。』

彼は心の内で云つた。だが何をやるのか。それを考へる氣にはなれなかつた。

『吉良の首は必ずとつてやる。』

彼はわざとさう云つて見た。

だが彼は興奮しては來なかつた。

『冷光院樣、讐は必ず討つて見せます。』

彼は自分を興奮させたがつて來た。だが彼には今萬事が空に見えた。生きてゐることすら。

彼は其處で故鄕において來た妻子、京都に居た處の生活、お輕のことなぞ思ひ浮べた。そして又月を見るのだつた。皆もこの月を見てゐるか知らん。

彼はいつ迄も生きてゐたい氣がして來た。彼は急いで自分の室に歸つた。

そして生きてゐたい氣持に打ちかつた。彼はどうしても死ななければならない自分を不幸だと許りは思つてゐなかつた。

『讐を討つても生きられるかも知れない。』

そんな氣がふとした。すると自分の內に何か喜んでゐるものがあることに氣がついた。

『そんなことはない。』

彼はさう自分に云つて聞かせた。そして寢床に入つた。しかしますます頭が冴えてくるのだつた。

だがいつのまにか、うとうとした。

七十四　大石の夢

その晩彼はこんな夢を見た。
大石は町をぶらり〳〵と歩いてゐた。
『大石！』とよぶものがある。彼はその聲を聞いた時、彼には珍らしくどきつとした。
そしてふりかへると彼の知らない男が立つてゐた。しかしその男を見た時、彼は何故か、奴だなと思つた。それは半年程前に彼に一つの手紙をよこした男だつた。その手紙には彼の放蕩三昧に入つて讐をうつ氣がなくなつてゐるのを賞めてあつた。大石はそれを見て、笑つた、輕蔑した。だが、其處にかゝれてゐる、『男子には復讐以上の仕事がある。吉良上野介と命のやりとりする以上の仕事があつていゝはずだ。』と云ふ意味のことがかゝれてゐたのは、へんに忘れることが出來なかつた。果してその男だつた。
『大石、貴樣は讐を討つ氣だな。』
大石はじろつとその男の目を見たが、彼はこの男になら本心を云つてもいゝ氣がした。
『さうだ。』
『讐を討てば生命がないぞ。』

『そんなことは知つてゐる。』
『死ねば萬事が終りなのだ。死んでまでしなければならないことがあるのか。生きてゐる方がいいとは思はないか。』
『私はもう生きる氣はしない。私はもう思ひ殘すことはない。』
『自分のしたいことをしたからか。』
『生きのこれば恥多しだ。私にはすることが一つ殘つてゐるだけだ。』
『讐をうつことか。』
『さうだ。そして靜かに死ぬことだ。靜かに死ぬと云ふことは、私のして見たい唯一のことだ。』
『死にたいのか。』
『生きたいが、それだけ靜かに死んで見たい。』
『靜かに死ねるか。』
『死ねるつもりだ。』
『吉良をお前は本當に憎んでゐるのか。』

『憎んでゐる。』
『本當に殺したいか。』
『殺したい。』
『それ迄、本當に憎んでゐるのか。』
大石はその男の目が自分の心の内を見ぬいてゐるやうに思へた。彼は嘘がつけなかつた。
『吉良が憎いと云ふよりは、幕府が赤穗の人間を侮辱したことが腹が立つてゐるのかも知れない。赤穗の浪人なんか何にも出來ない。意氣地なしの集りだ。かう思はれてゐるのが腹が立つたのかも知れない。』
『笑つてすませばいゝぢやないか。』
『一人なら笑つてすませたかも知れない。』
『お前の本心は矢張り生きたいのだな。それなら生きればいゝぢやないか。』
『もう何と云はれても生きない。のりかけた舟だ。どんづまりまで進まなければならない。そして俺は靜かに死んでゆくのだ。それを自分の不幸だとは思はず、氣持のいゝことと思つてゐる。』

『さうか。もうとめてもとまるまい。それなら、やるのもいゝだらう。不幸な男だ。』
『不幸ではない。』
『生きたくも生きられないのは不幸ではないのか。』
『するだけのことをして、靜かに死んでゆく、不幸ぢやない。赤穗の武士に骨があることを示してやる。不幸だとは思はない。』
『空だ。』
『どつちにしろ空だ。やりたいことはやる方が氣持がいゝ。今まで來て、やめるやうなことは出來ない。運命は俺をつれてゆきたい處につれてゆくだらう。』
『それなら靜かに死ね。』
『死ぬ。』
その男は突然、笑つた。大石は目をさました。びつしより汗をかいてゐた。
『やつけてやる。私は何と云はれても、冷光院樣を愛してゐる。吉良を生かしてはおけないのだ。笑ふ者は笑へ、私は名譽のためにこのことをするのではない。男の意地を押し通すのだ。赤

穂武士が吉良の人々より賢いことを示してやる許りだ。やらないではをさまらない。』彼はさう思つた。

七十五　いよ〳〵十四日

翌日主税は父に圖面を返しに來た。

『覺えたか。』

『はい。』

『近い内にいよ〳〵讐をうつわけだ。お前は大石家の名譽の爲に働いてくれ。私の一族は臆病ものが多いのを私は恥かしく思つてゐる。せめてお前と私とは立派にふるまつて見せてやらう。私もどうやら力が内に滿ちて來た。どうしても讐をうたないではゐられない力がわいて來た。何んだか時が近づいてくるのが愉快になつて來た。』

この時、小野寺十内が外から聲をかけた。

『今おさしつかへありませんか。』

『ない。』五十九の小野寺は相變らずおちついたものごしで入つて來た。
『大夫樣、吉報で御ざいます。』
『わかつたのか。』
『はい。』
『いつだ。』
『十四日ださうでございます。』
『今度はたしかだらうね。』
『たしかで御ざいます。大高源五が參りましたが通しませうか。』
『通してくれ。』
大高源五は町人姿で入つて來て、畏つて挨拶した。
『十四日ださうだね。吉良家の年末の茶會は。』
『はい。』
『今度はたしかだらうね。』

『たしかで御ざいます。四方菴がその日吉良家によばれてをります。四方菴から聞いたのでございますから。』
『さうか。それならいよ〳〵十四日の晩にしようか。』
『それがよろしうございませう。』小野寺は云つた。
『今日は十二月の七日だからあと七日あるわけだな。』
『左樣でございます。』
『七日あれば十分だね。』
『十分すぎます。』
『それならきめよう、早速、吉田と原を呼ぶやうに云つてくれ。』
『はい。』
小野寺と大高が去つたあと、
主稅は云つた。
『いよ〳〵十四日でございますね。』

『さうだ。うれしいか。』
『はい。』

七十六　とう〳〵時が來た

それからまもなく、大石良雄の室には吉田、原、小野寺が集つて居た。四人は何かこそ〳〵と話して居た。四人は皆、嚴肅な顏をしてゐた。一番喜んでゐるのが原だつた。彼はその日のくるのを待ちかねてゐた。

あと三人は冷靜にしてゐた。さすがにいく分興奮はしてゐたが、顏色にはあらはさなかつた。喜ぶにしてはもつと嚴肅な氣持だつたかも知れない。

『それでは吉田一つ又趣意書をかいてもらひたいね。』

『一つ今度大夫御自身おかきになつたらどうです。』

『端唄なら私の方がうまいかも知れないが。』

良雄はから〳〵と笑つた。皆も負けずに笑つた。それから室の空氣が快活になつた。

原は皆に早く知らせて、皆をよろこばしたい。堀部安兵衛なぞをどり上つて喜ぶだらうと云つた。

『皆に知らせるのは少し早いが、しかし信用のおける人々だから、知らせていゝだらう。』

大石はさう云つた。

『それでは私は一足おさきに失禮いたします。』

原はさう云つて、急いで出て行つた。彼はうれしくつて仕方がなかつた。

何かつぶやくやうに唄ひながら彼は往來をとぶやうに歩いて居た。

その日の内に義士達は十四日にいよ〳〵吉良家に夜討をかけることを皆、知つてしまつた。人々はいよ〳〵時が來たことを知つた。

喜び勇んだ。少くもさう云ふ風をした。たゞ二三の人は顏色が青ざめた。

とう〳〵來たのか。

七十七　大石の手紙

既に日がきまり、手はずがきまつた。かうなるとかへつて嵐の前の靜けさのやうに大石良雄はおちついた日がつゞいた。彼は本を讀んでゐる日が多かつた。今迄、わからなかつたことがはつきりしてくるやうに覺えた。

『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』

そんな言葉も時々は思ひ出して、今迄よりは本當だと思つたりした。日は用捨なくたつてゆく、とめる力は誰もない。十四日は一日々々近づいてくる。あと二日にせまつて來た。彼はその夜、長い長い手紙をかいた。

死後のことがいろ〳〵思はれるのだつた。

人間は死後のことが氣になる動物である。死んだあとはどうなつてもいゝなぞとは考へないやうに出來てゐる動物である。殊に優れた人間程死後のことを考へ、出來るだけ立派に死にたく思ふものだ。

大石良雄もおちついて死のことを考へれば考へる程死後のことが思はれるのだつた。彼は勇ましく死にたいとは思はなかつた。靜かに心殘りなく、生きてゐる間にするだけのことはして死に

たかつた。あとで思ひ殘すことがないやうに、あわてずに死にたかつた。それで京都をたつ時も、十分緻密にあと始末して來た。今や最後のあと始末をするつもりで彼は筆をとつてゐるのだ。死を前に見て彼は益々落ちつき頭の冴えてくる自分を省みて會心の笑を浮べた。

『家來左六、幸七に暇をつかはしさし登せ候間、一筆申し上げ候。極寒に候へど、皆樣御丈夫御くらしのことと存じ大慶に存じ候。

私京都にをり候節は何かとせはしく御無沙汰いたし候。既にお聞きのことと存じ候が、十月初京都をたち、父子とも無事に江戸につき、今日迄兩人とも無病にてくらしをり、誠に佛神の御加護と喜び居り候。京都にをり候節、公儀より私に附人之あり、一足も踏出すこともむづかしき由、慥なる筋より聞けりと岡本、糟谷等彼これ申し止め申し候ひしが、その時の用意をいたし旅出ち申し候ひしが、左樣のこと少しもなく、道中の關所滯りなく、少しの心がかりのこともなく江戸につき申し候。途中相談のため鎌倉に立ちより、五六日滯留、夫より川崎近處平門村と申す處に在宅いたし、其後石町へ借家いたし候。父子、十内、斧右衞門（潮田又之丞）、清助（近松勘六）、瀨左衞門（大石）、金助、半之丞、三村次郎左衞門、家來三人にて住居いたし、孫左

衞門、爲助は平門村に殘し置き候。同志のもの共、麹町に四軒、湊町、源助町、石町、本庄に二軒、都合十軒餘に五十人餘り、借家申し候、方々より浪人共追々あつまり、私共も參り候こととて、色々と噂之あり、御老中も御存じの旨に候得共、何の御かまひもなく、うち破り候までは、おかまひなきありさまにて、亡君のための忠死を感じられてのことかと存じ候、何のとどこほりもなく、安堵いたし居り候。折々上野介殿他行を承り、晝夜心をくだき、途中心がけ候へども、不仕合せにて出合ひ申さず、屋敷へも二三度間者を入れ見申し候處、變りもなく、是によつて近々打込み申す事に候。この上首尾よく兼ての本望を達したく願ひをり候。最早間もなきこと、其節はおひ〳〵いろ〳〵とお聞き下さることと存じ候。

『此度暇遣し候家來兩人事、こゝもと無人、相宿も多く候のに、晝夜骨を惜しまず勤めくれ、過分、不便に存じ申し候。急に事起り候と存じ暇遣し候が、役にも立ち申すべきものにて候、若し相應の思召も御座候節は御言葉ぞへ願ひたく、おたのみ申し上げ候。

この度申し合せ候者共、四十八人にて、かやうに志を合せ申し候儀も、冷光院殿此上の御外聞と存ずる事に候。死後御見分のために遣し置き候、口上書一通寫し差上げ候。何れも忠信の

者共に候聞、御ゐからをもなされ下さるべく候。其場に生き殘り候者ども、定めて引き出され御尋ね御仕置にもなることと存じ候が、元より覺悟のことにて、御心やすく候

『將又拙者妻事、考へることあり京より離別仕り、緣者方へ返し申し候。倅、娘儀いか樣にまかり成り候とも夫迄の事に候。併しこちらに參り承り候へば、次男吉之進事出家に成り、何方へか遣し候由に候。私の知らざる事にて候、以後萬々一別條なく世間に罷り成り候はゞ、吉之進事は一度武名の家をおこし候やうにいたしたきことに候へば、少し心にかゝり申し候。此の儀も私のかまふべき事では之なく候へども、人情凡夫の私に候へば、御恥かしきことに候。さりながら一事の邪魔になり候樣なこと、毛頭ござなく候へば御氣遣ひ下さるまじく候。

『良雪樣、去年以來の御物語り、忘れ申さず、日々思ひ出し、この度の當然の覺悟出來忝き次第に御座候。日ごろ御心やすく御つきあひいたせし皆樣のこと故、別してお名殘り惜しく、お暇かた〴〵かくの如くに御座候。死人に口なし、死後いろ〳〵の批判とり〴〵之あるべくと察し申し候』

大石良雄の頭は益々冴えてくるのであつた。

男子一生の最後の言葉を彼は物靜かに書いてゐる。涙も出さない。彼はつゞけて十内の妻にあてゝも手紙を書いた。

『家來左六、幸七、いとま遣し、のぼせ候まゝ、一筆申入候、けしからぬ寒さとなり申候。爰元十内殿一だんと御無事、拙者相宿にて晝夜御心易く申だんじ、大慶にぞんじ候、少しもわづらはしきこといよ〳〵御そくさいのよし、をり〳〵十内殿御便りに承り、ちん重にぞんじ候。御座なく候まゝ、御氣づかひなさるまじく候。噂々かくべつの御あんじと、御心ていのほどおしはかり、御噂のみ申事にて候。こゝもとへ下り着き候て、存じの外永滯留にてこまり申候、しかしながらこの方のしゆび、一だんとよろしく、かねてそこもとにてとなへしとは、かくべつちがひ大慶申事に御座候。やがてのうち、しゆびよくうち明申すべしと、先は今までのしゆびども、のこる所なく候まゝ、御あんじ下されまじく候。もはや間も之あるまじく……』

夜は深々とふけていつた。

英雄閑日月あり、大石は自分がおちついてゐることに、一種の誇りさへ感じた。彼はもう敵をのみ、死神をのんでかゝつてゐた。

『家來孫左衛門事も、去る六日立のき候。元來かろきものにて候へども、われら外聞ともぞんじ、よろこび申候ところ、不屆至極にぞんじ候。しかし高きも賤しきもめづらしからぬは、この一事にて候。

『幸右衛門殿、源五殿、その外とも御無事、隨分すくやかなる事どもに候まゝ、御氣遣あるまじく候。次第におしつめ候へども、いつ年の暮とも、來る春とも、さらにわきまへず、うか〳〵と年月を送り、この程は鳥おひ抔參り候てこそ、年のくれとはおどろきまゐらせ候。さてもをかしきわれ〳〵の身のさまと、十内殿と申わらひ候。在京の內はたび〳〵參り、御目に懸り、御ちそうに成候。何も〳〵昔がたり、夢のこゝ地にぞんじ候。よほどゐなじみ候ゆゑか、ともすれば、都のことのみ申出し、なつかしく、のこり多く、うち寄り一笑申す事に御座候。此度いとま遣し候兩人のものども、むかしのおにわう、どう三郎(二人は曾我五郎、十郎の家來)同事におもはれ、笑申事に候。兩人事この節つゝがなく、晝夜身を惜しまず相勤め候、心ざしのほど淺からず、過分の事共に候……』

大石の目にちらつと涙が浮んだ。

七十八　左六、幸七

翌日、十三日の朝、左六、幸七は主人の前に呼ばれた。彼等は誰から聞くともなく、明十四日の晩の夜討のことを知つてゐた。

だから主人から呼ばれると、何か自分達にも明日のことでたのまれるのだらうと思つた。

彼等は勇んで主人の前に出た。

主人は例によつてにこやかに二人の挨拶を受けた。しかし用を云ひつける前に、いつもより主人はなほ嚴肅な顔になつた。

『兩人には氣の毒だが、之からすぐ京へ登つてもらひたい。そしてこの書狀をとゞけてもらひたい。』

二人は思つたのとまるでちがつた命が下つたので、二人は顔を見合せたが、急に悲しくなつて泣き出した。二人は之が主人達と生き別れになることを知つてゐたから。

『この書狀は大事な書狀だから是非二人に行つてもらひたいのだ。お前達の心はわかつてゐるが、

この用を果してもらひたい。』

二人は反對したかつたが、反對する理由はなかつた。泣くより他仕方がなかつた。

『之はつまらないものだが二人にあげるからとつてもらひたい。それから返事はもらつて歸つてくるには及ばない。今後のことはこの書狀の內にかいてあるから、向ふでいゝやうに身の始末をつけたらいゝだらう。ながい間實に御苦勞だつた。よく働いてくれたことは、この大石くらの助が感謝してゐる。お前達のつらい氣持はよくわかつてゐる。私もお前達と別れるのは、その昔五郎十郎が、鬼王、どう三郎と別れた時のことを思ひ出させる程だ。だが之も浮世の義理だ。最後の奉公と思つて、この大任をつくしてくれ、お前達が使ひに立つてくれゝば私も安心して死ねると云ふものだ。』

二人はわつと泣き出した。

大石もさすがに淚ぐんだ。同席してゐた主稅も泣いてゐた。

七十九　今日一日

前夜大石がけしからぬ寒さとかいたが、二人がいよ〳〵旅立つ頃には雪になつた。二人は雪のなかを泣く泣く立つていつた。見送る人々も涙ぐんだ。

義士達は今日一日と思ふと、名殘が惜まれた。或者はわざと雪見に出かけて、酒をのんだりした。又方々で集つて、人に氣づかれないやうに氣焔をあげてゐる仲間もあつた。又靜かに本をよんだり、辭世の句を考へたり、手紙をかいたりするものもあつた。だが皆ひとしく武器の手入れだけは忘れなかつた。

そして打ち死にした時見ともなくないやうに、下着の新しいのを用意してないものは、用意をした。

大石は以前から用意がしてあるので、別に普段と變らなかつた。人々はその落ちつきはらつた様子を見て、この男は何處まで太腹なのかわからないと思つた。しかし大石良雄に云はすと、頭がぼんやりしてゐたのだと云ふかも知れない。彼はへんに呑氣なおちついた氣持でゐた。だが時間がたつに従つて、そして日がくれてくるに従つて、彼はへんに物悲しくなつて來た。ふりしきる雪を見ては京都のことを思ひ出した。あの時は面白かつた。皆どうしてゐるだらう。相變らず

たのしくくらしてゐるのだらう。呑氣な人々よ、だがその生活にも苦しみがあることを彼は知つてゐたが、今は樂しいことだけ思ひ出され、なつかしい氣がした。それから實家に歸してある妻や子のことも考へた。吉之進が出家する？　しかし私の手紙で、出家しないでもすむであらう。そして私の子だと云ふので、そして主税の弟と云ふので、武家として出世する時もあるだらう。そんなこともちらつと思つた。

萬事いゝやうにいつてくれ。私はなすべきことだけをする。

この時、

『雪が隨分ふりますね。』

と云つて主税がやつて來た。

『降るね。』

『あすの晩はどうでせうね。』

『こんなに降ればやむだらう。』

『皆、氣にしてゐます。』

『どつちだつて同じことだよ。少し厄介なだけだ。』
『私は反つて面白いと思ふのですよ。』
『たゞ仕事がはかどらないと困る。朝になる迄に片をつけなければならない。それだけだ。』
『お父さん、おそばにゐても御邪魔ではありませんか。』
『邪魔なものか。』
『私はさつきからお母さんのことがつい思ひ出されて困つてゐるのです。』
『私も今思ひ出してゐた。』
『お父さんも思つてゐて下さつたのですか。』
『さうだよ。この雪があつちでも降つてゐるか知らんとふと思つたのだ。』
『お母さんも私達のことを思つていらつしやるでせうね。』
『きつと、吉報のくるのを待つてゐるよ。』
その時は二人の生きてゐない時であらう。ちらつと二人はさう思つた。
『怖ろしいか。』

『いゝえ。』

『明日は立派に戰ふのだよ。』

『はい。お父さん見ていたゞきたいものがあるのです。』

『なんだ。』

『今持つて來ます。』

父よりも背が高いかと思はれるほど成人してゐるが、さすがに十五の少年は少年らしい心と身體をもつてゐる。身輕にかけていつた。まもなく刀を持つてやつて來た。

『刀をといでもらつたのですが、之でよろしいかお父さんに見ていたゞきたいのです。』

『どれお見せ。』

父は子から刀をうけとると、その刀を輕く押し戴き、拔いて見た。

『よくとげてゐる。之で手柄を立てなければ、お前の恥だよ。』

刀を鞘にをさめて子に渡した。

『之を見てゐると、元氣になつて來ます。』子はさう云つた。

『私達は生命はなげ出してゐるのだ。もう恐いものはない。』
『本當ですね。お父さん。』
十五の我が子の口から、さう云ふ言葉をきいた時、さすがの大石も身ぶるひする程、何か寒いものが身體をつきぬけていつた。
しかし武士である彼はおちついて、涙さへ見せなかつた。

八十　十四日の朝

とう〳〵十四日の朝は來た。地上は雪におほはれてゐた。だが雪はやんでゐた。義士達は今晩のうまくゆくやうに祈らないわけにはゆかなかつた。いつもより皆、丁寧に身體を清めた。そして顏をそり、髮を丁寧に結つた。結婚でもする朝のやうな氣持にならうとした。一生一代の身仕度をした。そしてその日十四日は冷光院樣の偶然忌日なので、義士の內代表的な十何人かゞ泉岳寺へ集つた。
皆、顏をあはせると、いつもより元氣さうにしてゐた。皆、今晩のことが口に出したいのでむ

ずーしてゐた。中でも堀部彌兵衛はお得意だつた。逢ふ人ごとに、今朝方見た夢の話をするのだつた。大石良雄もすぐ逢ふとその話をきかされた。

『大夫殿、今朝方、いゝ夢を見ました。夢のなかで思はずかう云ふ句が浮んだのです。

雪霽れて心に協ふ朝哉

どうでございます。そして朝起きますと、天氣になつてをりましたのです。いかゞなものでせう。』

『結構な句と思ひますね。』

大石は微笑しながらさう云つた。

皆そろつたので、墓前にお參りした。皆の禮拜はいつもより長く、熱心だつた。淺野內匠頭の靈があれば、感動されたであらう。皆が皆、その夜に復讐することを誓つたと同時に、加護のあることを祈つた。皆泣いてゐた。

雪のふりつもる中を義士達が一心に祈つてゐる。その光景は悲壯なものであつた。彼等の姿を見て大石良雄はたのもしく思ひ、又彼等と一緒なら死んでもいゝと思つた。かう思つたのは大石

許りではなかつた。

参拝がすんでも義士達は去らうとはしなかつた。彼等は去るに忍びないやうだつた。だが、ぐづ〳〵してゐるわけにもゆかない。

彼等は泉岳寺の一室に引きあげた。そして方丈に一室を借りうけて、皆で食事をしたい由を申し込んだ。彼等は亡主の忌日に今日あつまつてお参りして、やがて皆四方に散々になるので、別れを惜しみたいと云ふのが、口實だつた。そして白銀三枚を包んで奉納した。

寺ではよろこんで承知した。かくて、彼等は今宵の作戰を心殘りなく相談することが出來たのである。

八十一　大石おもむろに云ふ

大石はおもむろに云ふのである。

『今宵兼てきめてある通り丑の上刻（午前二時）に三ケ處に集つてもらひたい。乃ち本隊に屬する人々は本庄林町の堀部安兵衛の宅に、前衛に屬する人々は本庄三つ目の杉野十平次の宅に、

前哨にあたる人々は本庄二つ目相生町の神崎與五郎、前原伊助のやつてゐる米屋に集つてもらひたい。起請文や心得書にくはしくかいてあるので、別に云ふ必要のないことだが、目ざすは吉良上野介殿たゞ一人、他の人にかまひすぎて時間をとられないやうにすることが大事だ。時間は用捨なくたつから、そして手剛い敵にあつたら、大勢で追取りかこんでやつてしまふ事が大事だ。皆一心一體、互に助けあひ、役の高下、功の輕重はないのは勿論の事だ。三人一組となつて、邪魔になるものはすべてやつておしまひなさい。だが逃げるものや、女子供は殺す必要のないのは云ふ迄もない事だ。室内の戰は若手にまかせ、老功の人は室外にあつて、口々をかため、上野介殿が逃げ出さないやうに用心することが大事だ。室内はくらく敵味方がわからないといけないから、あひ言葉を用ゐることにする。「山か」と云へば「川」と答へることにする。そして山と云つて、すぐ川と云へないものはすぐ殺してもいゝことにする。この由皆にお傳へ下さい。集るのは丑の上刻です。』

『畏まりました。』

一同謹んで承諾した。

『手ぬかりはないと思ふが、用心に用心をして、少しの手ぬかりもないやうにしてほしい。そして私は表の門に向ひ、裏門の方は、皆様のおすゝめで主稅が向ひますが、吉田殿、小野寺殿に御後見をおたのみいたします。』

大石の云ふことには元より誰も反對するものはなかつた。

『今宵の勝利は疑ひないことだが、しかし油斷大敵、小敵をあなどらずとは兵家にとつては大事ないましめだ。私もその點、出來るだけ注意するが、皆様もその點、よく注意して戴きたい。蟻の穴程のすきまがあつても、大事を仕損じることがあるから、その點注意の上にも注意してほしい。斬り込むものは元より大事な役目で手ぬかりがあつてはならないが、外にゐて、逃げてくるものを見はりするものも、實に大事な仕事だから、そのつもりで、守る場所を忘れないやうにしてほしい。一度しくじれば、取りかへしはつかない。今迄の苦心は水の泡になるのです。若い者が居、年とつた方がゐて下さることが、どの位、我等の强味かわからない。皆たすけあつて、働けば、袋のなかの鼠は逃しやうがない。注意に注意してほしい。』

大石はさう云つて、一座を見廻した。

八十二　大石等彌兵衞の宅に集る

時はたつた。夜は來た。義士達は用意を怠らずにした。死ぬ用意をして、その上に何氣ない顏をしてゐた。そのやうに武裝された着物の上には、何氣ない着物が着られた。

町人、坊主、浪人、三々、五々と、眞夜中に指定された所に集つてくる。集つて來て着物を着かへれば皆、同じ裝束をする事になる。同じ目的を持つやうに。心を一つにしてゐるやうに。

彼等は皆後始末をちやんとして來た。數日前から本國へ歸ると云ふので、拂ふものは拂つて家具類も處分して、いつたつてもいゝやうに用意してゐた。不義理なことは名を惜しむ彼等には出來なかつた。いかにも、用意がいゝのは、親玉の大石に似てゐた。それが又武士道でもあつた。死に花を咲せる。それが彼等の願ひでもあつた。あわてた眞似はしたくなかつた。死を恐れて心がうつろになつたとは思はれたくなかつた。手ぬかりがないやうに注意した。

それなら彼等は死ぬのが平氣だつたのか、さうではない。

村松喜兵衞のやうな男は六十一だつたが、討入りの兜頭巾に、辭世としてから云ふ歌をかいて、

得意になつてゐた。

『命にも易へぬ一つを失はゞ、逃げかくれても此をのがれん』

彼等とて死にたくはないのだ。だが死なねばならぬと思つてゐる。

彼等は本國へ歸ると皆に云つてゐる。それは嘘ではない、ただその本國は生れぬ前の本國だけである。其處には誰もが歸らねばならぬが、歸りたがらない本國だ。

それが今夜にせまつてゐる。しかも彼等は勇んで出かけるのである。そしてそれは嘘ではない。しかし勇んでゐないものも、いくらか居たにちがひない。

大石良雄は自分の心がます／＼落ちついてくるのを覺えた。落ちつきすぎてゐるやうにさへ思へた。だがさすがに仲間の親玉だけあつて、彼は臆してはゐなかつた。反つて何となく愉快でさへあつた。人々が驚く様なぞが目に見えて來た。赤穗の武士にも、血があり骨がある。

だが彼は若い人々のやうに元氣にはなれなかつた。同志の内で一番齢上は云ふ迄もなく堀部彌兵衛金丸で今年七十六、大石良雄より三十二の齢上である。その次が間喜兵衛の六十八、それから吉田の六十二である。そして一番若いのは之も云ふ迄もなく大石主税であつて、十五である。

その上が矢頭右衞門七の十七である。
二十三十の血氣盛が一番多いのである。
大石は四十四だが、この頃の老成ぶりでは時に五十位に見えた。だが時々はへんに若くもなつた。彼は眞面目な時も多かつたが、眞面目一方の男ではなかつた。彼は時々へんに子供らしくさへなつた。
だが今日はさすがに、一黨の親玉の貫目を見せてゐた。
彼は人々を出してから、小野寺十内と二人少しあとに殘つて、そして杯のやりとりをし、少しおちついた氣分になつてから、彼等は駕をやとつて、石町の家を出た。まだ安兵衞の處にゆくのは早いので、先づ彌兵衞の處に出かけることにした。彌兵衞の家は安兵衞の家に近かつた。
二人がたづねた時は、彌兵衞の家には五六人の老人連が集つてゐた。彼等は大石がくるのを待つてゐたので、二人がくるとあわてゝ出迎へた。そして大石はまうけられた正面の座についた。
酒もりはまもなく始められた。
彌兵衞は嬉しくつて仕方がなかつた。

八十三　大石安兵衞等の處にゆく

尊敬する人間が來てくれ、愉快さうに喜んで打ちとけてくれる。それは嬉しいことにちがひなかつた。殊に之から討ち入りと云ふ大事の時に、わざ〳〵立ちよつて一緒に飯を食つてくれる。そして一緒に酒をのむ。

彌兵衞は酒ののめない男だつたが、この時は酒がのめたらと思つた。大石は愉快さうに皆から杯をもらつて、飲んだ。皆も大石から酒をついでもらつて心地よささうにのんだ。酒をのまぬ彌兵衞はそれを羨やましく思つたが、しかし、何となく嬉しく有りがたい氣がした。皆愉快さうに話してゐる。誰も生死のことを忘れてゐるやうに見えた。時間はその間も用捨なくたつてゆく。人々は時間のたつのが待ち遠であつた。だが早くたつやうにも思はれた。

子の刻になつた時、大石は、

『それでは私は御先に行つてゐます。安兵衞殿の家で打ちあはせがありますから、後刻皆樣とは相生町の神崎の處でお逢ひしませう。』

と云つた。そして小野寺と林町の安兵衛の處に出かけた。其處には若手連の元氣者が十數名待つてゐた。彼等は仲間の內での最も功名心に燃えた、思ひ切つたことのやりたい連中計りだつた。だがさすがに大石が見えると、皆靜かになつた。大石は落ちつきはらつて、十內とまうけられてゐた席についた。そしてにつこりしながら云つた。

『とう／＼君達が待ちに待つた時が來たね。さぞうれしいだらう。』

『はい。』二三の人が謹んでうれしさうに答へた。

『今日は云ふ迄もなく君達に主になつて働いてもらはなければならない。手ぬかりはないだらうね。』

『ありません。』

『それで私達も安心した。』

大石はうれしさうに皆に話しかけた。彼は一人のこらずにいゝ感じを持つてゐるやうに見えた。彼に親しく話しかけられたものは皆、嬉しさうだつた。彼は其處に、暫くおちついて、皆と冗談なぞも云つてゐたが、やがて、十內に『それでは一つ、杉野の處へ行つて見よう。』と云つた。

十内は『はい。』と云つた。

その時分あとに殘つた堀部彌兵衛は、急に眠くなつたと云つて、ぐう〳〵眠てゐた。

八十四　大石更に杉野の處にゆく

杉野の處には一番若い、二十代の連中が集つてゐた。彼等は純情そのものであつた。彼等は萬事を年長者に任せて安心してゐた。たゞ命令される通り行動すればいゝと思つてゐた。彼等は大石を父のやうに思ひなついてゐた。正直云つて、彼等は堀部安兵衛達を尊敬してはゐたが、恐れてゐた。そして年寄り連になついてゐた。元より例外の人もあつたが大體さうだつた。そして大石も、正直に云ふと、この連中の方が、氣樂で又可愛いかつた。安兵衛の連中はやゝもすると大石を腰ぬけ呼はりをして恐れなかつたが、この連中は、大石を心から尊敬し、又たよつてゐた。彼等は大石の姿の見えるのを心待ちしてゐた。今大石の姿が見えると、彼等は安心し、或者は泣きさうにさへなつた。そして心から元氣になれるのだつた。

大石もこゝに來ると、すつかり氣が樂になり、のんびりした。

『どうだ少しはこはいだらう。』そんな冗談さへ云つた。
『いゝえ、ちつとも。』
『顏色がよくないぞ。』
『そんなことはないでしよ。』
眞面目になつてさう云ふものもあつた。
『顏をよく見せろ、感心〻〻、顏色はかはつてゐない。たゞ少し武者ぶるひしてゐるだけだ。ははゝゝ。』
と聲高に笑つた。大石は愉快さうだつた。
皆は大石の笑ひ聲をきくと急に明るくなつたやうな氣になつた。
主税も其處に居た。父は主税に、
『どうだ。元氣かね。』と云つた。
『えゝ。』子は微笑して見せた。
その內に時間が來た。

『それなら行かうか。』
大石は云つた。

八十五　義士集る

神崎與五郎、前原伊助の店には今や四十七人の義士が集つてゐた。彼等はこゝで着物を着かへた。皆、一生一代の晴着に着かへた。勿論それは武裝ではあつたが、皆、身分相當に、或は身分不相當にも、しやれてゐた。
若者達は多く緋紗綾の褌をしめ、老人は白紗綾の褌をした。そして白無垢、黄無垢、淺葱無垢の羽二重の下着を着た。彼等は着物を着かへながら、死の覺悟を強くした。
彼等は今日のためにどんなに用意をして居たか。赤穗の武士の名譽をこの一擧にかゝげてゐた。死に花を咲せたかつた。武士の覺悟を見せたかつた。
彼等は長い間、意氣地なしに思はれてゐた。今や、思ひ知らす時が來たのだ。
人々は着物を着かへるに從つて決心が固つてゐた。

下着の上には、繻子、繻珍、或は緞子包の裏甲を重ね、腰から下には膝甲をつけ、兩臂には臂鎧をつけ、裏甲の上には、紅色、或は桃色の絹裏をした定紋着の黒小袖を着、もゝ引には鎖を入れ、浮紋なぞのある伊賀袴をはき、帶の上には鎖入りの帶をしめ、脛當をし、陣草鞋をはいたり、陣足袋をはき、そして最後に黒羅紗の羽織を着、夜目にもわかるやうに、兩襟と兩袖の端に白布を着けた。そして白布の端を後にまはして、『淺野内匠頭家來何某』とかいた。

そして鎖入りの縮緬の襷をかけ、黒の革に白革の筋を竪に入れた兜頭巾を、銘々好みの緒で結ひつけ、その中には香がたきこめられてゐた。

之等はいかにも大石好みであるが、人々はその姿になると、一層勇氣と決心がわくのであつた。殊に、刀は吟味されてゐた。すべての人は身分不相當によき刀が渡されてゐた。勇氣が出ないわけにはゆかなかつた。

だが何んだか、身ぶるひがして來て困つたものも、二三人ではなかつた。

大石でさへ、胸がやゝもするとわく／＼して來さうになつた。

すべての人が興奮するのは尤もである。皆自分の名をかくだけでは滿足しない、何ものかを感

じた。そして俳句の出來るものは俳句を、和歌の出來るものは和歌を、最後を着かざつた着物にかきつけたくなるのであつた。

人情と云ふものは面白いものである。人は死しても名を殘したいものと見える。少くも不名譽な死に方はしたくないものだ。

大石は自分の小刀に、

『萬山不重君恩重　一髪不輕我命輕』

と黒檀襴に金字で題刻してゐる刀を選んでさしてゐた。

吉田忠左衞門は、

『君がため思ひぞつもる白雪を散すは今朝の嶺の松風』と云ふ辭世をつくり。

小野寺は、

袖じるしの上に、

『忘れめや百に餘れる年を歷て、事へし世々の君がなさけを』とかき、

六十八の間喜兵衞は短槍を持つて來たが、その柄には、

『都鳥、去來言とはん武士の恥ある世とは知るや知らずや』

とかいてあつた。

八十六　吉良家に向ふ

その内に寅の刻になつた。今の四時である。夜討の時間が來たのである。人々は神崎與五郎を先頭として『淺野内匠頭家來口上書』と文函に題した宣言書を長竿に結ひつけて持つた者が、そのあとにつぎ、あとは夜討の武器を銘々が持つて、之に從つた。

夜討の武器も至れり、つくせりであつた。

一年以上苦心に苦心をしたのだ。すべての人の頭がこの一擧に向けられてゐたのだ。手ぬかりがあつては恥かしい話である。

槍は九尺に切られてゐた、家のなかでつかふので。槍をつかふ人は十二人であつた。弓は四張り、その内の半分は半弓だつた。長刀は二振、鉞二つ、大槌六つ、竹梯子二つ、大鋸二つ、源翁、木横杆、鐵横杆、鐵槌、各〻二つづつ。鎹六十本、取鈎十餘筋、小笛は全部の人が持つてゐ

た。その他龕燈、銅鑼一個づつ。等。
性急な連中には出來ない用意のよさである。夜の長い冬ではあつても、四時から夜あけ迄に仕事はしてしまはなければならない、用意が悪くつては仕方がない。
手ぬかりのない、落ちつき拂つた仕事ぶりこそ、大石達が得意な處である。
彼等は雪のつもつた道を、月の光りをうけて、なるべく月影を歩くやうにはしてゐたが、靜かに歩いてゆく、一歩々々まちがひなく吉良家に近づいてゆく。
吉良の邸に近づくと『止れ』と云ふ命令がかけられた。人々は立ち止つた。大石は靜かに、だが嚴かに云つた。
『いよ〳〵之から我等が今日まで苦心に苦心をかさねた、討入りをすることになつたが、豫ての約束に從ひ、こゝを最後として働いて戴きたい。萬が一敵を討ちもらすことがあれば、我等の武運はそれまでである。一時に邸に火をかけ、我等は猛火の裏に腹かき切つて、亡君に泉下にお目にかゝりお詫びしなければならない。皆その覺悟で手ぬかりなく、銘々の持場を守つて忠義の心を達して戴きたい。それならこゝから兩組にわかれ、東西の門より敵の邸に攻めこむことにし

よう。』

かくて大石良雄に從ふもの、主税や吉田に從ふもの、甲乙の二隊に別れ、大石良雄に從ふものは東の表門に向ひ、他は西の裏門に向つた。

八十七　いよ〳〵討入り

表門に廻つたものは、門を破さうとは思はなかつた。兼てからその爲に用意されてゐた二つの竹梯子は直に投げかけられ、大高源五、小野寺幸右衛門、吉田澤右衛門等先を爭そつて雪のつもつてゐる長屋の家根に登る。次いで若きも老いたるも我劣らじと登つてゆく、娘に起されて遲れずに來た、七十六の彌兵衛も竹梯子を登つてくる。氣許りせいてゐるが足はさすがに齡だけのことはあつたが、氣丈な彼はそれでも我慢して登つて來た。

氣早の若い連中はとびおりたが、もつと氣早な原と神崎は足をすべらして邸内へすべりおちた。彼等はひどくすりむいたり、身體をうつたりしたが、平氣さうな顔をしてゐた。誰も笑ふだけの餘裕はなかつた。

大石もつゞいて家根に登り、梯子がおきかへられると、又その梯子でおりた。本隊二十三人瞬く間におりたが、事實は二十三人の所が二十六人ゐて、その內の三人は別に武裝もしてゐなかつた。大石はそれに氣がつくと、誰かと思つて、月光ですかして見ると、同族で黨外の同志の大石三平と彌兵衞の處であつた彌兵衞の甥の九十郎と、佐藤條右衞門である。彼等は門外までついて來たら、歸る氣になれないで一緖にをどり込んで來たのである。大石はその志は嬉しくなくもなかつたが、大事の場合さう云ふ無鐵砲な野次馬にとび込まれて、痛くない腹をさぐられるのは不快であつた。其處で彼は言葉するどく、『大義名分に關係しますから、お引きとり下さい。』と云つた。三人はすご〳〵又家根を越えて出るより他仕方がなかつた。彼等は外で興奮して中の樣子を見てゐた。さう云ふ連中は彼等許りではなかつた。何處から聞きつけたか、門前には十數人の人が集つて、心配して中の樣子を見てゐた。さう云ふ人は段々ふえていつた。

八十八　遂に吉良の首をあげる

裏門に向つた連中は、裏門は壞しいゝことを前から知つてゐた。それで大槌などを用意してあ

つたのだ。彼等は大槌をふるつて門の扉をぶちこはして入つた。

この方は同勢二十四人であつた。

彼等はいよ〳〵吉良の家に入つた。もう退くことは出來ない。元より彼等は退かうとは思はない。一年半以上の苦心もこの一擧にあつたのだ。彼等はしくじればなほ死なければならない。彼等はどうあつても明方までに、それも、まもない、吉良の首をあげなければならない。時代や、社會が、それを要求してゐる。彼等は名を惜む人間達だ。どうしてもしくじるわけにはゆかない。

人々は先を爭そつて玄關の戶をぶちこはし、亂入してゆく。大石は原惣右衞門、間瀨久太夫と門の內に陣取つて、內外のかためをしてゐた。彼等は內の敵は仲間に任せればよかつた。外からくる敵、それは幕府からか、上杉からか、或は又何處からか、それはわからない。さわぎを聞きつけてどんな邪魔者が入つて來ないともかぎらない。その時に臨機應變の所置をとるためには、大石が其處にひかへてゐなければならない。

大石は其處で、原と、間瀨とを相手に、月下の雪中にたつて、勝負の有樣に耳を傾けてゐた、彼等は皆と共に打ち入りしたい、しかしそれでは萬一の時に、邪魔が入り、しくじらないとも限

らない。其處で彼等はぢつとしてゐなければならない。原は殊に、氣がはやり、屋敷のなかにとび込みたい衝動を受けたが、大石の顏を見ると、ゆきたいとは云へなかつた。大石もさすがに緊張してゐた。

玄關をぶちこはす音についで、戸障子のこはれる音、人々の叫び聲、忽ち起る、切りあひの刀の音、斷末魔の叫び、

『誰かやられたな。』

『敵でせう。』

『さうだらう。』

つゞいて起る、人々の叫び聲、刀の音、戸障子のこはれる音、女子供の悲鳴。勇士の吶鳴り聲。聞くものの心はをどらないわけにはゆかない。時々その騷ぎの間に、不氣味な沈默がはさまり、いやにしいんとして、身振ひでもしたくなるやうな、凄い瞬間もある。

戰ふよりも、ぢつとしてゐる方が凄い位だ。三人は聞き耳をたてながらぢつとしてゐる。寒さは殊に劇しく、月は冴え切つてゐるが、誰もそれを感じない。たゞ三人は小笛の聞えるのを今

か、今かと待つてゐる。それは吉良を發見した時の知らせだ。
だが中々小笛は聞えない。戸障子のやぶれる音、悲鳴、刀の音は打ちよせる波のやうに強くなつたり弱くなつたりしてゐる。味方の呶鳴り聲らしいものが、間斷なく聞える。皆は勇敢に働いてゐるらしい。敵が逃げてくるらしい姿は時々見るが、勝手口の方へゆくと、其處にゐる同志の者に追ひかへされて、又逃げ込んでゆく、たしかに味方の勝利らしい。
誰も逃げては來ない。逃げてくるものは敵許り、しかしそれ等は表門のひらかないことを知つてるらしく、小門の方にゆき、其處にゐる、彌兵衛等、四五人におツかへされてゐる。近處の人達も皆起きたらしく、門の前には人が益々ふえてくるらしい。隣りの土屋邸では高提灯を立てつらね、嚴重に堅めてゐる。
さわぎは一通り靜まつたが、小笛の音は依然として聞えて來ない。
『どうしたのでせう。』
原はさう云ふ。
『今に聞えてくるだらう。』

大石はさう云つた。

『一寸見て來てもようございますか。』

『すぐ歸つてくるなら。』

原は駈けていつたが、まもなく歸つて來て云つた。

『何處にも見えないのださうです。だが皆手わけして搜してゐますから、必ず見つけるでせう。』

『樣子はどうだつた。』

『いや非常なさわぎです、敵の死屍は方々にごろ〳〵してゐて、血が流れてゐますが、味方は一人もやられたものはないやうです。誰も、かれも元氣です。血をあびてゐるものも、敵の血をあびたのが多いやうです。』

『何處から何處まで搜してゐるのだね。』

『はい。』

『逃げるすきはない。必ず見つかるだらう。』

『何處かにかくれてゐるのでせう。』

誰か駈けて來た。

『見つかつたか。』

原は云つた。

『見つかりません。見つからなかつた時の最後の手段はどういたしませう。』

『かねて云つてある通り、火をつけて自殺する許りだ。』大石はさう云つた。

『その御覺悟が必要かも知れません。搜すだけは搜してをりますが。』

『心やすく搜すがいゝぞ。必ず居るにきまつてゐるから。』

『はい。』

同志は駈けて歸つていつた。

時は遠慮なくたつてゆく、不氣味な沈默があたりを占領する。足音と、戸をこはす音が聞えはするが、それが消えると又沈默が始まる。

『冷光院樣、讐のありかをお知らせ下さい。』

大石は思はず祈つた。

だが小笛の音は聞えようとはしない。
『いよ／＼駄目か。今迄の苦心はムダになつたか。最後の決心をしなければならないか。』
さう思ふとさすがに無念な氣がして來た。
原はおちつかなくなつて居る。歩きまはつていら／＼してゐる。間瀬は又默りこんで泣きたさうな顏をしてゐる。大石は石のやうに落ちつきたかつた。だが東が白みかけてくるのを感じないわけにはゆかなかつた。
『萬事休す。』そんな氣がやゝともするとした。
この時だ。五六人の人の雄叫びの聲が聞え、刀の音が、悲鳴が聞えた。
あつと思つたが、又沈默が來た。
三人は顏を見合せた。思はず大石も泣きたいやうな氣持になつた。その沈默はたまらない沈默であつた。
『だめか。』
原、一人ごとをした。

この時、小笛の音が聞えた。あつちこつちでそれが又受け答へられた。

三人は思はず、『あつ』と云つて、駈け出した。あつちこつちからもかけつけた。小笛の聞えて來た廣間に大石達が駈けつけた時は、もう殆んどすべての人が集つてゐた。皆、何を云つてゐるのか、わからない、たゞ何か云つたり呶鳴つたりしてゐる。大石は人々をわけてなかに入つた。其處には吉田や、間や、武林達が興奮し切つて居た。主税も顔を紅にしてゐた。

その眞中に一人の老人が、殆んど息も絶え絶えにうつぷして居た。白無垢の下着がはがされて肩が出されてゐた。其處には刀のふる傷があかりにてらされて見えてゐた。

吉田は大石を見ると、泣き聲をかくさずに云つた。

『之、之を御らん下さい。これ、これこそは、冷光院様のお斬りになつた刀の傷で御ざいます。』

さう云つて、大石は老人の前に平伏してしまつた。それは肩の傷に禮拜したのだつた。大石は生れて初めてのやうに泣き出した。人々も泣き出してしまつた。

『まちがひがありません。』

大石はいきなり立ち上つて、その老人にとゞめをさした。そして吉田を顧みて云つた。

『誰が吉良殿を討つたのだ。』
『間です。』
『間か。それなら間、この首を斬れ。』
『はい。』
間も泣きながらその首をおとした。
大石は、三度軍麾をふつた。皆鬨の聲をあげた。その聲はあたりにひゞいた。
人々は、
『やつたな。』と思つた。
門前にゐた、大石三平、堀部九十郎、佐藤條右衛門等はその聲をきくと共にをどり上つて喜んだ。顔を見合せて、泣き出した。他にも喜んで、泣いてゐる連中も、一人や二人ではなかつた。

八十九　其後

義士達はこの上は吉良の一子左兵衛を打ちとりたいと思つた、それで手わけしたが見えなかつ

た。その內に或る少年の落していつた薙刀を持つて來たものがあつた。その薙刀の樣子でそれを左兵衞が持つてゐた薙刀だと云ふことがわかつた。

その時武林唯七は云つた。

『その少年なら私が追ひかけて、もう一打ちで斬り殺せる處だつたが、大夫殿のお言葉で逃げるものは追ふなと云はれたので、それに相手がまだ若すぎたので許してやつた。惜しいことをした。』

と云つた。しかし罪は吉良一人にあるのだ。子供までは殺さなくつてもいゝであらう。大石はさう云つた。そして、『それならひき上げるとするか。、、どらをならせ。』

銅鑼はなりひゞいた。人々は集つて來た。

四十七士の內、誰一人もかけてはゐなかつた。刀傷をうけたものは橫川一人で、あとは家根から落ちて傷した原、神崎の他、近松が打撲傷をうけただけだ。そして、誰一人歩けないものはなかつた。

あつちこつちで武功が語られた。

木村岡右衞門は、大石のそばによつていつた。

『御子息の御勇猛なのにはおどろきました。穴藏のやうな、ぬけ穴のやうな處がありましたので、一寸入る勇氣がなくつて、ぐづ〳〵してをりましたら、主稅殿がいらつして、かう云ふ場合こそ少年相應の役廻りだとおつしやつて、私達のとめるひまもなく、なかへとび込んでいらつしやいました。それで私達は目がさめたやうな氣がして、つゞいて飛び込みましたが、何事も御ざいませんでした。今思ひ出しても、私達の躊躇してゐたのが恥かしい氣がいたしますだけ、主稅殿の御覺悟には感服いたしました。』

『さうでしたか。』

大石はさう云つた時、自分の目に淚がにじみ出るのを感じた。

『集れ！』彼は淚を出すのを恐れるやうにさう云つた。

番號がかけられた、四十七人完全にゐた。

『それでは家をもう一度、皆で見まはり、そして引き上げることにしよう。火の用心は十分しておく必要がある。あわてゝ引上げたやうになつては、見ともない。』

かくて彼等は家の廻りをまはり、蠟燭や、爐や、火鉢の火を一々消して廻つた。そして原や、小野寺や、片岡は一々塀越しに隣りの人に挨拶した。そして騷がせたことを詫びた。

彼等は何處までも、靜かであり、禮儀正しかつた。

たゞ若者の中には、力がありあまつてゐて、勇氣のもらし處がなく、長屋の前なぞに行つて、戰をいどんだり、家老の家らしい處に矢を射込んだりしたものがあつた。大石は腹のなかで、馬鹿なことをすると思つたが、しかしそれも無理がないと思つて、とめる氣にはならなかつた。萬事手ぬかりがないことを知ると、彼は隊伍正しく、裏門から吉良の首を携へて引きあげていつた。

萬事過ぎてしまつた。だが之から何が始まるか。

その時既に世界は白んでゐた。太陽はやがて昇らうとしてゐた。人々は元氣で元氣で仕方がなかつた。だが大石の心の内は何となく淋しかつた。

裏門から出た樣子が見えると、大石三平等はあわてゝ、彼等を出迎へ、

『お目出たう。』と云つた。

大石はさすがに會心の笑を見せた。

だがそれは嬉しいのか、淋しいのか彼にはわからなかつた。鼠のやうに死んでいつた老人を彼は憎む氣にはなれなかつた。又それを勇ましいこととも思へなかつた。

彼は皆の見てゐる前だつたから勇敢にとゞめをさしたが、その手ごたへと、ぐつと云つた最後の力のない聲は、彼の氣をやゝもすると滅入らさうとした。しかし彼は人々と共に喜んだふりをしてゐた。

九十　泉岳寺につく

いろ〳〵の人が義士に何かくれた。餅とか蜜柑とか。義士達は其處で休息した。

一つ祝杯をあげたいものだ。誰かが云つた。贊成するものが多かつた。氣早の連中はもう酒屋にとんでいつて、酒屋をたゝき起した。寢ぼけ眼で起きて來た酒屋の主人は、血にそんだ異様な男が、槍、薙刀をもつて、其處に五六人立つてゐるので度膽をぬかれた。

『生憎く居酒は市中の法度でございますから、誠に御氣の毒ですが。』

『なに市中の法度だつて、我々は天下の法度さへ破つたものだ。市中の法度なんか何んでもない。』
大高源五はさう云つて、懐から一封の金を出した。その表には『元祿十五年午十二月十四日、淺野内匠頭家來大高源五忠雄討死、死骸取り捨て候方へ酒手』とかいてあつた。
彼はその封を切つて、なかの二兩の金を亭主の前につき出した。
その大金におどろいてゐる亭主に目もくれず、『それ酒をもち出せ。』と云つた。
そして皆で酒樽を一つひつさげて皆の處へ持つて來た。
義士達は歡聲をあげた。源五は樽の鏡板を槍のいしづきで突きわつた。皆、遠慮なく集つて來て、桝でのんだり、柄杓でのんだりした。皆は益々元氣になり氣焔をあげた。
源五はまづ、
『日の恩や忽ちくだくあつ氷』とやつた。
すると富森は、
『飛びこんで手にもたまらぬ霰かな』とやつた。
源五は又、

『山をぬく力も折れて松の雪』
すると富森は又まけずにやつた。
『寒鳥の身はむしらるゝ行へ哉』
とやつた。人々はそのたびに歡呼したが、彼等は自分達を待つてゐる運命を知つてゐた。それを彼等は知らずにやつたのではなく、知つてやつた處に、誇りを感じてゐた。
もう酒もつきた。
『集れ』
大石はいゝ時を見はからつて云つた。そして隊をくんで、回向院へ先づ向つた。之も豫定通りであつた。彼等は其處で、討手がかゝつたら、花々しく一勝負するつもりだつた。民家に迷惑をかけたくない用心だつた。用心のよさこそ、彼等の行動が他の人々とちがつてゐる處だ。彼等は何處までも、彼等式に大義名分を明らかにした。そしてするだけのことさへすれば、あとは濁さなかつた。
吉良の首がとれなかつたら火を放つて切腹をする覺悟、實に徹底した覺悟である。之以上の覺

悟はあるまい、だが吉良の首をとつた以上は、彼等は少しの火の氣にも用心した。そして臣たる務めを果したあとで、天下の裁きに靜かに從ふつもりだ。

この落ちつきはらつたやり方に、大石等の苦心があつた。讐を討つだけなら、他の人にも出來たらう。この落ちつきはらつたあと始末は大石が居なかつたら出來なかつたであらう。若いものは氣が立つて亂暴なことも仕兼ねない、彼等は力があまつて仕方がないのだ。

回向院にゆくと門は開けられなかつた。仕方がないので彼等は門前で暫らく樣子を見てゐた。吉良家のものも、上杉家のものもやつて來ない。其處で彼等は又隊を組み、江戸の町を歩いて兩國から芝の泉岳寺へと進む。

日は既に登つてゐる。物見高い人は見ないわけにはゆかない。人々は殘んの雪の町を朝早く異樣な人々のゆくのを見た。

先づ第一に槍をさげた者が二人、次に吉良の首を白無垢の片袖につゝんで槍の柄に結びつけたのを誇りかに持つてゐる男が一人、それを四五人の人が守護してゐる。次に大石良雄が一人で歩いてゆき、そのあとに三四十人の人が思ひ思ひの武器を持つて從つてゐる。中に一人か、二人、

負傷してゐるらしく他の人に助けられてゐた。彼等と老人はまもなく辭退するのもきかれずに、乘物にのせられた

『赤穗の人達だ、復讐したのだ。』

『あれは吉良殿の首にちがひない。』

『あの人が大石內藏助よ、きつと。』

そんな話聲が見物の內からもれてくる。彼等は意氣揚々と天下をのんでかゝつて歩いてゐる。何者も恐れない。又何者も彼等の行列を拒まない。

十二月十五日は大小名が御機嫌伺ひに江戸城へ登城する日なので、彼等はなるべく、それ等の行列に逢はないやうに道順を考へたが、しかし時には思はぬ行列に出くはした。

異樣ないでたちなので不思議に思ひ、

『何の行列か聞いて參れ。』と云ふ小大名もあつて、彼等は質問をうけたが、その度、大石は丁寧に事實のまゝ報告した。聞いた人々は今更に感心してよく見るのであつた。

血をあびてゐる着物や、刀なぞで斬られてやぶけた着物なぞも、さう思つて見ると勇ましく見

えるのだつた。
　一行は本庄一ツ目の河岸から、深川に入り、隅田川に沿ひ、永代橋を渡り、靈岸島から、築地鐵砲洲に出て、殊さらに淺野家の舊邸に出た。其處を最後にもう一度見たかつたのだ。又吉良の首を屋敷あとに何となく見せたかつたのだ。それから芝に出、仙臺邸の前を通らうとすると、辻番所にゐた足輕達が一行をとめた。そのとめ方に腹をたてた義士達はふみやぶつて進みたがつたが、大石はそれをとめて、そして諸侯に答へたやうに云つた。
『私達は淺野内匠頭の家來ですが、亡君の意趣を果すため只今吉良上野介殿の御首級をあげ、菩提所泉岳寺まで引きあげる者です。大目附仙石殿までは、同僚を以て屆出てあります。決して御迷惑はかけませんから、このまゝお通し願ひます。』
　番足輕は『少しお待ち下さい。』と云つてなかに入つていつた。
『面倒なことを云つたらやつてしまふだけだ。』
　若い血の氣の多い連中は、何か事があればいゝ位に思つてゐた。
　すると肩衣をつけた品のいゝ侍が出て來て、

『御一擧のおもむき只今伺ひ、御忠義の段、深く感服いたしました。たゞ御公儀御法令の手前、一通りおとめしただけです。どうぞ失禮な所はお見のがしして、お通り願ひます。』

大石は丁寧にあいさつした。

義士達はそれ見たことかと、威張つて通つていつた。會津邸の前でもとがめられたが、仙臺邸でも無事に通したと知ると、何事も云はなかつた。

彼等は一歩々々泉岳寺に近づいてゆく、その間に、義士の知つてゐる人は、駈けつけて來ては、知つてゐる義士に挨拶した。

一行は遂に無事に泉岳寺につくことが出來た。一行について見物人がぞろ〳〵ついて來た。一行が泉岳寺の山門内に入つても、人々は歸らうとしなかつた。

泉岳寺の人達はあまり利口でなかつた。大石達が讐をうつために昨日集つたことを氣がつかなかつた。今大石達、赤穗の人々が異樣ななりをして入つて來たのを見てびつくりした。義士達は內心歡迎されるつもりでゐた。しかし坊主達は出迎へに來もしなければ、寺も淸めてなかつた。反つておどろかれた。

大石は一人の坊主をつかまへて云つた。

『私達は昨夜冷光院殿の讐吉良上野介の屋敷をおそひ、今上野介の御首を申し受け、之を亡君の御墓前にさゝげようと思つて、唯今こゝまでもどつて來たもので、決して御當山に御迷惑はおかけしませんから、御墓前に我等が奉告する間、山門をおしめ願ひたう御ざいます。外來の人々にさまたげられたく御ざいませんから。』

言葉は丁寧であるが、いつもよりその言葉の響きに力があつた。さすがの大石もいく分氣がたつてゐた。

坊主はすぐ方丈にそのことを報告した。方丈はそれを聞くと顔色をかへた。困つたことが出來たと思つた。

『あとのさはりになると厄介だ、うまくいつて斷つてくれ。』

『はい。』使ひの僧侶は立たうとした。この時、承天卽知と云ふ役僧は云つた。

『それはよくないと思ひます。當山は淺野家御一門の御菩提所で御ざいます。淺野家の家來たちは生命をすてゝ亡君の讐を報じた英雄たちです。お斷りになつたら、どんな結果になりますか、

火を見るより明らかで御ざいます。あなたの御生命にも關係するやうな結果にならないとも限りません。之はおとなしく彼等の忠義心に從ひなさる方がいゝと思ひます。』

『それならお前からいゝやうにお話するがいゝ。』

承天はすぐ義士達の處に出かけ、大石にうや〳〵しく云つた。

『首尾よく御本望をお達しなされ、さぞ御喜びのことと存じます。冷光院樣もさぞかし地下で御滿足あそばされたことと存じます。私達は皆樣の御忠義の御働き、その御苦心には唯々感嘆いたすばかりで、古今にも例しのないことと存じます。どうぞ御心やすく、御回向なさりませ。山門の方のことは私達に御任せ願ひます。決して御迷惑になるやうなことはいたしません。』

大石はあつく禮を云つて、一同をさし招いた。一同は隊伍を正して、御手洗所にゆき、謹んで手をあらひ、口をすゝぎ、吉良の首を小袖の包からうや〳〵しく出し、淸水でそれを淸めた。そのおちつき拂つた態度は見るものは感心しないわけにはゆかなかつた。

承天はすぐ山門をしめさし、香爐を墓前に供へさし、手ぬかりのないやうに苦心をした。

そして義士達にたいする禮を少しもかゝないやうに骨を折つた。其處で義士達も滿足をした。

彼等は何と云つても鼻意氣は強くなりかけた。大石、吉田、原、小野寺なぞがゐなかつたら、彼等の勢ひは何をし出かすかわからない程だつた。彼等は力がありあまつて仕方がなかつた。だが彼等はそれを制御し、そして正しくふるまつた。充實し切つた異樣な空氣があたりを領した。
雪はまだ殘つてゐた。異樣な風をし、血をあびてすらゐる四十何人かの義士が墓前に進んでゆく姿には、物すごい美しさがあつた。
墓前にゆくと彼等は跪いた。大石は三方にのせた吉良の首を間に墓前にそなへさせ、自分はうや〳〵しく前こゞみに進んで、香をたき、更に階段を一つのぼつて、懷中から短刀を出した。それは亡君の遺愛品であつた。彼はそれをすらつとぬいた。それが日にひかつた。彼はそれを墓前に柄を墓の方へ向けておいた。切先は首の方に向けられてゐた。そして彼は靜かに數歩さがつて、墓前に平伏した。一同も心から平伏した。大石も泣き出した。あつちこつちでも泣き聲が聞えた。誰一人泣かないものはなかつた。それは嬉しいのか悲しいのか誰も知らなかつた。
大石はつと立ち上つた。彼は何かにとりつかれた人のやうに墓前に近づいた。彼はいきなり其處に置かれてゐた短刀をとりあげ、吉良の首を三度斬るまねをした。

一同はそれを見てゐた。
大石はそれをすませると、初めて、自分に返つたやうに、あとにもどり、今度は自分自身として燒香し平伏した。彼は自分がすんだあと、一番槍の殊勳者、間十次郎、二太刀の武林唯七が燒香した。彼等は遠慮したけれども聞き入れられなかつた。
四人目に主税が燒香した。それから一同が燒香した。吉田と富森はその場にはゐなかつた。彼等はいつのまにか行列をはなれて、大目附仙石伯耆守の屋敷へ、復讐したことを訴へに行つたのだつた。
燒香を心殘りなくすませたあとで、彼等は承天に案内されて寺の中堂に休んだ。
人々は互に語り合つた。大石は彼等の言葉から、その一夜の有樣を、殆んど目に見るやうにはつきり知ることが出來た。
吉良がどうしても見つからなかつたこと、寢床がまだあたゝかだつたこと、それでさう遠くにはゐないと云ふことがわかつたが、さて何處にゐるか、皆目わからなかつた。人々は泣きさうな顏してさがして歩いた。

何度もあきらめかけた。お互に顔をあはせるごとに彼等は泣き面をしてゐた。

『まだか。』

『何處かにかくれ處があるのだらう。』

天井と云はず、床下と云はず彼等は捜し廻つた。何度も同じ顔がぶつかつた。時間がたつのが、いやに氣になつてくる。

人々は氣が滅入つて、異様の沈默があたりを領した。もう皆、元氣に話す勇氣もなかつた。足音さへしめりがちだ。

この時、吉田は思はぬ處からかすかに人聲のするのを聞いた。

『あやしいぞ。』吉田はさう思つた。見ると何度も氣がつかずに前を通つた外から鍵がかゝつてゐる物置らしい室があつた。外から鍵がかゝつてゐるので誰も氣にしなかつた。吉田はすぐ皆を呼んだ。

『皆こい、こい。あやしい室があるぞ。』

近くに居た人々が集つて來た。

『この内で聲がした。』
『それ。』
義士達はその戸をこはした。中は眞暗だつた。だが人の氣配がした。
『ゐるぞ、用心しろ。おとし穴があるかも知れない。』
皆勝手にさけびながら、飛び込んだ。するとなかから、一人の武士がとび出して來た。中々勇敢な男だつたが、三村次郎左衛門が之を殺した。すると又一人が向つて來たが、皆にやられてしまつた。
あとに一人の男が殘つてゐた。それも覺悟したと見えて小刀で斬つてかゝつた。間が第一に槍で左の股をつきさした。すると武林唯七が刀で肩から斬りさげた。その男は悲鳴をあげて倒れた。
『この男はあやしいぞ。』
皆さう思つた。何しろ二人の家來に守護されてゐた、老人だつたから、半死の老人はすぐ廣間にひきずられた。其處であかりで顔を見られた。白無垢の下着はなほ皆の豫想を强めた。

『額の傷をしらべろ、傷を。』
しかし其處に傷は見出せなかつた。
『肩を見ろ、肩を。』
肩を見ると、古い傷があつた。
『あつた、あつた。』
亡君の斬りつけられた傷が、ちやんと殘つて居た。
皆思はずをどりあがつた。そして小笛が吹かれたのであつた。

九十一　吉良家の人々は

その時吉良家には百十八人の男の人がゐたわけだ。之等の内戰死者は十七名、重傷者十名、輕傷者十三名でその内には自分でわざと傷をつけたものがあつた。
之等の人が本氣になつて戰へば元より義士達は本望を達することは出來なかつた。否二十人の決死の人が吉良を守護して打ちやぶられた裏門から逃げ出したら、義士達はうつことは出來なか

つたにちがひない。吉良の方で赤穂の義士達をあまく見、安心しないまでも見くびつてゐたのが、彼等の敗けであつた。大石等の苦心も、吉良の人々を安心させ、油断させることにあつたのは尤もなことである。

百何人の無傷の人間は何處にかくれてゐたか、彼等は生きた心もなかつたにちがひない。しかしそれも無理はないかも知れない。戰死した内に家老は一人もゐなかつた。家老は四人とも輕傷者の內に入つてゐるが、その內三人は自分で傷をつけたのだと、檢使の人から見破られて、輕傷者の內にも入れられなかつた。彼等は大いにあわてゝ下水口からそとに逃れて、又下水口から忍びこんでそしらぬ顏をしてゐたのだと噂をたてられた。その下水口には『この處家老の外出入りすべからず』とはり紙されたと云はれた。

九十二　泉岳寺にて

偖、義士達は中堂で公儀から何か云つてくるのを待つてゐた。大石や、小野寺、原、間瀨なぞ年より連や、上の方にたつ人々はおちついてゐたが、さすがに若い連中はおちついてはゐられな

かつた。彼等はお互に饒舌りあつた。彼等は得意さをかくすわけにはゆかなかつた。各自、自分の手柄を話しあつた。それが又實に嬉しくもあり、喜びでもあつた。聞いてゐる大石達も愉快であつた。彼等はやがてくるものを少しも恐れてはゐなかつた。

坊主達に聞かれるまゝに彼等はいろ〳〵と話をした。

その内に、白粥がはこび出される。又酒まで出された。

上戸はよろこんで酒をのんだ。大石も酒を辭さなかつた。彼は若い連中と喜びながら酒をとりかはした。多くのものは彼に杯をさゝげ、彼から杯をもらつた。

下戸は仕方がないので粥をすゝつて皆の元氣な樣を見てゐた。

大石は寺の人に云つた。

『どうぞ山門をおあけ下さい。萬一上杉殿から討手が來たら、こゝで戰つては御迷惑でせうから。』

皆それをきくとよろこんだ。

『山門をおあけ下さい。上杉殿へはこちらから出向つたらどうですか。』

なぞと云ふものもあつた。大石は酒がまはるに從つて元氣になつた。

『あら樂し、思は霽るゝ身は捨つる、浮世の月にかゝる雲なし』彼はこの一句をさら〳〵と紙にかいて人々に見せた。

人々は口ずさんで感嘆した。

『あら樂し、思は霽るゝ身は捨つる、浮世の月にかゝる雲なし』

この時、あわたゞしく一人の僧がとんで來て云つた。

『上杉邸より大勢の人がおしよせてくるさうで御ざいます。』

人々はさすがに色をかへた。居ずまひをなほした。

しかし大石良雄の息子、十五の主税は云つた。

『それは嘘でせう。くるならもつと早く來るはずです。』

大石はそれを聞いてうれしく思つた。彼もさう思つてゐたから。しかし彼は注進して來た人の親切も無にしたくなかつた。

それで云つた。

『私も嘘のやうに思ふが、用心しても損はない。油斷大敵だ。來れば來るでよし、來なければ來ないでよし、もう吉良殿の首はつぐわけにはゆかないからね。』

人々は笑つた。

『お父さん來れば反つていゝと思ひますが、さうすれば生きた本當の斬りあひを見せて上げられるから、それは人形の斬りあひとはちがつて、一段と面白いものですよ。だが上杉の人は來ないと思ひます。』

しかし人々は用意をした。酒をのむのをやめて、刀をとりよせ、いつ敵が來てもいゝやうにした。殺氣があたりを占めた。

決死の人々の凄さはとく別だ。殊に堀部安兵衛や大高源五なぞは、用意が出來ると益〻酒をのんだ。

しかしやがて、上杉の人達がくると云ふ噂は嘘だつたことがわかつた。

『臆病者だな。』

とがつかりしたやうに云つたものがあつた。

しかし皆、安心した。そして又酒もりが始まつた。大石は何か書きものをしだした。

九十三　大石の潔白

いつのまにか、吉田、富森の他に寺坂吉右衛門がゐなくなつて居た。

彼は大石に云ひつけられて、冷光院殿の未亡人瑤泉院様の處に使ひに行つたのだつた。その使ひは、淺野土佐守殿の處へ出かけた。そして其處にゐる瑤泉院様に京都の瑞光院から來た使ひだと言つた。そして一封の書狀を置いて、彼は消えるがやうにゐなくなつた。

瑤泉院は何心なくその手紙をうけとつた。なかをあけて見ておどろいた。それは大石からの書狀だつた。

それには復讐のことがかいてあつた他に、一萬兩の用途が、一々詳細にかいてあつた。それは淺野家のつぶれた時の再興資金として大石があづかつてゐたものだつた。

彼はそれでその金を少しも私にはつかはなかつたことを明らかにした。そして殘つた金をそれに入れてあつた。

瑶泉院はそれを見ると思はず泣かないではゐられなかつた。そして早速、兩親にそのことを知らせないではゐられなかつた。

大石は自分の財産は殆んど心殘りなくつかひ果してしまつた。彼はなるべく自分に生きたい執着をなくすやうにした。彼はさつぱりして死にたかつた。持つてゐるものは殘らずすてた。妻子すら、まして財寶に未練があるわけはなかつた。未練のあるものは復讐の前に皆すてゝしまつた。彼に殘るのは男子として恥なく死ぬことであつた。公金を私したやうに思はれる事は名を惜しむ彼には耐へがたいことだつた。今や心にのこることは何もなかつた。彼はあとは立派に死ねばいゝのだ。

彼が落ちついてゐるのはあたりまへである。否、彼は落ちついてゐると云ふよりは、醉が廻るに從つて、生死を忘れて愉快さうに見えた。たゞ若いもののやうにはしやがない許りだ。

九十四　使を待つ間

若いものは疲れずに功名話をしてゐる。彼はそれをうれしさうに聞いてゐる。彼は功を若い

ものに讓つてゐた。今も彼は自分のゐるべき處にゐた。

自分が出なければならない幕がくるまで、彼は唯、快活に、朗らかな心を持つて待つてゐればいゝのだ。

だがその使は中々來なかつた。

何とか、もう云つて來さうなものだ。義士達も、この沈默の相手にはいくらか困つて來た。敵があれば戰へばいゝ。だが敵は何處から、どんな姿をしてあらはれるかわからない。

恐らく切腹であらう。

それが今すぐくるか。いくらかたつてからくるかそれはわからない。すぐこの場で、死なければならないかも知れない。反つてその方がいゝと大石は思つてゐた。

今ならおちついて死ねる。

だが何處かで、自分達のしたことは名譽なことで、その忠義さを賞でて生かされるかも知れない。そして、再び自由を得、錦をかざつて京都の方へ歸れるかも知れない。そんな氣もする。するとあわてゝ、それは嘘だ。そんなことはあるわけはないと思ふ。

切腹は免がれない。もしかしたら、もつと重い罰になるかも知れない。天下をさわがし御膝元で騒動を起したのだから。

だがそんなことは自分達の知つたことではない。勝手にしろと思つた。

彼はそんなことを考へるのさへ、自分の修業の不足が思はれるのだ。そして愉快さうにして何にも疑がはない、我が子の純眞さを見ては、あいつの方が偉いと思つたりした。

彼は又杯を重ねるのだつた。

小野寺が彼に杯をもらひに來た。

『おそいですね。』

『評議をしてゐられるだらう。』

『議論百出ですかね。』

『そんな所だらう。』

二人は愉快さうに杯を傾けた。

九十五　老中達會議す

使のおそいのは無理がなかつた。

大目附仙石伯耆守久尙は吉田、富森の報告を聞いておどろいた。

彼は元よりこのことがあることは知つてゐた。內々心待ちしてゐた。しかしから安々と赤穗の義士達が宿望を果すとは思はなかつた。むしろ彼は赤穗の浪人達を輕蔑さへしてゐた。彼等、瘠せ浪人に何が出來ると思つた。

つまりは返り討ちになるのが落ちだ位に思つてゐた。何しろ吉良の後には上杉がひかへてゐる。吉良には百五十人程の人が守備してゐる。

二三十人の浪人ではどうにもなるまいと思つてゐた。だが內々彼は吉良を愛してはゐなかつた。吉良がやられることには別に不服はなかつた。たゞ赤穗の浪人の力を見くびつてゐたのだ。處が赤穗の人々は簡單にやつてのけた。そして他からまだ何の知らせもない內、不意に赤穗の浪人がやつて來たのだ。

しかもその報告を自身で聞くと、實に堂々としたもので、彼は內心感服しないわけにはゆかなかつた。
二人の決死の士に逢ひ、その人の口から復讐の事實を聞いたのだから、人間なら誰でも興奮するのがあたりまへである。
彼は急いで、このことを先づ老中や若年寄に知らさなければならなかつた。
彼はまもなく登城した。
それから老中、若年寄は招集され、それから事實の眞相をあらゆる方面から調べ、そして會議がつゞけられたのだ。
老中や若年寄の內にはすつかり義士のやり方に感心したものがあつた。その人々は口をきはめて義士達をほめた。誰もそれに反對するものはなかつた。
殊にこの事實を聞いて喜んだ一人の男があつた。それは曾て、淺野內匠頭を蚤のやうにひねりつぶすことを主張した男であつた。
つまりそれは將軍綱吉である。

この何者にも自分の感情をまげられたことのない男は、自分が淺野を殺す事を命じた時と同じ純眞さをもつて、義士のやり方に感心した。

『隨分苦勞をしたものだらうな。』

彼はさう老中に云つて、この稀代の忠義者に感心した。

老中は元より將軍の云ふことに反對する理由はなかつた。老中も感心してゐたのだから。忠義の嫌ひな、大名はゐるわけはない。

命をなげ出して、君主の讐を報じる。それも二年の苦しみの甲斐あつて、百何十人の人で守護されてゐた邸にのりこんで四十何人かで望みを果した。嘗てこんな大げさな復讐があつたか。しかも落ちつきはらつて、稀れに見る立派な態度でやつてのけたのだ。

話せば話す程、考へれば考へる程、彼等は感心しないわけにはゆかなかつた。

しかし、感心許りはしてゐられなかつた。

役目を忘れるわけにはゆかない。

だが逃げかくれる心配のない相手だ。さう急ぐにもあたらない話だ。

先づ何處かに義士達をあづけて、それからゆつくり相談してもおそくはない。誰たちにあづけたらいゝか。

その相談の結果、四人の大名が選ばれて、この義士達をあづかることにした。

先づ細川越中守綱利がその內の十七人を、久松隱岐守定直、毛利甲斐守綱元、水野監物忠之、各〻十名をあづかることを命ぜられた。

喜んだのは細川越中守であつた。彼は義士の話をきいて、すつかり愉快になつてしまつたのであつた。

九十六　とう〳〵使來る

日がくれて來ても、まだ使は見えなかつた。雨がふり出して來た。義士達もさすがにつかれた。居眠るものもあつた。皆、興奮づかれでぼんやりしてしまつた。さすがに大石はおちついて居た。しかし腹のなかでは、早く何とかきまつてほしいものだと思つてゐた。こんな氣持がながくつゞかれては困ると思つた。だが心配はしなかつた。心配しかけない內に、自分で自分を制御

した。そして平氣な、ます〳〵落ちついた態度を示して、柱によつかゝり、時々小唄を口ずさんだりした。お輕でもやつてくればいゝのになぞと考へても見た。

今時分はどうしてゐるだらう。彼はそれから、それといろ〳〵のことを思ひ浮べたが、しかし、別に逢ひたくつて仕方がないとも思はなかつた。たゞぼんやりいゝ心持で、いろ〳〵のことを考へてゐた。雨はます〳〵ひどく降つてくる。使はまだ見えない。吉田達も歸つて來ない。しかし彼は使が自分達を目ざして進んで來てゐることを感じた。

だが待つてゐるものは中々來なかつた。

『何が來たつて、おどろいてはならない。又喜んでもならない。どつちにしろ自分は生きてゐようとは思はない。』

大石はそんなことを考へてゐた。

原がそばによつて來た。

『寒くなりました。一杯いたゞきませうか。』

大石はついでやつた。

『ありがたうございます。ひどい雨ですね。』

『中々ふる。』

『使はどうしたのでせう。』

『もう何とか云つてくるだらう。』

『早く來てほしいものです。何んだかおちつきません。』

『來るなと云つても來るよ。』

『それは來るでせう。來ないときまればなほ幸ですが。』

『來なかつたらどうする。』

大石はずるさうな顏をした。

『來ないでも、矢張り切腹だ。』

『さうでございますね。』

原はさう云つて、微笑した。

『生命が惜しいのか。』

『いゝえ。』
『俺は惜しいよ。』
『本音をはけば私だつて。』
『だが本音をはけば、死もさう怖くはない。』
『私だつて、さうでございます。』
『死と云ふものはもつと怖いものかと思つてゐたよ。』
『本當にさうでございます。』
『だが、一寸生きて、京都にゆくのも惡くはないな。』
大石はから〳〵と快活に笑つた。義士達は皆、大石の方をふり向いた程。
この時、使が見えたと坊主が知らせて來た。
『とう〳〵來たね。』
『來ました。』
『美人かな、それとも醜婦かな。』

『美人でせう。』

『どうかな、だが今の場合、どつちがいゝのか。』

大石は原には氣らくだつた。

九十七　仙石邸に向ふ

使はとう／＼來た。それは仙石邸へすぐ來るやうにと云ふのだつた。

彼等は顔を見合せた。四人としてゞなく、たゞ來るやうにと云ふのが不思議に思へた。不思議と云ふものは何となく不安なものである。人々はどう云ふつもりなのかわからなかつた。あまりに寛大すぎる。

人々は何かその裏に恐ろしいものでもかくされてゐるのではないかと思つた。何が來ても恐れる必要はないはずではあるが、何かわからない相手は反つて無氣味に思へた。

しかし大石は簡單なことだと思つた。彼は人々にかう云つた。

『何でもないのだ。たゞ幕府の者が來て我等をつれて行つた時、上杉勢が來て、幕府の役人と上

杉勢と戰はなければならなくなると事が面倒になるので、私達に任せたのだ。私達の逃げないとは知つてゐる。私達に任せた方が安心なことを知つてゐるのだ。利口な人間がゐると見える。』
『上杉の奴はやつてくるでせうか。』
『來ないと思ふが、しかし用心はしておくにこしたことはない。吉良だつて用心さへしてゐれば、こんなことにはならなかつたらう。』
『やつてくれば面白い。』
『あの父の子ならやつて來ないだらう。』
皆、口々に勝手なことを云つてゐた。
『それなら出かけるとしようか。』
『さうしませう。』
かくて、彼等はもう眞暗になつたなかを、大雨をおかしながら、正々堂々と隊伍をそろへて仙石邸へ向ふのだつた。
彼等を待つてゐるものは何か。

何であらうと彼等は恐れるわけにはゆかない。だが彼等の進む所、人々は彼等を見に出て來た。それは罪人を見るためではなかつた。古今未曾有の忠臣義士を見るためであつた。見物のこの心理は大石達の心にひゞいた。彼等は勝利者の氣持を味ひながら、靜かに仙石邸へ近づく。道端には警戒の人々が立つてゐた。彼等も義士達を罪人だとは思つてゐなかつた。

九十八　仙石邸につく

かくて一同は無事に仙石邸につくことが出來た。だが仙石邸の前は大さわぎだつた。千五百人からの人が彼等を迎へる爲にやつて來てゐた。細川家から來たものだけでも七百五十人の人は居た。之等の人は大雨のなかに高張提灯をつけ、又馬提灯をつけたりして往來の兩側に陣取つてゐた。彼等は四十七人の義士の來るのを、好奇心をもつてゐた。

『來た！　來た！』

誰云ふとなく、皆の口にのぼつた。皆注意して義士達のくるのを見た。

彼等は夜討の時と同じ姿をして、提灯の明りをうけて黑く歩いて來た。その足音は力強かつ

た。決死の一團は人數こそ少なかつたが、力のかたまりのやうに見えた。彼等は千何百人の陣取つてゐる眞中を素知らぬ顏して歩いてゆく。人々の目は彼等にそゝがれてゐることを彼等は知つたが、それは反感を持つ必要はなかつた。それ等の人が感心し切つて見てゐることを、ぢかに感じることが出來たから。

實際見るものは、この小人數でよくやつたと思つた。二年かかつたことも、反つて今ではその苦心を語るやうに見えた。人々は明りにてらされて、緊張した顏して進む人々を感心して見ないわけにはゆかなかつた。

彼等の過ぐる處に囁が起つた。

仙石邸の門につくと、義士達は口上を云つた。

『御沙汰に從つて一同唯今參りましてございます。』

その時戌の上刻、今の夜の八時であつた。

九十九　仙石邸における義士達

彼等は仙石邸でも囚人としてはあつかはれなかつた。義士として大事にあつかはれた。彼等は廣間に通された。

大目附の仙石伯耆守が正面の上座にゐた。その兩側に御目附の鈴木源五右衛門と水野小左衛門がゐた。それから下がつて御徒歩、目附なぞの役人がずらつと、物々しくならんでゐた。

義士達はその廣間に通つても少しもうろたへなかつた。彼等は待つてゐるものが、次第にあらはれてくることを感じたが、どれも豫期以上に大事にされ、尊敬されてゐることを感じた。それは氣持のわるいものではなかつた。

彼等は先づ詳細に名や年齢や知行のことなぞを調べられた。彼等はいづれも明瞭に答へた。

そのあとで伯耆守は云つた。

『公儀に於かせられて御詮議中、其方どもはそれ〴〵四家に御あづけと相成るにつき神妙に御沙汰を待ち奉るやう。』

一同平伏した。

それからあづけられた人々がよみあげられた。大石は靜かに聞いてはゐたが、主税と別れなく

つてすむか、別れなければならないかを氣にした。主稅も同じ思ひであつた。
先づよみ上げられた。
大石內藏助、吉田忠左衛門、原惣右衛門……
『我が子とはわかれなければならないのか、それも仕方がない。』と思つた。
主稅もあつと思つたが、何氣ない顏をしてゐた。
果して細川越中守におあづけになる十七人の內には主稅の名は入つてゐなかつた。主稅はつぎの松平隱岐守の方へおあづけになる方に入れられてゐた。すべて親子兄弟は同じ處にはあづけられないことになつてゐた。彼等はそれが當然であるとは思つたが、さすがに心細い氣がした。泣き顏をしたものはさすがに一人もなかつた。彼等は冷然としてゐた。微笑さへうかべてゐた。
調べがすんでから、伯耆守は氣輕さうに大石のそばにやつて來た。
『之は職務外の話で、私一人の考へだが、今度の一擧については、伯耆實に感心つかまつつた。皆さんのおちついたふるまひといひ、考へ深い計畫といひ、之でこそ本望を達することが出來たのだと思つた。』

大石は謹んで云つた。

『まことに畏れ入つた御言葉、一同の面目この上もございません。』

それから伯耆守はいろ〳〵自分の好奇心を滿足させるために聞いた。大石や吉田はそれに愉快さうに謹んで御答へした。聞いてゐる人々も注意して二人の言葉をきいた。

伯耆守は、

『上野介は老人だから仕方がないとして、左兵衞は壯年のことだからさぞ働いたでせう。』

『御意の通りでございます。相應に戰はれたやうでございます。』

人々はそれを聞くと、ついふき出してしまつた。役人も、義士も同じくふき出してしまつたのだ。

この時水野小左衞門が云つた。

『主稅は何處にゐるか。』

『こゝにをります。』

『あゝその方は主稅か、當年十五歲とあるが左樣か。』

『御意の通り、生年十五歳にございます』
身のたけ五尺七寸ある主税は、水野が十五歳と思へなかつたのも無理がない。しかしそれは厚意を見せたくつて、わざと云はれたのかも知れない。
『是まで御當地に來られたことはあるか。』
大石良雄は引きとつて云つた。
『今度が初めてゞ御ざります。』
『見た處、中々大兵だから弱年とは思へないが、聲をきくと如何にも若い。內藏助、その方はよき子息を持たれて、さぞ嬉しからう。』
『はい。』
さすがの大石父子も涙ぐんだ。
伯耆守は又云つた。
『昨夜吉良の家人をとらへて、蠟燭までとり出させてあかりをつけたと云ふ磯貝十郎左衛門とはどの人だ。』

『あすこにひかへてをりますのが、十郎左衛門にござります。』
『左樣か、若い男にしてはまことにおちついた働き。』
『さてもよい家來を内匠頭殿はもつてをられたものだ。こんなにいゝ家來を持たれてゐられた上は如何なる御用もおつとめになることが出來たはずなのに、殘念なことをしたものでございます。』
水野小左衛門がさう云つた。仙石伯耆守も同感した。義士達は感激の絶頂に達した。

百　父子の別れ

それからまもなく、義士達は四家にひきとられて行くことになつた。だがそれは罪人としてではなく、名譽の勝利者としてだつた。
輿も途中で義士達が戸をあけたいと云つたらあけても苦しくないと云ふ命令だつた。
大石はあつく禮を云つて立ち上つた。彼は同じく細川家にあづけられる十六人の人と室を出ようとして、ふと主税の方をふりかへつた。二人の顏はあつた。大石は目くばせして、主税をよん

だ。主税はいそ〳〵と父のそばによつた。

『お前に逢へるのも之が最後と思ふが、覺悟は出來てゐるね。』

『父上、御安心下さいまし。』

にこつと主税は笑つて見せた。それは嘘とも見えなかつた。

『それでは安心してゆくよ。』

『どうぞ。』

大石は默禮して出て行つた。主税はそのあとをぢつと見てゐたが、思ひかへして皆の處に歸つた。他の人ば默つて見てゐた。皆の目に涙があつた。

百一　大石達細川家にゆく

大石達十七人は細川家の七百五十人の人に守られて輿にゆられながら運ばれてゆく。大石も初めて一人になれた氣がした。すぎさつたことは夢のやうだつた。萬事はすぎてしまつた。今、彼は嬉しくも悲しくもなかつた。だがなすべきことをしてしまつた、何となく心の落ちつきはあつ

た。さすがに疲れてゐたので頭はぼんやりしてゐた。だが彼は之から最後のものが待つてゐることを知つてゐた。だが別に今氣にもならなかつた。落ちついたいゝ氣持で輿にゆられてゐた。
細川家では主人の越中守綱利は義士達の來るのを今か、今かと待つてゐた。泰平無事になれてゐる主人にとつて、之等の人を迎へるのはこの上なく樂しみだつた。殊に彼は誰にも憚る必要はなかつた。自分の氣持通り行ふことが出來た。彼はどうしてこの義士達を歡迎してやらうかと考へてゐた。
義士達がついたと聞いた時、第一に喜んだのは主人その人であつた。
一同は主人の命令通り廣間に通された。其處には家臣が數十人居ならんでゐた。
一同が坐るか坐らないかに、越中守は出て來た。一同は恐縮して平伏した。
越中守はごく氣やすく云つた。
『この度のこと、誠に神妙であつた。こんなに大勢の人をつけておくのは、反つて迷惑のことと思ふが、之も公儀にたいして疎略なことがないまでゝ、云はゞ云ひわけにすぎないから、萬事心やすく、遠慮なくふるまつてもらひたい。』

一同は又平伏した。
越中守は、
『さぞ空腹であらう。早く食事の用意をいたせ。』
そして大石達に、
『ゆつくり認めて、休息なさい。』と云つた。
そして彼は引こんだ。入れかはつて、善美を盡した御馳走が運ばれ、酒さへつけてあつた。主客心やすく談をし、うちとけた。彼等はあまりの歡迎に、ありがた涙さへ浮んで來た。彼等は何度も云ふが囚人ではなかつた。名譽ある御客だつた。人々は彼等を尊敬し、いかにして、その尊敬と厚意を示すかに苦心した。

百二　主税の病氣

毎日〳〵同じやうな生活がつゞいた。彼等は三度〳〵御馳走ぜめにあつた。もう少し粗食にして戴きたい、腹をこはしますからと彼等が申し出た程。だが何とか口實がつけられて毎日酒もつ

けられた。彼等は、いつまでたつても何と音沙汰もなかつた。彼等は自分達が死なないでもすむかも知れないと云ふ噂をきいた。

細川家の人々は殊に主人を始め彼等の生命の助かることを望んだ。彼等とつきあへばつきあふ程彼等を愛する氣になつた。

大石達も死にたいとは思はなくなつて來た。しかしさうなるのも恐ろしかつた。死ぬ覺悟をしてゐればこそ、おちついてもゐられるのだが、助かるかも知れないと思ふと、死ぬかも知れないことが、恐ろしくなるのは人情だつた。大石は助かるかも知れないと聞いても、それは信じなかつた。皆が内心それを信じたがることを彼はむしろ恐れた。

自分達に殘つてゐることは立派に死ぬことだけだ。だが生きたいと云ふ氣は正直、彼の心の内にもあつたのだ。だからなほ彼は死の覺悟が必要だつた。

彼は寒がりであつた。彼は又酒をのむと中々快活にもなつた。だが死神の姿は彼の目の前からはなれなかつた。だが彼はそれとも平氣に杯のやりとりがしたかつた。

彼は快活さうに見えた。だが沈默してゐる時も多かつた。彼は人々と一緒にゐても、何となく

孤獨な感じがした。しかし彼は又すぐ快活な彼にもどつたが、何處かに心の内にわだかまりがあることを感じた。

　正月が近づいて來た。彼は息子の主税が病氣にかゝつてねてゐることを聞かされた。しかし彼は別に心配さうな顔も見せなかつた。彼は萬事を何かにまかせるより仕方がないことを知つてゐた。

祈りたい氣持もしたが、『生命許りはお助け下さい。』とはまさか云へなかつた。

『なるやうになれ。』

さう思ふより仕方がなかつた。だが主税の病氣は彼には氣になつた。たづねてやれないのが、心殘りだつた。だが仕方がないと思つた。彼は夜人々が寢靜まつたあと、涙が出て來て困ることがあつた。しかし彼はそれを靜かに耐へて、誰にも知らせなかつた。

百三　その年もくれた

彼は年のくれに、

『ながらへて花を待つべき身ならねど、なほ惜しまるゝ歳の暮哉』と歌つた。
かくて日は又たつていつた。かくて元祿十六年になつた。
義士達は助命になるだらう、この噂はます〳〵眞實さをおびて來た。細川家の人はなほそれを信じるやうになつた。だが大石はそれを信じる氣にはなれなかつた。
だが腹の底ではそれを信じたくなるのをおさへることが出來なかつた。だがそれを顏には顯はさなかつた。
主稅の病は思はしくはかどらなかつた。その報告は彼の心をくらくした。しかし彼は萬事は何かに任せておくより仕方がなかつた。
自分の無力を實に強く感じた。
或る夜、彼は酒をのみながら小坊主相手に云つた。
『この爺も、近い内にお目出たくなるが、その時は精進してくれるか。』
小坊主は急に泣き出した。
『そんなにまで思つてくれるのか。だが安心するがいゝよ。お目出たくなつてしまへば、人間は

この上なく呑氣なものになるのだからね。死んでしまへば人間にとつてこんな樂なものはないのだ。だからお目出たと云ふのぢやないか。泣くことはない。』

彼はさう云つて、又杯をあげた。

百四 名を惜しむ

大石良雄が、主税の病氣が全快したと云ふことを聞いて、彼は安心したが、それと同時に彼は、自分達が切腹しなければならないことを本當に知つた。彼は矢張りさうなのかと思つた。彼は一時、氣が遠くなりかけた。だが彼はその氣持を耐へた。そして平氣な顔をした。誰もが、自分の青ざめたのに氣がつかなかつたのに安心した。彼は人々が反つてお饒舌りになつたのに氣がついて、皆の心理が反つてわかるやうに思へた。

『吉田、反つてからきまつた方がいゝ、覺悟が出來る。』彼はさう云つて笑つた。

『本當で御ざいます。』吉田はさう云つた。

彼はあらためて、皆の顔を見た。

どれも自分よりは覺悟のいゝ、おちついた男許りなのに氣がついて、彼は今更に皆を尊敬して見た。そして今迄、ゐるかゐないかわからないやうな、いつも默つてゐる間喜兵衞の顏が一番なつかしい氣がした。彼は本當に覺悟の出來てゐる男だと思つた。

第一彼は生きてゆく興味さへもうないのだから。大石はさう思つた。

小野寺、原、堀部、皆一くせある人物だと思つた。皆、にこりとしてゐる。見にくい態は見せない。

死が扉をたゝいた時、その人間の本當の値打が出るのではないか、彼はそんな氣がして、一番生きたい氣持の强い自分を恥かしく思つた。

主税はそれを知つてどうしたらう。純粹な彼のことだから、反つておちついてゐるかも知れない。誰が一番へこたれたらう。存外この俺かも知れない。彼はそんな氣がした。

だが覺悟が出來てしまへば俺だつて皆に負けてはゐない。

隣りの室に居る若い連中の元氣な話聲が聞える。誰も死を恐れてはゐない顏をしてゐる。だが皆平氣でゐるのだらうか。

兼ねてから今日あることを覺悟してゐたのだから、さすがにあわてるものはなかつた。反つて元氣さうにしてゐた。助かるかも知れないと思ふと、反つて人間が卑しくなり兼ねなかつたが、助からないときまると反つて傲りをとりもどした。

何にも恐るゝものはなくなつたから。

富森助右衛門は、彼等の係りであつた堀内傳右衛門に云つた。

『何れも今度のことでは斬罪になる覺悟をしてゐましたが、世間の噂を聞くに從つてちと驕りがつき、切腹など云ふ結構な御沙汰を仰せつけられるやうになるかも知れない。さうなると當御屋敷で或は切腹させられるのではないかなぞと考へてをります。蟲のいゝ考へではございますが、萬一さう云ふことになりましたら、親類、緣者、或は僧侶から何を云つて來ましても、十七人の遺骸は泉岳寺内に一つの穴をほつてうめて戴くやう、おとりつぎ願ひます。之が私達一同の願ひでございますから。』

一同は死んでも自分の名の末代までも語りつゞかれることは知つてゐた。見ともない態は出來ないわけである。

百五　大石等酒をのむ

二月二日の夜だつた。大石内藏助は同じ酒ずきの原惣右衞門、磯貝十郎左衞門等と酒をのんでゐた。

もう大石はすつかりおちついて居た。彼は酒をのむと上機嫌になつた。

『原、近い内に、もうこの浮世ともわかれなければならないが、さうするとこの酒がのめないと思ふと、少し心のこりだな。』

『本當にさうでございます。』

『之をのむと京都にゐた時のことを思ひ出す。』

『もう一度京都にいらつしやりたいでせう。』

『まあ、そんな所だね。だが人間と云ふものはへんなものだ。あきらめてしまへば何でもない。すべては夢のやうな氣がする。今はもう何にも心にかゝることはない。あの時分は心にかゝることがあつて、うまい酒も、それを思ふとうまくなくなつた。今は落ちついてこの酒の味を味はふ

ことが出來る。それだけ今の方が仕合せなのかも知れないぞ。』
『隨分あなたは苦勞をなさりましたね。』
『苦勞だつたか、樂しみだつたかそれはわからない。私の一生は何と云ふ一生だらう。私は時々さう思ふと、人間と云ふものは生きてゐても死んでも同じものの氣がするよ。あるやうでない。ないやうである。苦しいやうでたのしい。たのしいやうで苦しい。生きてゐたのがよかつたやうでもあり、惡かつたやうでもある。實は何んでもないのではないか。たゞ男の意地だけが私をここに導いて來た。それが又私を笑つて死なすやうにするだらう。私はそれでいゝと思つてゐる。さあ 杯 を一つあげよう。』
『恐れ入ります。』
『私はこの頃になつて、初めて本當に氣がおちついてきた。もう慾望がなくなつたから、死ぬより他に何の仕事もなくなつた。もうおちつくより他仕方がなくなつた。助かるかも知れないと云ふ氣がある間は、かうはおちつけないものだ。原、お前もおちついてゐるだらう。』
『まあ、どうにか。』

『まあ、どうにかとはいゝ答へだ。俺達のなかで一番おちついてゐるのは間だらう。あれだけは力こぶを入れずに死んでゆけさうだ。俺達はまだ、時々力こぶを入れないと、死んではゆけないやうだ。今日はいやに寒い日だな。もうそろ〳〵あたゝかくなつてもいゝ時分だが。春、春がその内にやつてくる……』

この時廊下を傳右衛門が通りかゝつた。大石は聲をかけた。

『傳右衛門殿一寸、こゝへおいで下さい。』

『はい。』傳右衛門はさう云つて入つて來た。

『十郎左衛門、傳右衛門殿に杯をあげなさい。』

『はい。』磯貝はさう返事をして、

『それでは失禮ですが。』と云つて、杯を傳右衛門にさした。

『ありがたうございます。』

傳右衛門はその杯を一氣にのんだ。

『それでは今度はその杯を私がいたゞきます。』

『いやそれでは。』
『そんなことは云はずに是非。』
『さうでございますか、それではお言葉に甘えまして。』
大石は氣持ちよくその杯をのみほして、
『御返杯。』と云つて、傳右衛門にさした。
傳右衛門はよろこんで頂戴した。
酒をのまぬ連中、殊に堀部彌兵衛はこの光景を羨やましく見てゐた。
惣右衛門は見てだまつてゐられなかつた。
『私にもどうぞ。』
惣右衛門がのんで今度は傳右衛門に杯をかへした。
大石は其處で『その杯をどうぞ今一度十郎左衛門に戴きたい。中々のめる男ですから。』
『承知いたしました。』
傳右衛門は十郎左衛門に杯を渡し、波々と酒をついだ。十郎左衛門は感動して、一氣にのみ

ほした。

『どうぞもう一杯十郎左衛門にのまして戴きたい。』

十郎左衛門は、

『是はたまらぬ。もう御免、御免。』と隣りの室に逃げこんだ。一同どつと笑つた。

傳右衛門は禮を云つて、歸つていつた。彼は涙を見られたくなかつた。大石の元氣さうな言葉の内に、最後のわかれの杯のやりとりだと云ふことが傳右衛門にわかつたからだ。

傳右衛門が居なくなると大石は云つた。

『今度は私がもう一杯もらはうかね。もうさうのめる時もあるまいから。』

大石はさう云つて愉快さうにのんだ。

百六　その前夜

二月三日夜、十時頃、その夜の宿直だつた吉弘嘉左衛門、堀内傳右衛門、それに細川藩の大目

附長瀬助之進が入つて來て大石等に改まつて云つた。
『唯今お上邸から御知らせがあつて明朝兩間に花を御遣しなさるさうで、御茶道衆が持參されるさうですから、よろしきやうに御とりはからひ下さい。』
大石はそれを聞くと、はつと思つたが、靜かにおちつきはらつて答へた。
『有難く戴き申します。どうぞお上によろしくおとりつぎ願ひます。いつも〳〵御親切に御心をかけられて私等一同感泣いたしてをります。』
大石達はこの傳へられた言葉で明日切腹になることにきまつたことを知つたのだ。
この時若い連中の室から小坊主が出て來て、傳右衛門に何か云つた。傳右衛門は隣りの室に入つた。こゝは年寄連中のやうに靜かにはしてゐなかつた。今日が今生においての最後の晩だと云ふことを知つた彼等は、おとなしくぢつとしてはゐられなかつた。
傳右衛門が入ると、皆、うれしさうな聲を出した。『今晩は一つ面白くすごしたいと思つて今、皆で相談してゐる處です、あなたも是非仲間にお入り下さい。』
『今日は一つ、皆で藝づくしでもやらうと思つてゐるのです。あなたも一つ入つて下さい。』

『酒でもとりよせませう。』傳右衛門は察しがよかつた。

秘密ではあつたが、それは公然の秘密だつた。誰もが、明日死んでゆく人々の喜びをさまたげようか。若いものたちは生死を忘れたやうに、うたつたり、をどつたりした。それでも初めは少しは遠慮してゐたが、その遠慮もなくなつて、彼等は年寄連が心配するやうに夜が更けるのも知らずに陽氣にさわいでゐた。

『とめませうか。』吉田は大石に氣がねして云つた。

『喜ばしておく方がいゝ。皆の喜んでゐる聲をきくと私達まで愉快になる。』

內藏助はさう云つた。彼は京都時分の生活を思ひ出してゐた。妻子のこと、お輕のこと、女のこと、若衆のことなぞ。彼はそれ等の思ひ出は惡いものではなかつた。彼は淚が出ない程度で、いろ〳〵のことを美しく思ひ出してゐた。彼等は自分が死んだことを知つたら泣いてくれるだらう。皆仕合せにしてゐるであらう。又それを自分は望んでゐる。

若い人々はなほさわいでゐる。彌兵衛は眠むいと云つて眠てしまつた。輕いいびきさへかいてゐる。

間も居眠りを始めた。あいつは死ぬことがきまつて、反つて安心してゐる。よろこんでさへゐる。

原は元氣さうにしてゐる。吉田も小野寺も、落ちつききつてゐる。見上げた奴等だ。この俺が一番生命の惜しい方らしい。だが長い間の修業はさすがに彼をあわてさせなかつた。

彼は床についても中々ねむれなかつた。

若い人々のさわぎも靜まつた。

主税はどうしてゐるだらう。可哀さうな奴だ。一目あつてやりたい。彼はさう思ふと泣きたくなつた。だが彼は今、泣きたいとは思はなかつた。その内に眠つてしまつた。

百七　切腹の命下る

朝はまもなくやつて來た。彼等は何事もないやうに、いつもの通りに起きた。いつもより念入りにうがひをつかひ、顏を洗つた。彼等は大石の顏を見るとにこにことした。いつもより丁寧におじぎした。大石は何か云ひたいやうな氣がしたが、何にも云へなかつた。心と心とが互に通じあ

つて言葉はこのさい不必要に見えた。

『いゝ天氣でございますね。』

なぞと元氣よく云ふものもあるが、彼は靜かに、

『本當に。』と云つた許りだ。彼は皆を今迄になく可愛いく思つた。今日一日と生きてゐられない人々だ。その立ちゐ振舞の普段とかはらないやうにするだけでも、一通りの努力ではないことを彼はよく知つてゐた。

皆死後の名を重じるからだ。赤穗の名をけがしたくないからだ。亡君の名譽を思ふからだ。

皆いつもよりも人間が一段と立ちまさつてゐるやうに見えた。

まだうすら寒くはあるが、しかしやがて春がくることがわかつてゐた。彼等は障子をあけて、いつもより念入りに掃除をした。小坊主があわてゝやつて來た。彼等は今日はいつもより快活さうにしてゐた。

その内に美事な花が活けられたまゝ運ばれて來た。

『美しい、美しい。』と若い連中は云つたが、それは反つてわざとらしくもあつた。

彼等は平氣だと云ふことをあまりに見せたがる。よろこんで死んでゆくことが出來るのかも知れないが、その反對に大石には感じられた。其處へゆくと、堀部彌兵衞や、間喜兵衞は落ちついてゐるやうに見えた。彌兵衞は本當に喜んでゐるのではないかと見えた。喜兵衞の方はよろこんでもゐないやうだつた。

傍から見るとさすがに大石は一番落ちついて見えた。しかし大石自身は、自分が一番臆病もののやうな氣がやゝもするとするのだつた。それだけ彼はわざとおちついてゐた。

朝食が運ばれた。いつもよりもなほ御馳走だつた。それがます〳〵今日の最後の日を語るのだつた。

大石は二間の間の襖をはづさせた。そして一同が並んで飯をたべた。

大石は云つた。

『皆、落ちついてゐるな。大石内藏助、すつかり感心した。』

『大夫樣の落ちつきは又かく別でございます。』

誰かゞさう云つた。

『おちつくより、仕方がないぢやないか。』大石はさう云つて笑つた。その笑ひが無心でない事が彼にはわかつた。

食事がすんだあと、彼等は思ひ思ひに死ぬ用意をした。あるものは辭世をかきつけるものもあつたが、大石は默つて靜かにしてゐた。彼はいろ／＼のことが頭に浮んでくるので困つた。彼はたゞ靜かに死にたかつた。

風呂の用意が出來たことが知らされた。大石は他の人に會釋して湯に入つた。彼は身體をいつもより念を入れて洗つた。彼は時々、時間を忘れかけた。彼は身體を洗つて出ると髮を結に人が來てゐた。彼は髮を結はせながら、自分の今日死んでゆく顏を鏡の中に見た。彼はいつもとはちがつて自分の顏を珍らしいもののやうに、又なつかしいもののやうに見た。彼は今自分の感情を殺すことに骨が折れた。彼は平氣な顏をしてゐたかつた。

髮が結へると彼は靜かに禮を云つた。そして彼は又無念無想に入るのだつた。

時のたつのは遲いやうで早かつた。待つてゐるやうで待たない時は、遠慮なくやつてくるのだつた。

その内に晝飯になつた。彼はさすがに食慾がなかつたが、食べて見ると、味覺は平常と變りなく、うまいものはうまかつた。彼はそれを嬉しく思つた。彼はいつもよりものの味をよく味はつてたべた。もう死ぬまでに、あと一度飯にありつけられるかどうかわからなかつたから。

午後になると何となくあたりが騷々しく、物々しくなつて來た。彼等は平常のやうに話をしてゐたが、今日死んでゆくものの話題はいつまで生きてゐるかわからぬものとは自づからちがはないわけにはゆかなかつた。

小野寺はつと大石のそばによつて云つた。

『大石殿、これが一生と云ふものでせうか。』

『さうと見えるね。』

『へんな氣がしませんか。このまゝ死んで行けばそれで一生が終るのだと思ふと。』

『そのへんなのが人の一生なのではないのかね。私達は之より他に生き方はなかつたのだから、滿足して死ぬより仕方がないと思ふね。』

『滿足して御死ねになりますか。』

『こゝだけの話だが、滿足して死にたいと思ふだけで中々滿足しては死ねない。名譽を失はず、傲りをきずつけずに生きられるものなら生きて見たいと思ふね。だがさう甘くはゆかないものだ。今になつて亡君の御氣持がよくわかる。私達は他に道がないので、どうせ死んでゆくのだから、名譽と傲りだけは失なはないで死にたいと思ふだけだ。』

『名譽と云ふものはそんなに大事なものでせうか。』

『不名譽は耐へられない。だがそれも考へやうによれば夢のやうなものかも知れないね。だが死後の名譽は私達にとつては生命より大事なものではないだらうか。あなたはさうは思ひませんか。』

『私も不名譽はいやで、平氣な顏をして死んでゆくのです。だが何か大事なことが一つかけてゐるやうな氣がするのです。』

『なにでせう。』

『私にはわからないのです。死ぬ瞬間にわかつてくれさうな氣がするのですが、あてにはなりません。天道通りに生きて來たのかどうか、それが私にはわからないのです。』

『他に道はなかつたのだから、仕方がない。私は滿足して死ぬ。』

『それを伺ふと、私もあなたに眞似て滿足して死んで見せます。』

原は來た。

『何のお話です。』

『何んでもない。滿足して死にたいと話してゐただけだ。』

『本當に私達は今日のために生きてゐたやうなものですね。之で私達の一生も目鼻がついたわけです。生命を惜しまない點だけが私達の强味なのですからね。』

『本當にさうだよ。』

大石はさう云つた。しかし同感したかどうか、大石も實は之が一生だとは思へないものが殘つてゐた。彼は何んだか淋しいのだ。誰かに最後に逢ひたいのだ。それは子供か、男か、女か、彼は知らなかつた。

時はたつてゆく。

夕飯が思はぬ時間に運ばれて來た。

さすがに皆、あまりたべる氣になれなかつた。腹をいくらかへらしておく方が、綺麗に切腹が出來さうな氣もした。なかには食べたくないのが腹が立つて、わざとたべた人もゐた。稍々もすると皆の氣が沈みさうに見えた。

皆、お互に元氣をつけたいと思つたが、何か云つても空々しく響いた。

大石も何か皆に力づけしたいと思つたが、默つてゐるより仕方がなかつた。しかしそれでは最後の食事があまりに陰氣になりさうだつた。其處で彼は云はないでもいゝことかと思つたが、云つた。

『私達の仲間四十六人のことを考へると、誰一人、臆病ものはない。一人々々のことを考へるとどれも立派に死にさうな者許りで、私はうれしくなるのだ。皆勇ましく死にさうな男許りだ。だがそのなかで一番喜んで死ぬのは彌兵衛老人で、一番平氣で死ぬのは間喜兵衛のやうな氣がするよ。』

彌兵衛と喜兵衛はうれしさうな顔をした。

この時、潮田又之丞が云つた。

『私達の仲間で一番美しく死なれるのは主税様だと思ひますね。』
『本當だ。』誰かさう云つた。皆も同感した。
『さう云つてくれるのはうれしい。親ながらあの子は見上げた處がある。背だつて私よりは高いがね。』
大石は笑つた。皆も愉快さうに笑つた。だが笑ひの内に死の影がさしてゐた。
『一番勇ましく死ぬのは安兵衞だらう。一番滿足して死ぬのは吉良殿の首を上げた間の子供だらう。しかしから一々名を上げるとどれもこれも立派に死にさうな男許りだ。私だけが一番臆病者の氣がするが、しかし私だつて皆に負けはしないつもりだがね。赤穗の義士は死ぬ時も見ともない眞似は出來ないからね。内匠頭殿の御最期の御立派さに我々もあやかりたいものだと思つてゐる。』
人々の決心はかたまつた。死んでもいゝと云ふ氣が、瞬間ではあるが、人々の心に浮んだ。
食事がすんでまもなく、接待係の一人、八木市太夫が見えた。
『先刻より御上使が來てゐられますから、御召物をお着かへになるやうに。』

『はい。』

小坊主が一同に淺葱無垢の麻裃、黒羽二重の小袖上下など持つて來た。人々は笑ひをふくみながら、最後の衣裳をつけた。

大石は『お花をおとりのぞけ下さい。』と云つた。

一同は御上使のくるのを席を正して待つた。御上使御來臨は告げ知らされ、御目附荒木十右衛門、御使番久永内記は細川侯の近侍を後に從へて靜かに入つて來た。一同は平伏した。十右衛門は、

『御上意。』と云つた。そして、

『淺野内匠頭儀、勅使御馳走之御用仰せ付られ置き候處、時節柄殿中をも憚からず、不屆の仕方に付、御仕置仰せつけられ、吉良上野介儀は御構ひなく差置き候處、主人の仇を報候と申し立、内匠頭家來四十六人徒黨いたし、上野介宅へ押込み、飛道具抔持參、上野介を討候始末、公儀を恐れざる段、重々不屆に候、之によつて切腹申付る者也。』

それから十七人の名がよみあげられた。一同平伏した。大石は、

『如何やうの重科にも處せらるべき處に、いゝすべ好く切腹仰せつけられ、あり難き仕合せに存じ奉りまする。』と云つた。

それは嘗て、內匠頭が云つたのと殆んど同じ言葉である。

御目附荒木は自分の役目を果すと、今度は親しさを見せて云つた。

『內藏助とは昨年赤穗で面談以來、變つた處で對面いたすな。』

と云つた。

『御意の通りで御ざいます。』

『之は私一人の考へで話すのだが、吉良左兵衛儀は、この度の仕方不屆につき領地を召上げられ、その上諏訪安藝守へ永の御預と相なつた。左樣含み置かれるやう。』

『左樣で御ざりまするか。それで心殘りは御ざりませぬ。』

義士達は思はず顏を見あはせ、會心の笑を見せた。

上使はすぐ席を立つて歸つていつた。

人々は左兵衛が安藝守にあづけられたことを知つて、反つてよろこんだ。自分達の死は覺悟の

前であつたから、その方は別におどろかなかつた。だがその喜びもながくはつゞかなかつた。
時はあわたゞしくたつてゆく。
御上使が歸ると、細川家の接件係の宮村團之進、長瀬助之進が入つて來た。
團之進は、細川家の人々が皆を生かしたく思つたのに、それが駄目になつて細川侯を始め一同ががつかりしたことを話した。そしてかうなつてはいたし方がないから、最後の仕度をされるやうにと主人からのことづけを話した。
團之進達ががつかりしてゐるので、大石の方が反つて慰め役をひき受けた。
『私達は元より生きられるとは思つてをりませんでした。又生きたいとも思つてをりませんでした。切腹をおほせつかつて、私達は反つてありがたいと思つてをります。内匠頭殿と同じ最期をとげることが出來るのは、私達にとつては殊にありがたいことで御ざいます。ですが私達は内匠頭殿の扶持を受けた者許りがあつまつて、主人の鬱憤をはらしたいと云ふ一心でやつたことなので、一人も他の方はまじへなかつたのに、徒黨をいたしとの御沙汰だけは、心外に存じました。』
大石は自分達の態度はまげなかつた。

自分達の心をつくした處をはつきりさせることは忘れなかつた。

團之進はそれをきいて感心したが、御上意の惡口は出來ないので默つてゐた。

大石はさう云つてしまふと安心したやうだつた。そして細川侯を始め、細川家の人々の限りない親切さに、彼等はしみぐ〵と感謝するのであつた。

百八　大石等の最後の言葉

最後の杯として、土器が持ち出された。人々は靜かに微笑をもつて最後の杯をかたむけた。

細川家の人々は彼等にあやかりたいやうに杯を所望した。人々はお互に愛しあひ、尊敬と感謝がすなほに心から心に響いた。涙ぐましい光景が其處に展開された。

細川家の人々は義士達に何か云ひのこすことはないかと云つた。

大石は云つた。

『さほどまでに仰せられるなら、私の從弟に大西坊と云ふのが、城州八幡に住んでをります。之におついでの時、おつしやつて戴きたく思ひます。今日の晴々した天氣と云ひ、誠に快く死に

就くことが出來たとおつしやつて下さい。そして次男の處にもことづけるやうに。』
吉田忠左衛門は、『私も誠に心うれしく死んでいつたと縁者伊藤十郎太夫にお話し下さるやうに。』
原惣右衛門は内藏助の名で同志内海道億に宛てた長い手紙と一つの辭世を出して見せた。其處には、
『かねてより君と母とに知らせんと、人より急ぐ死出の山路』
片岡源五右衛門は、先祖傳來の朱柄の槍を泉岳寺に殘しておいたのを遺族に渡してもらふことをたのみ、
間瀬久太夫は、
腹の工合がわるかつたのが、少しよくなつては來たが、萬一疎忽でもすると大變だとそのことだけを心配してゐた。
小野寺は、
京都の弓師太郎左衛門に今日のことを話し、それから妻にもことづけてほしいと云ひ、

間喜兵衛は遠慮しながら辭世を出した。

『草枕むすぶ假寢の夢さめて常世に歸る春の曙』

礒貝は老母のことをたのみ、

彌兵衛は、

『堀部甚之介へ飲めと仰せ附けられたい。』

とたゞ一こと云つた。……

百九　大石の切腹

細川家の大書院前の廣庭は義士達の切腹の場にきめられた。

大書院の上には屏風がおかれ、その前に御目附、御使番等が並び、少し下位に、細川家の家老達がならび、縁側には、公儀の御徒歩目附七人がならび、縁先には白砂がまいてあつて、その上に薄縁が敷かれ、その上に人々がならんでゐる。

もういつでも義士達がよび出されていゝやうに用意されてゐる。

検使の正面の庭には疊が三疊敷きならべ、その上に白布の蒲團がおかれてゐる。この蒲團は大石の血を吸ふのを待つてゐるわけだ。

義士達は自分の名をよばれるのを待つてゐる。最初に呼び出されるのが、大石内藏助良雄、その人である。

彼はさすがに落ちついたふりしてゐるが、平氣でゐるとは云へなかつた。だが彼は顏色はかへなかつた。

とう／＼時は來て、大石の名は呼び上げられた。人々は大石のくるのを注意して見てゐる。

大石ははつと思つた。だが彼は靜かに室を出ようとした。この時潮田がたまりかねて聲をかけた。

『あとから參ります。』

『お先に。』

二人の顏はあつた。潮田は今全身全心で大石を愛敬した。大石のために死んでもいゝと思つた。大石も潮田の顏を見ると元氣になれた。心と心が通じた。彼は靜かに歩いていつた。

人々は大石が淺葱の裃を着て、小姓に案内され、介錯人安場一平をつれて靜かにあらはれるのを見た。それは實にもの靜かであつた。人々は其處に勇士を見ることは出來なかつた。又罪人や、後悔してゐる人を見ることは出來なかつた。彼は平氣なのか、平氣でないのか人々は知らなかつたが、其處には謹み深い、靜かな、無心のやうな男を見た。彼は少しも喜んではゐないやうだが、悲しんでもゐないやうだつた。

どんな名優にもこの感じは出せまい。それは本當に死んでゆくものでないと、この凄い靜かさは出ない。

彼は心の內で亡き主人の辭世を口ずさんでゐた。

『風さそふ花よりもなほ我はまた、春の名ごりをいかにとかせん』

彼は今亡君のことを思つてゐるのだ。他のことは何も思つてゐるひまはなかつた。彼は、まうけの席についた。彼は檢使の方に一禮した。彼は靜かに雙の肩衣を刎ね、肌を押脫いだ。彼は三方を引よせた。彼の心はへんに澄んで來た。彼は小刀をとつて腹に擬した。

『えい。』

彼の首は簡単にとんだ。

百十　かくて本當に生き出した

かくて義士達四十六人は同じ日に、四ケ處で首をはねられた。

それで萬事はすぎたのである。

否、それから彼等は本當に生き出したのである。

（をはり）

（大石良雄奥付）

昭和七年六月十五日印刷
昭和七年六月二十五日發行
昭和八年三月二十二日 二十一版發行

定價壹圓參拾錢

著者 武者小路實篤

東京市本鄉區駒込坂下町四十八番地
發行者 野間清治

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

發行所 東京市本鄉區駒込坂下町四十八番地
大日本雄辯會講談社
（振替口座東京三九三〇）
電話小石川(85) 8080 8081 8082 8083 8084 8085 8086 8087 8088 8089 8090 8091 8092 8093 8094

天海地製本所

武者小路實篤先生著　尾竹竹坡畫伯裝幀挿畫

五十九版

二宮尊德

四六判函入美裝

定價一圓三十錢

送料十錢

小說の如く面白く立志傳の如く感銘深き大名著！

一讀何人も津々たる興味の中に、迷へる者は希望を、貧しき者は勇氣を、青年處女は行くべき道を、壯年者は致富繁榮の要訣を、更に識者は大衆指導の妙諦を會得することが出來る。

著者武者小路實篤先生は語る

幕末の人間の中、僕は二宮尊德が一番大人物だと思つてゐる。今彼の實行しようとしたことが實行されてゐたら、日本は世界で一番立派な安穩な國になつてゐたであらう。僕のこの本を通して、彼の人格、彼の努力精神が幾分でも人々の心に觸る事が出來たら實に喜びである……云々

正に本書こそは現下の難局打開を告ぐる曉鐘であり、人生の實相を示して眞の處世道を語る稀有の名作である。是非何人も一本を座右に備へられよ！

大日本雄辯會講談社發行圖書

佐々木邦著　脱線息子

大家の一人息子新太郎君と近代的令嬢秀子さんとの嬉しい、恥かしい戀と縁談の一喜一憂……明るくて上品で、をかしくて痛快な場面が續出！　讀み始めたが最後徹夜必至。

四六判　布装　函入　二・〇〇　・一二

佐々木邦著　新家庭双六

美男で無邪氣で、そのくせ妻君に頭の上らない良人君と、美人で馬鹿に頭が働いて中々の賢夫人令嬢子さんとの、トテモ甘辛な新婚風景を描いて、皮肉と諷刺の萬華鏡。

四六判　布装　函入　一・七〇　・一二

佐々木邦著　世間相人間相

ユーモアとウヰットから眺めた世間相や人間相はどんなものだらうか？　それを斯界の第一人者たる著者がその一流の妙筆で深切に敎へてくれたのが本書である。

四六判　布装　函入　二・三〇　・一四

岡本一平著　人の一生

奇想天外より來る諷刺と、最も洗煉された三百有餘の漫畫とを以て描き出された漫畫小說の大傑作。浮き沈みの激しい人生の奏でる哀と涙と笑の人生譚です。

四六判　洋装　函入　二・二〇　・一二

岡本一平著　へぼ胡瓜

人生のうらなりを以て自ら任ずる著者が、獨特な詩情で彩つた自傳小說、身邊雜記に名漫畫を配したもの。何れも深刻な人生觀と涙ぐましい微笑の藝術作品！

四六判　洋装　函入　二・〇〇　・一〇

吉川英治著　戀ぐるま

大坂落城の夜、ひそかに密命を帶びて逃走した荒木淀君姫子が、各地に潜む舊臣と呼應して江戸に迫るや、幕府隱密の討伐隊と虛々實々數奇な大冒險を展開する史外秘譚。

四六判　洋装　函入　一・五〇　・一四

吉川英治著　劍難女難

一藩の名譽を賭けた大試合で敗北した兄の仇に、奮起した美男新九郎が、絶え間なく降りそゝぐ劍難や女難の中に、見事將軍家御前で兄の怨を晴らす血涙の物語。

四六判　洋装　函入　二・五〇　・一四

村上浪六著　妙法院勘八

生を高貴の家門に得ながら、俠客になつた彼が、權勢に屈せず、弱きを助け強きを挫く仁俠道德、無禮な旗本も取つて押へるが、二人の美女の戀には流石にタジ／＼と。

四六判　布装　函入　二・二〇　・一二

村上浪六著　浪六名作選集

史實小說界の權威者浪六先生の作品の中から選びに選び抜いて眞に浪六式を發揮した傑作中の傑作十有八篇、何れも著者一流の妙筆に描かれて面目躍如。

四六判　クロース　函入　二・三〇　・一二

小島政二郎先生大快著

新版義士銘々傳

定價一圓六十錢（送料十四錢）

布製函入

[illegible] 小林源太郎 責任
[illegible] 增田專太郎 責任

東京本郷 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

著者は、この「義士傳」に於て生きた義士を語ることに努めてゐる。即ち『私達と同じ空氣を呼吸し、私達と同じ感情に生き、私達と同じ愛慾に悶え、私達と同じ官能に陶醉し、而もよく四十七人が一致團結して。敢然と義に赴いた「我等の義士」を描いた。』と云つて居ります。

忠烈、義烈、よく私心を滅却して一代の快擧を敢行した

義士達の涙ぐましい心情と、忍苦の眞生涯は、悉くこれ感激の縮圖！

大義の前には――切なる戀も、溫い肉親の情愛も、苦しい義理、人情も總て振り捨てた苦衷を誰か知る？

吾子を勵まさんが爲に、討入の夜に自刃してゆく老母あり、夫の奮起を促して、ひそかに死の路を辿りゆく不憫な妻と子あり、義士の爲には、身を殺し戀を捨てゝなほ滿足する可憐な處女もある。

これこそ、眞に血と涙に彩られた、……情味タップリな人間義士傳です

この切實、悲壯な物語は、わが小島先生の絢爛・巧緻の妙筆に生きて躍如――

日本人として、感激し、慟哭し、激憤し、共鳴せずにはゐられません。